

大宰府史跡

平成5年度発掘調査概報



平成6年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

平成5年度発掘調査概報

平成6年3月

九州歴史資料館



水城跡第24次調査南区西壁断面



水城跡第24次調査北区北壁積土状況

序

大宰府史跡発掘調査は第5次5ヶ年計画を実施中で、本年度はその第2年次にあたる。第5次計画は特別史跡水城跡の諸施設の解明を大きな目標の一つとするものである。

しかしながら、第4次計画（史跡観世音寺境内及び子院跡の調査）が実質上1年延長とならざるを得なかったこと、大宰府政庁南側の官衙推定地（観世音寺地区区画整理事業地）の住宅建設に伴って実施する発掘調査を現時点で実施しておかなければ将来発掘調査を実施することが不可能となるおそれが大きいことから水城跡の計画調査はこれらの調査と並行して実施せざるを得ない状況であった。

このため、水城跡の諸施設の解明を目標とした計画調査は、ほぼ1年遅れの状況下にある。

本書では、この状況下で実施した発掘調査のうち大宰府政庁跡南側不丁官衙地区と水城跡東門西地区で土塁の大宰府側基底部分で実施した発掘調査の概要を中心に報告する。

特別史跡水城跡の計画調査については、その指定地拡張の問題とも絡めて大宰府史跡調査研究指導委員会において、その実態の解明について強く求められていることでもある。幸いに大宰府政庁南側の住宅建設事業の事前の発掘調査件数も幾分減少していく傾向にある。今後、第5次調査計画の目標達成のため一層の努力をしたいものと考えている。

発掘調査にあたっては、大宰府史跡調査研究指導委員会の委員各位、文化庁の関係者各位には様々な御指導と御援助を頂いた。また、大宰府市教育委員会をはじめ地元住民の方々には種々の御協力を頂いた。ここに深甚の謝意を表する次第である。

平成6年3月31日

九州歴史資料館長 吉久勝美

例 言

1. 本書は平成5年度に福岡県が国庫補助を受けて、九州歴史資料館が発掘調査を実施した大宰府史跡発掘調査の概要報告であり、大宰府史跡第96次補足・147次・152次、水城跡第20次・24次の調査を掲載した。

なお、第150・151・155次調査については、顕著な遺構が検出されなかったので報告を割愛した。また、第153・154・156次調査については現在整理中であり、報告については次年度に譲る。

2. 遺構実測図は、国土調査法第II座標系をもとに基準点を設け作成した（昭和51年度発掘調査概報参照）。

3. 検出遺構及び出土遺物については、大宰府史跡調査研究指導委員の御指導と御教示を得た。

4. 水城跡第24次調査については、九州大学工学部水工土木学科林重徳助教授より土木工学的見地から御指導・御教示を得た。

5. 本文中の挿図は土器・陶磁器類を3分の1、瓦埴類は4分の1の縮尺を原則としている。

6. 本書掲載の写真は学芸第一課石丸洋の撮影による。

7. 本書の執筆・編集は調査課栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・吉村靖徳・小川泰樹により、掲載図面の製図には齋部麻矢・小田美和・今井涼子の助力を受けた。また遺物の復元整理作業は、大宰府史跡坂本発掘調査事務所において田崎道子・大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝の協力を得た。

目 次

I	はじめに	1
1	調査計画	1
2	調査経過	2
II	発掘調査	6
1	第96次補足調査	6
	検出遺構	6
	小 結	8
2	第147次調査	9
	検出遺構	9
	出土遺物	17
	小 結	50
3	第152次調査	52
	検出遺構	52
	出土遺物	52
III	水城跡の発掘調査	55
1	水城跡第20次調査	55
	検出遺構	57
	出土遺物	58
2	水城跡第24次調査	59
	検出遺構	60
	出土遺物	63
	小 結	67

插图目次

第 1 图	大宰府史跡発掘調査地域图	折込
第 2 图	第96次補足調査遺構配置图	7
第 3 图	SB2820柱掘形断面图	8
第 4 图	第147次調査遺構配置图	折込
第 5 图	掘立柱建物・柵、柱掘形断面图	10
第 6 图	SE4031・4033・4051・4052実测图	14
第 7 图	SX4045実测图	15
第 8 图	SX4055実测图	16
第 9 图	SB4046・4030A出土土器実测图	17
第10图	SD4037・4038・4042・4044・4054出土土器実测图	18
第11图	SE4031～33・4051・4052出土土器実测图	20
第12图	SK4056～59・4063出土土器・土製品実测图	22
第13图	SX4050出土土器実测图	23
第14图	SX4060・SX4062・4065～67出土土器・陶磁器・石製品実测图	25
第15图	暗褐色土層出土土器実测图(1)	27
第16图	暗褐色土層出土土器実测图(2)	28
第17图	暗褐色土層出土土器実测图(3)	30
第18图	暗褐色土層出土土器実测图(4)	31
第19图	暗褐色土層出土土器実测图(5)	32
第20图	茶褐色土下層出土土器実测图(1)	33
第21图	茶褐色土下層出土土器実测图(2)	35
第22图	茶褐色土下層出土土器実测图(3)	36
第23图	茶褐色土下層出土土器実测图(4)	38
第24图	茶褐色土下層出土土器実测图(5)	39
第25图	茶褐色土下層出土土器実测图(6)	40
第26图	茶褐色土層出土土器実测图(1)	41
第27图	茶褐色土層出土土器実测图(2)	43
第28图	軒丸瓦拓影	44
第29图	軒平瓦拓影	46

第30図	鬼瓦拓影	47
第31図	文字瓦拓影	48
第32図	SX4050出土木製品実測図	49
第33図	SX4055出土木樋実測図	49
第34図	不丁地区官衙主要遺構配置図	折込
第35図	第152次調査遺構配置図	52
第36図	第152次調査出土土器・石製品実測図	53
第37図	水城跡発掘調査地域図	折込
第38図	水城跡東門付近調査地域図	55
第39図	水城跡第20次調査遺構配置図・土層図	56
第40図	Aトレンチ出土土器実測図	58
第41図	出土軒平瓦拓影	58
第42図	水城跡第24次調査遺構配置図	折込
第43図	水城跡第5・8・10・24次調査遺構配置図	折込
第44図	SB080・100柱掘形断面図	62
第45図	基底部下位敷粗朶平面図・土層図	折込
第46図	各層位出土土器・瓦製品実測図(1)	64
第47図	各層位出土土器・土製品実測図(2)	66
第48図	出土軒丸・軒平・文字瓦拓影	67
第49図	水城跡第5・8・10・24次調査模式図	69

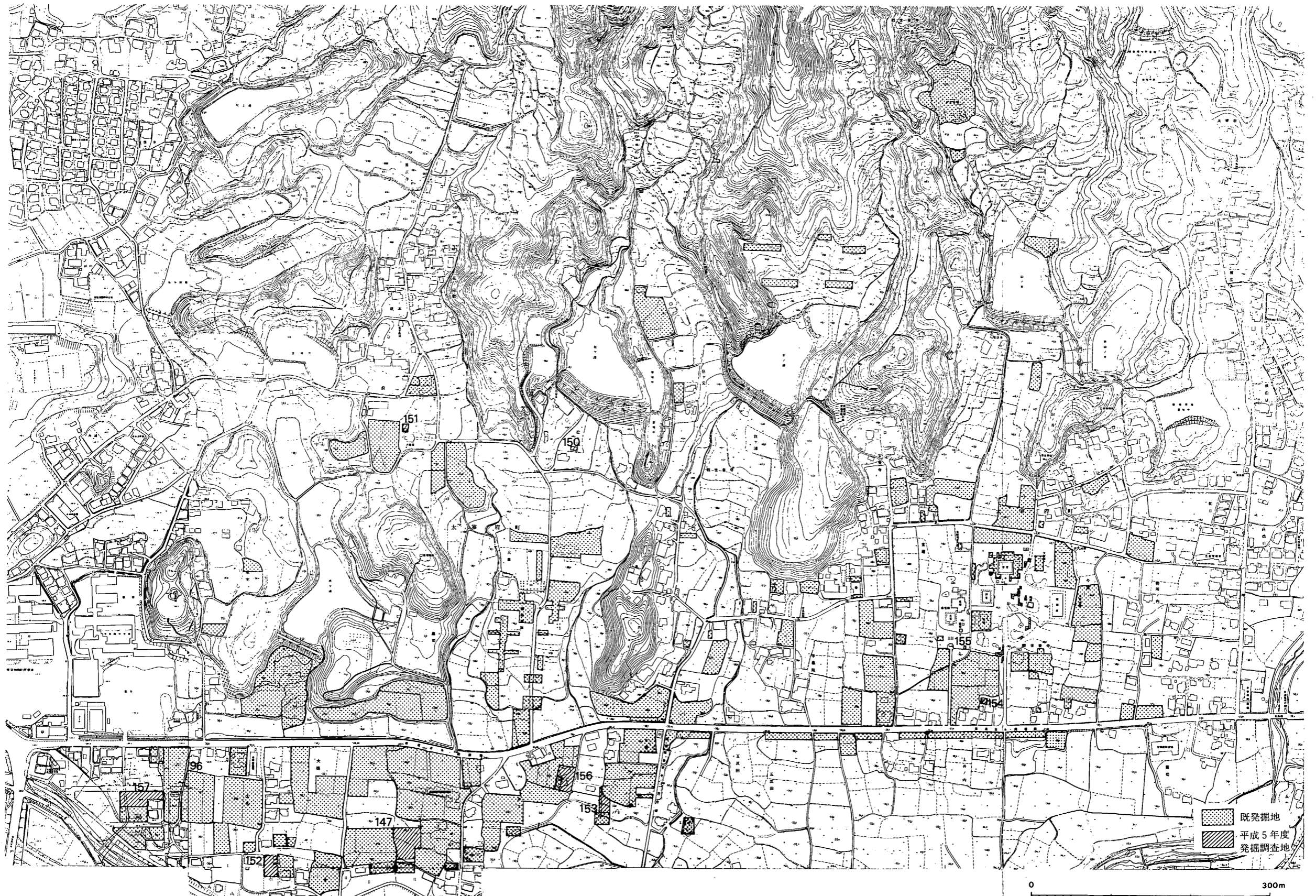
図版目次

巻頭図版 1	水城跡第24次調査南区西壁断面
巻頭図版 2	水城跡第24次調査北区北壁積土状況

図版 1	第96次補足調査区全景（南から）
図版 2	(上) 掘立柱建物SB2820、土壙SK2841（西から）
	(下) 柵SA2833（北から）
図版 3	(上) 掘立柱建物SB2820柱掘形（A）
	(中) 掘立柱建物SB2820柱掘形（B）
	(下) 掘立柱建物SB2825柱掘形

- 図版 4 第147次調査区全景（空中写真）
- 図版 5 第147次調査区西半部全景（空中写真 西から）
- 図版 6 (上) 第147次調査区西半部全景（北から）
(下) 第147次調査区西半部全景（東から）
- 図版 7 第147次調査区北側掘立柱建物群（空中写真）
- 図版 8 (上) 掘立柱建物SB2435、柵SA4036（西から）
(下) 掘立柱建物SB4030A・B（西から）
- 図版 9 (上) 掘立柱建物SB4035A・B、土壙SK4058（西から）
(下) 掘立柱建物SB4040（東から）
- 図版10 (上) 掘立柱建物SB4030A柱掘形(1)
(中) 掘立柱建物SB4030A柱掘形(4)
(下) 柵SA4036柱掘形
- 図版11 (上) 井戸SE4031・4032（西から）
(下) 井戸SE4031（北西から）
- 図版12 (上) 井戸SE4033（西から）
(下) 井戸SE4052（北西から）
- 図版13 (上) 井戸SE4051（南から）
(下) 井戸SE4051細部（南から）
- 図版14 (上) 流路SX4050（北から）
(下) 溝SD4037・4054、SX4045（南から）
- 図版15 (上) SX4045東半部（東から）
(下) SX4045東半部土層断面（南から）
- 図版16 (上) 溝SX4045西半部（東から）
(下) 暗渠施設SX4055（西から）
- 図版17 (上左) 第150次調査区全景（北から）
(上右) 第151次調査区全景（西から）
(下) 第152次調査区全景（北から）
- 図版18 第147次調査SB4046、SD4037・4038・4042・4044・4054、
SE4032、SK4056出土土器・陶磁器
- 図版19 第147次調査SK4057・4058、SX4050・4060・4065～4067出土土器・石製品
- 図版20 第147次調査暗褐色土層出土土器(1)
- 図版21 第147次調査暗褐色土層出土土器(2)
- 図版22 第147次調査暗褐色土層出土土器・硯・土製品(3)

- 図版23 第147次調査茶褐色土下層出土土器(1)
- 図版24 第147次調査茶褐色土下層出土土器・硯・土製品(2)
- 図版25 第147次調査茶褐色土下層出土土器・陶磁器・土製品・石製品(3)
- 図版26 第147次調査茶褐色土層出土土器・陶磁器・土製品・石製品
- 図版27 第147次調査出土軒丸瓦
- 図版28 第147次調査出土軒平瓦・鬼瓦
- 図版29 第147次調査出土文字瓦(1)
- 図版30 第147次調査出土文字瓦(2)
- 図版31 第147次調査出土文字瓦(3)
- 図版32 (上) 第147次調査SX4050出土木製品
(下) 第147次調査SX4055出土木樋
- 図版33 (左上) 水城跡第20次調査区全景 (北東から)
(右上) Aトレンチ全景 (西から)
(右下) Bトレンチ全景 (北東から)
- 図版34 水城跡全景 遠くに大野城跡を望む (空中写真 西から)
- 図版35 水城跡第24次調査区全景 (空中写真)
- 図版36 (上) 掘立柱建物SB080・100 (空中写真)
(下) 掘立柱建物SB100 (北から)
- 図版37 (上) 発掘区南半部 (北から)
(下) 掘立柱建物SB090 (東から)
- 図版38 (上) 掘立柱建物SB080柱掘形(2)
(中) 掘立柱建物SB100柱掘形(3)
(下) 掘立柱建物SB100柱掘形(9)
- 図版39 (上) 北区西壁断面全景 (南から)
(左下) 北区粗朶出土状況 (南から)
(右下) 粗朶出土状況近景
- 図版40 南区西壁断面全景 (南から)
- 図版41 (上) 南区西壁断面 (北から)
(下) 南区西壁断面 (部分)
- 図版42 水城跡第20・24次調査出土土器・土製品
- 図版43 水城跡第20・24次調査出土瓦類



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図

I はじめに

1. 調査計画

本年度は第5次5カ年計画の第2年次にあたる。第2年次の調査計画は特別史跡水城跡の諸施設の解明を目標とし、西門地区を中心とする発掘調査計画であった。しかし、平成4年度に実施した計画調査は第4次計画の一番中心となる部分の調査(史跡観世音寺境内地の発掘調査)で、時間的にも長時間を必要としたため、特別史跡水城跡の太宰府市側基底部(水城跡第24次調査)に着手したのは3月11日である。本年度は初年度調査の残りを含め第2年次調査計画をどの程度実施できるかの問題が当初からあった。加えて、特別史跡大宰府跡南側官衙推定地の緊急調査の実施要請を受けている件数8件と史跡地内の現状変更申請に伴う調査が見込まれていた。

これら予定されている事業のすべてについて発掘調査を実施することは不可能であるが、特別史跡大宰府跡南側の不丁地区官衙域については、現時点で開発に対処しない限り今後この地区の遺構の調査を実施する機会はないと考え、特別史跡水城跡の調査と同等に取り組む計画(下表)を立案した。

平成5年度の大宰府史跡調査研究指導委員会は、5月20日・21日の両日、九州歴史資料館で開催した。会議では特別史跡水城跡について太宰府市教育委員会が中心となった指定域の拡張計画を進めていることもあって、水城跡の発掘調査に取り組むことについては良しとしながらも政庁南側官衙推定地の調査が多いことに対し懸念する意見もあった。調査計画としては承認して頂いた。

なお、水城跡の調査方法についても有益な御助言を頂いたが、水城跡の指定拡張問題に関連して、買取・発掘調査・整備事業の一連となった計画を遂行することなど地元行政に対する指導意見があった。

	区分	場所	面積 (㎡)		備考
1	水城跡	東門西地区	1,000	太宰府市大字国分字衣掛226他	
2		(瓦窯・大宰府側基底部) 西門及び大宰府側基底部	1,500	" 大字吉松字土居180他	
3	大宰府跡	政庁後背地	8	太宰府市大字坂本字松ヶ浦603他	現状変更
4	政庁前面官衙・ 官人居住域	不丁地区	1,300	太宰府市大字観世音寺字大楠323他	緊急調査
5		政庁前面広場	600	" " 字不丁272-9	"
6		大楠地区	258	" " 字大楠321	"
7		日吉地区	300	" " 字日吉256-1	"
8		広丸地区	878	" " 字広丸355-10	"

	区 分	場 所	面積 (㎡)		備 考
9	政庁前面官衙・ 官人居住域	広丸地区	1,000	太宰府市大字観世音寺字広丸355-1	緊急調査
10		広丸地区	270	” ” 字広丸350-6	”
11		政庁前面広場	279	” ” 字不丁286-4	”

2. 調査経過

本年度の発掘調査は計画調査に加え緊急調査の件数が増加し、ほぼ年間を通して二ヶ所の調査現場を並行し発掘調査を実施するような経過となった。

3月に着手した水城跡第24次調査を新年度当初から継続して調査を行なった。水城東門跡推定地付近で国道3号線の西側、木樋暗渠埋設地点の西側隣接地である。1930(昭和5)年の木樋の発見や東門の門礎が残されている旧道で1968(昭和43)年に工事によって柱座を残す礎石の発見があった。これをもとに九州歴史資料館でも1975(昭和50)年に木樋暗渠埋設状況の調査や、1978(昭和53)年には今回の調査区南側隣接地において木樋暗渠取水口との関連を追究する目的で調査を行なっている。水城跡としては最も周囲の遺構が解明されてきた部分の調査である。

4月半ばから水城跡の調査と並行して政庁前面不丁地区官衙域の発掘調査に着手した。これを第147-2次調査と呼ぶ。第147次調査は前年度に東半部の調査を終了している。調査区の周囲は、第84・85次調査区(1983年調査)、第98・104次調査区(1986年調査)、第129次調査区(1991年調査)に囲まれており、不丁官衙推定地の中央で調査が残っていた部分であった。この調査で不丁地区官衙推定地の大部分が終了する。

4月には他に現状変更に伴う調査として、特別史跡大宰府跡の政庁北側で発掘調査1件(第150次調査)があった。ここでは過去、隣接地で平安時代の瓦窯跡が調査されていたが、調査面積も狭く取り上げて報告すべき遺構の発見もなかった。今回の概要報告からは除いている。また、太宰府市が坂本地区から政庁北側を通して学業院地区に至る下水道工事の立会調査を行った。やむを得ず地山を削る部分もあったが、問題となるような遺構の発見はなかった。

さらに4月下旬から6月にかけて特別史跡水城西門跡付近(太宰府市吉松地区)で指定境界に沿って下水道工事が実施された。この工事計画は住宅密集地ではあるものの現在太宰府市教育委員会が推進している水城跡の指定拡張計画地のなかにあり、特に西門跡以西では土塁基底部上に工事が計画されたため水城跡指定地内の発掘調査を担当してきた九州歴史資料館にも意見を求められた。このことから九州歴史資料館も太宰府市教育委員会と共に工事計画の変更を含め太宰府市と三度の協議を行った。結果として、下水道工事を実施する場所としては市道の範囲以外では実施できず、迂回させようとする部分は民地だけであり、やむを得ない工事であ

るとの結論となった。

但し、工事の場所が水城跡本体の内であるから工事に合わせて発掘調査を実施すること、水城跡に関連する重要な遺構が検出された場合には工事を中止して文化庁・福岡県の指示を仰ぐことを条件とした。この発掘調査を九州歴史資料館も太宰府市教育委員会と協力して実施した。発掘調査の結果については太宰府市教育委員会が今年度に刊行予定の『水城跡』（太宰府市の文化財第24集）に収録している。この調査は断続的に6月まで続いた。水城跡第25次調査である。

5月には観世音寺戒壇院本堂の解体修理が開始された。1990(平成2)年の17号台風、1991(平成3)年の19号台風で破損した本堂の修理工事である。屋根瓦はすべて葺き替えることとなった。屋根瓦(およそ20000枚程)は江戸時代以降のものであるが、観世音寺境内地の発掘調査で江戸期の瓦類が多数出土していることから比較資料として調査することとした。この調査は現在も継続している。

6月から10月にかけては、水城跡第24次調査と第147-2次調査を継続して実施していた。今年に限って6・7月は長梅雨が続き、7月末から8月にかけて三つの台風が来襲したため、発掘作業は大きく遅延した。

この間に、特別史跡大宰府跡政庁北西にある民家改築の現状変更申請に伴う第151次発掘調査を実施した。ここではごく限られた範囲の発掘調査を実施しただけに留まっているが、周囲の地形の状況と発掘調査の結果から旧家屋が建築された時点で地下げされ、既に遺構は消失したものと判断されたために本書の概要報告からは削除している。

6月下旬、太宰府市の要請により観世音寺土地区画整理事業に伴って太宰府市観世音寺字丸九地区第96次調査区(1986年調査)の東側の里道部分の発掘調査を実施した。この調査を第96次補足調査と呼ぶ。この調査では第96次調査で調査区を越えて東に伸びる東西棟SB2825の新たな柱穴が検出され、桁行7間分までを調査したがさらに東に伸びていること、建物と考えていたSB2825が柵列であったことなどが確認できた。

第147-2次調査は10月下旬に終了した。この調査に引き続き、太宰府市観世音寺大字大楠地区の家屋新築予定地の発掘調査を実施した。第138次調査区(1991年調査)の西隣接地である。第138次調査関連の遺構が遺存していると予想されたが、特に目立つ遺構はなかった。第152次調査である。

11月に入り、水城跡第24次調査では、実測・柱穴の断割り調査後、調査区内で水城土塁に直交するトレンチを設定し、水城基底部の断割り調査を実施した。この断割りされた土塁基底部は積土が良好な状況で確認された。さらには本体の高い部分に近い位置で、大宰府側水田のレベルと同程度の深さに敷粗朶がされていることが判った。平成4年度の大宰府史跡調査研究指導委員会において、水城跡の調査を単なる考古学的な発掘調査だけでなく、古代における大土木工事の事例でもあるから土木工学的側面からの調査も実施すべきであるとの指導助言を得て

いた。土木工学的視点から水城跡の調査をどのように進めるか大きな課題となっていたが、土層断面実測がほぼ終了した段階で、九州大学工学部水工土木学科林重徳助教授に現地視察をお願いした。現地視察をして頂いた結果、土塁の押盛土や敷粗朶を用いる工法は非常に理にかなった工法であるとの感想を伺うことができ、またボーリング調査が必要であることなどの助言があり、今後の調査についても援助・協力を約束して頂いた。水城跡の今後の調査計画にあたっては、林助教授の助言も得て立案したいと思っている。12月末、土層断面を調査したトレンチの積土層の剥取り調査を実施し、1月に入って埋め戻し作業を終了している。

第152次調査に引き続き政庁南側の官衙域の調査は、太宰府市観世音寺字日吉で実施した。この調査区は第80次調査区（1982年調査）の一部を含む。第80次調査区は、その調査結果から日吉地区官衙と呼ばれている部分である。調査区の南側は第143次調査（1992年調査）の結果、御笠川の氾濫原で遺構は削平されていた。この調査では第80次調査で柵列として報告していた遺構SA2245が建物であることなどが判った。第153次調査である。調査を12月中に終了し、1月に入って埋め戻した。遺物整理中であり、来年度の報告予定である。なお、日吉地区官衙域の調査は南東部が御笠川の氾濫原となっており、遺構の残存が期待できず、今後は北西部分の調査が必要である。

1月に入って、史跡観世音寺参道西側で現状変更申請に伴っての発掘調査を実施した。第111次調査区（1988年調査）の東南部隣接地である。検出された遺構も第111次調査で見つかった東西溝SD3300の東側延長部などが検出されている。第154次調査であるが、これについては来年度に概要報告する予定である。1月下旬に調査を終了し、埋め戻している。

第154次調査と併行して戒壇院南面築地を修復する事前の調査として観世音寺南面築地跡の調査を実施した。現存築地は、昭和13年に基底部分を石積し構築したと言われており、石積部分を残して北側にトレンチを入れた。ここでも観世音寺南面築地の積土など築地に関連する遺構は検出されおらず過去に行なった第122次調査（1990年）・第130次調査（1991年）の築地調査と同様な結果となっている。第155次調査である。

1月下旬に入って、太宰府市観世音寺日吉地区で第156次の調査に入った。調査区の周辺では第58次調査（1978年）・第73次調査（1980）・第82次調査（1982年）の結果から、政庁前面の広場と考えられたきた。今回の調査結果もこれを裏付けた結果となった。調査は2月上旬に終了した。

第157次調査を3月に入って太宰府市観世音寺字広丸で開始し、現在発掘調査を進めている。以上が平成5年度の調査経過である。

本書では、第96次補足調査、昨年実施した第147-1次調査と、本年調査した第147-2次調査の概要を中心に、第152次調査概要・水城跡20次調査・水城跡第24次調査を報告する。

なお、本年度は九州歴史資料館が昭和48年2月に開館して20周年目にあたる。この記念行

事として10月26日～11月28日までの間、特別展『日本の鬼瓦』展を開催した。この展覧会の推進役を調査課が担当した。大宰府出土の鬼面文鬼瓦を展示の中心に据えた展覧会である。陳列品の借用・返却・陳列・撤収等の作業のため発掘調査にも多少影響があったものと思う。一年を振り返る時、多忙であった。今後は多少なりとも遺構・遺物をじっくり直視できるような調査計画を実施したい。

調査次数	調査地区	調査面積㎡	調査期間	備考	※
96次補足	6 AYQ-A-V	200㎡	930625～930728	官人居住区推定地	10
147-2	6 AYM-B-Q	1,300㎡	930414～931022	不丁地区官衙	4
150	6 AYT-B-B	6㎡	930413～930419	政庁北部	3
151	6 AYT-A-K	2㎡	930616～930701	政庁西北部	
152	6 AYM-C-N	140㎡	931027～931104	官人居住区推定地	6
153	6 AYI-C-T	220㎡	931104～931227	日吉地区官衙	7
154	6 KKZ-B-P	20㎡	940111～940124	観世音寺前面	
155	6 KKZ-A-F	4㎡	931224～940124	観世音寺南面築地	
156	6 AYI-D-V	440㎡	940111～940218	政庁前面広場	5
157	6 AYQ-A-Q	320㎡	940113～	官人居住区推定地	8
水城24次	6 AMK-D-A	660㎡	930311～940117	東門西地区	1
水城25次	6 AMK		930423～930601	西門付近基底部	

※は前掲表の番号に対応する

II 発掘調査

1. 第96次補足調査

本調査地は太宰府市大字観世音寺1180番地に所在する。大宰府政庁の中軸線から西に430m程の所、現在の県道関屋・山家線に南接する地点である。ここは昭和60年度に観世音寺地区地区画整理事業に伴って調査をしており(第96次調査)、今回住宅建築の申請が出されたのを機会に、当時調査をすることができなかった東西幅約5m、南北長45mの道路部分200㎡あまりを前回の補足として発掘調査を行った。第96次調査地とそのさらに西に接する第142次調査地では8～11世紀にわたる掘立柱建物11棟を確認している。そのうち、SB2820とSB2825は本調査地内に延びることを想定していたため、今回の調査ではその範囲を確認することを念頭においていた。

平成5年6月25日に重機による表土剥ぎを行い、7月8日から作業員を投入して遺構検出作業を開始し、すべての作業を終了した後7月28日に埋め戻しまで完了した。

検出遺構

今回の調査区内からは、SB2825の東に延びる柱穴を検出したほか、SB2820としていたものが建物ではなくて柵であった事を確認し(SA2833)、また新たに一棟の掘立柱建物を検出した。

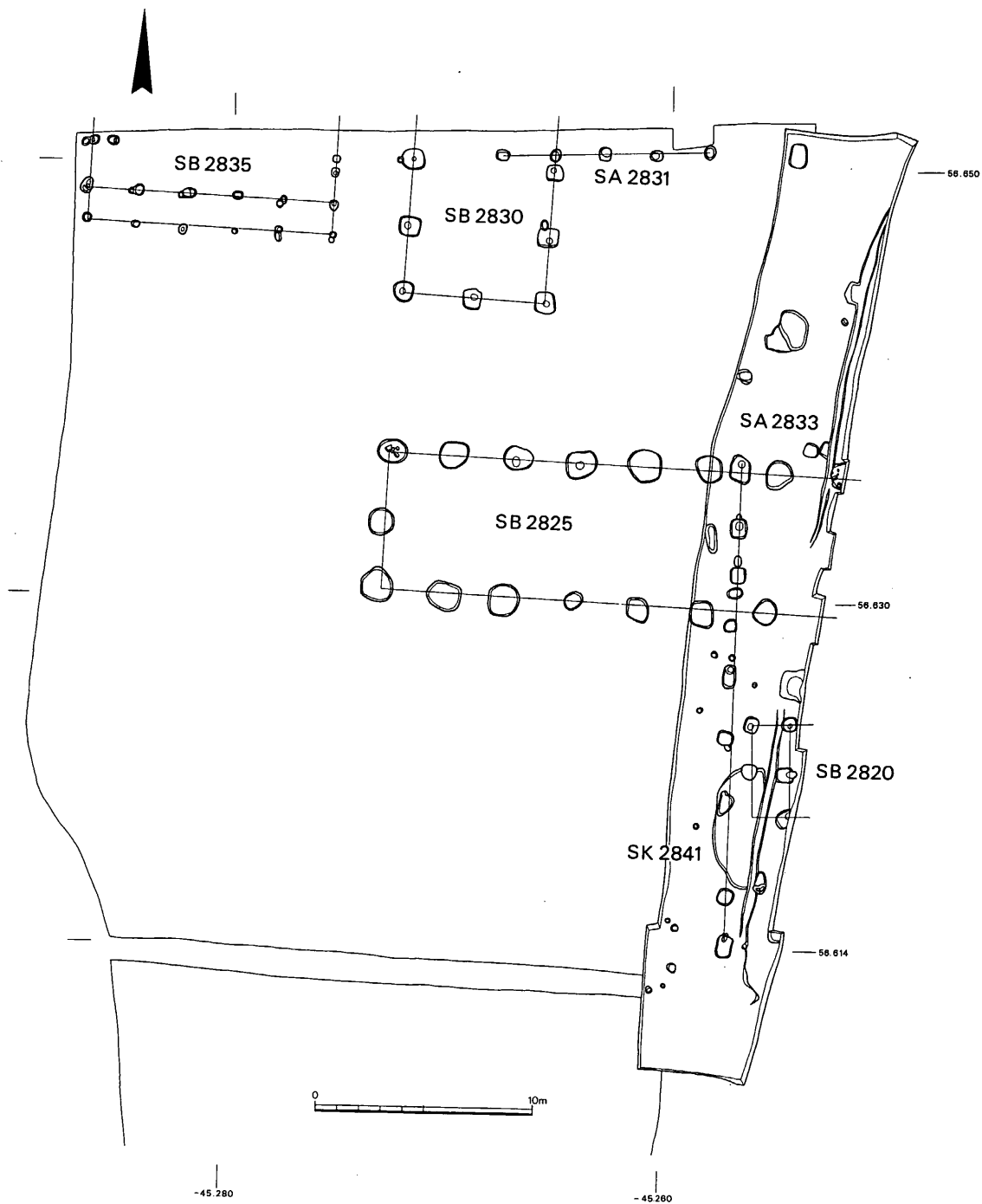
掘立柱建物

SB2820 調査区の中央やや南寄りで検出した。南西隅の柱掘形は、土壌に切られているが、南北は2間で、東西2間以上の総柱建物の可能性が高い。柱間は東西が1.8m(6尺)、南北は北側の柱間が2.25m(7.5尺)、南側が1.95m(6.5尺)と北の柱間がやや広い。さらに北側の2つの柱掘形底では石を敷いて礎盤としていた。第96次調査でSB2820としたものは建物ではなくて柵であることが確認されたため、遺構番号を変更し今回新たに検出したこの建物にその番号を付した。

SB2825 第96次調査では梁行2間で桁行は5間分までを確認していたが、今回の調査で東側にさらに3箇所の柱掘形を検出することができた。調査区を一部拡張して東側梁中央の柱掘形を探してみたが、確認することができなかった。このことから、この建物はさらに東に延び、桁行は8間以上となることが想定される。

柵

SA2833 96次調査でSB2820としたものである。前回の調査では5間分の柱穴を確認しており、北と南の1間分の柱間が2.84m(9.5尺)で、他の柱間が約7.5尺となることから、南北両端の柱間が広く、中央3間分が狭い桁行5間の東側に梁の延びる建物と考えた。しかし、その東

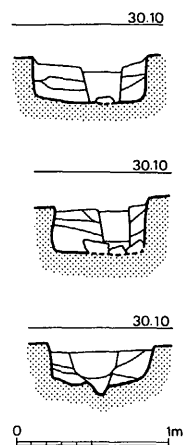


第2図 第96次補足調査遺構配置図

側には柱穴がなく、代わりに南にさらに延びる柱穴が検出された。北から7番目と8番目の柱穴は後世の土壌によって切られているが、都合9間の南北方向の柵と考えることができる。北から1番目と5番目の柱間が9.5尺とやや広く、あとは7～8尺になる。広い部分に入口等何らかの意味付けを考えることも可能であろうが、柵の柱間の寸法が必ずしも揃っているかどうかは疑問である。

小 結

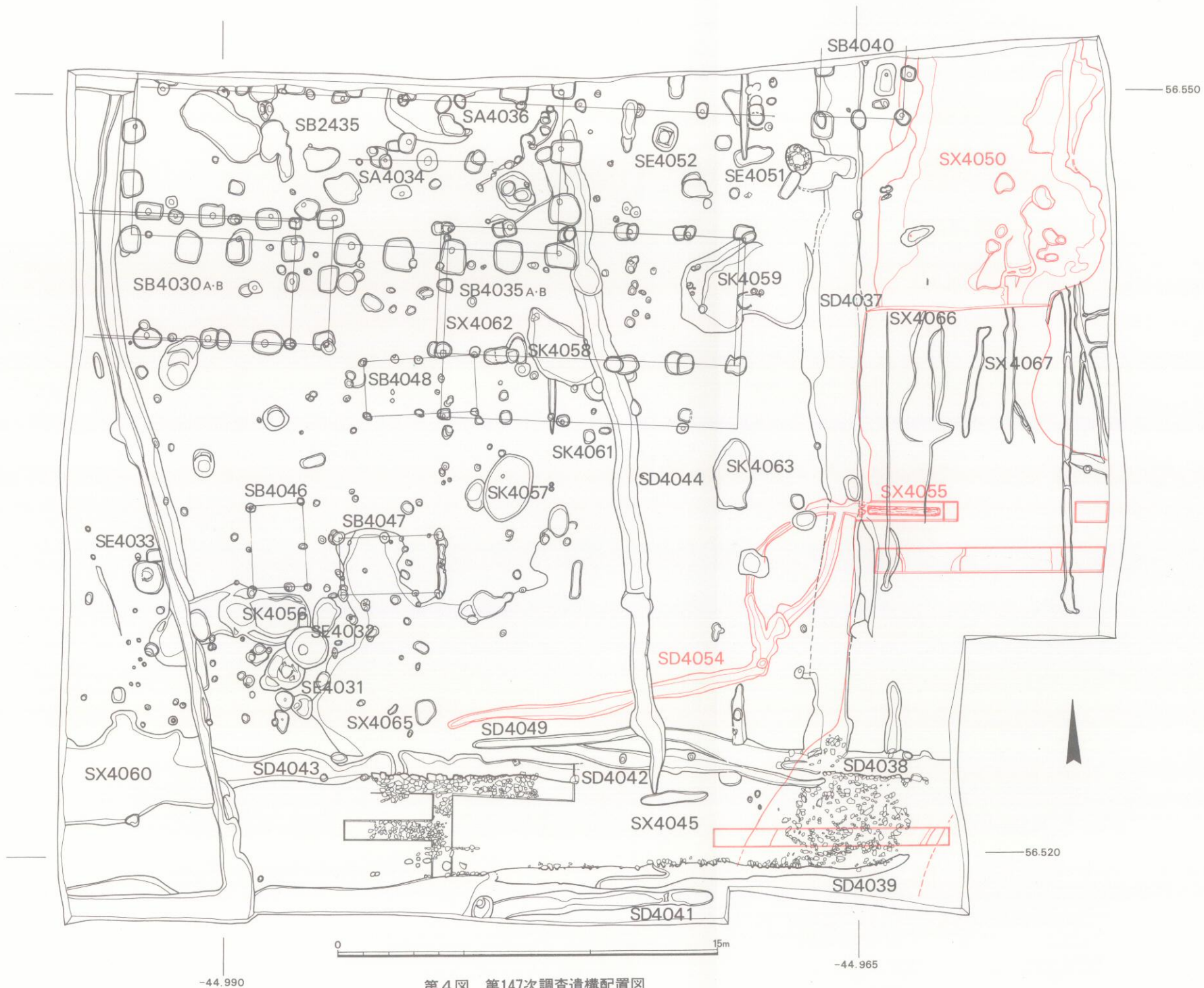
調査の結果、SB2825の建物規模を確定することはできなかったが、新たに建物を1棟を検出し(SB2820)、SA2833が柵であることを確認した。広丸地区では8～11世紀の建物の変遷がみられ、I～IV期に分類している。今回の調査地区内ではSB2825がI期で8世紀後半以前に、SA2833がII期^(註)で8世紀後半頃にあたる。SA2833のように短い柵は区画というより目隠し堀と考えるのが自然であり、片側に隠すべき施設があるのが一般的である。SA2833とSB2820は一見方向が揃っているようにも見える。しかし、SA2833は主軸が北から1°15′東に振れており、一方SB2820は逆に1°15′西に振れている。SA2833に伴う建物はさらに東側にあるとみるべきであろうか。SB2820からは遺物の出土がなく、その時期を確定し難い。しかしながら柱掘形の形状などには古い要素がみられることから、II期のSA2833よりは遅れるとしても9世紀後半のIIIa期まで降るとは考えにくい。あるいはII期とIII期の間にくるものかもしれない。



第3図
SB2820柱掘形断面図

註 九州歴史資料館『大宰府史跡－昭和60年度発掘調査概報』1986

九州歴史資料館『大宰府史跡－平成4年度発掘調査概報』1993



第4図 第147次調査遺構配置図

2. 第147次調査

本次調査はアパート建設に伴う事前の発掘調査として行なった。調査地番は太宰府市観世音寺323番地-1・2。調査面積は1300㎡。調査地は大宰府政庁跡の西にある蔵司丘陵の200m程南側、不丁地区に位置する。この不丁地区は、政庁の周囲に配される官衙の中でも比較的調査が進んでいる部分で、これまでの調査で20棟程の建物跡を確認している。また官衙域の区画施設についても次第に明らかになってきている。

今回の調査区を挟んで、その北側と南側では若干遺構の様相が異なっている。ともに掘立柱建物を確認しているが、北側では柱掘形が方形で大きく、しっかりしていて官衙的であるのに対し、南側では円形で柱の径自体も小さい。このような建物の規模の違いが府庁域の内か外かということに起因する違いである可能性もでてきた。今回はその間を埋める不丁官衙域の南半部分の調査であるため、建物遺構の広がり・規模の確認と性格付け、不丁官衙域の南側区画施設の検出などを主な目的として調査を実施した。

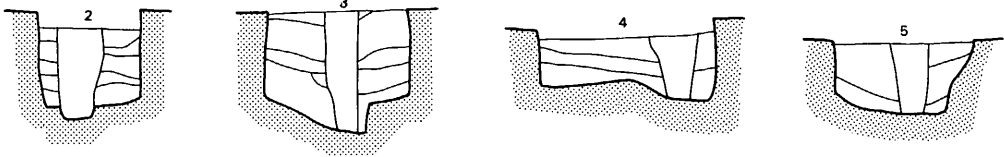
調査は廃土置場の確保が困難であったため、まず東側から着手し、反転して西側を行うという手順をとった。東側部分は平成4年10月8日に着手し、翌2月10日に終了した。西側部分については平成5年4月14日に開始した。当該地の調査は水城跡の調査と並行して行ったため、作業員数が半減し思うように進捗しなかった。この様ななかで、掘立柱建物・柵の柱掘形の断ち割り等の精査を含め調査が終了したのは10月22日であった。なお、暗渠遺構SX4055の木樋と底板については、調査終了後取り上げ、実測・写真撮影をおこなった。

検出遺構

発掘調査の結果、検出した主な遺構は掘立柱建物9棟・柵1条・溝5条・井戸5基・土壙5基・流路1条・道路或は築地の基礎部分と考えられる遺構（SX4045）などである。遺構の時期は8世紀前半～10世紀代にわたる。このうち奈良期の掘立柱建物は発掘区の北半部に集中しており、南端部にはSX4045が東西方向に走るとい配置をとる。続く平安期には掘立柱建物の他に発掘区中央部に南北溝が走っている。検出した井戸はすべてこの時期のものである。なお、発掘区の西側で検出した南北溝は土地区画整理事業前の旧畦畔に伴うものである。遺構面は北から南に向かって緩く傾斜し、発掘区の北端部と南端部で1m程の高低差がある。基本層序はマサ土（盛土）→黄褐色粘質土層（盛土）→茶褐色粘質土層（遺物包含層）で、遺構は茶褐色粘質土層を除去した後に確認できた。発掘区の北東部から西南部にかけてはもともと幅10m以上の流路が走っており、この部分は暗褐色粘質土で人為的に埋めて周囲と高さをそろえている。この整地層部分を一部掘り下げたところ厚さは50cm程あり、さらに下層には灰褐色の自然堆積層（遺物包含層）がみられた。その下は、黄灰色の砂礫層となる。

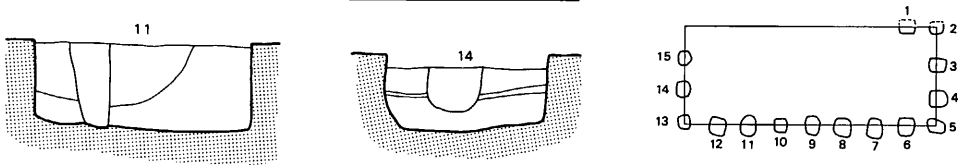
SB2435

32.20



SB2435

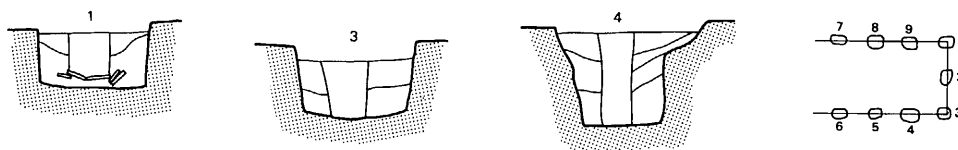
32.20



SB4030A

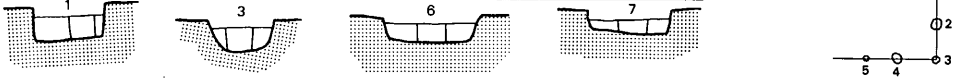
32.20

32.00



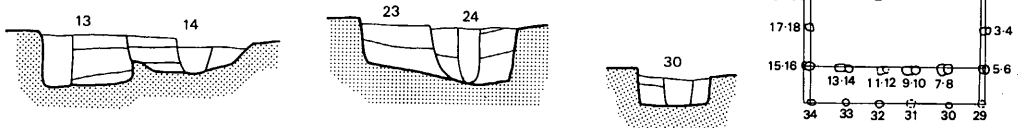
SB4030B

32.00



SB4035A B

32.20



SB4040

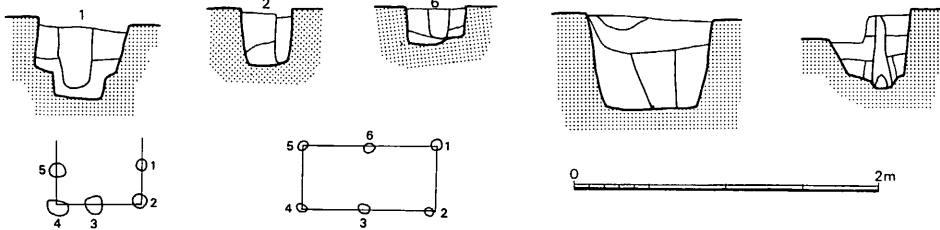
SB4048

32.00

SA4034

SA4036

32.20



第5图 掘立柱建物・柵、柱掘形断面图

掘立柱建物

SB2435 発掘区の北西端に位置する。SB4030AB・4035AB、SA4034・4036と重複し、東梁側はSD4044に切られる。第84次補足調査で既に確認していたが、今次調査で梁行3間(6.35m)×桁行8間(16.9m)の東西棟建物と判明した。方位は東に2°45′振れている。掘形検出時には埋土に違いが認められ、柱を抜き去ったものと考えていたが、東梁側及び南桁側掘形で径0.2m程の柱痕跡を確認しており、柱間は梁・桁側とも2.11m(7尺)等間である。柱掘形は一边0.85~1.2mの隅丸長方形を呈し、深さは残りの良いもので0.8mを測る。

SB4030A・B SB2435の南西側に重複して位置する。梁行2間(4.9m)、桁行は西側が削平されるため現状で3間(7.25m)であるが、SB4035Aと柱筋・梁行と等しくすることから同規模の5間に復原されよう。方位はSB2435同様、東に2°45′振れている。すべての柱穴に柱痕跡を確認しており、柱間は桁行2.42m(8尺)、梁行は2.45m(8尺)である。柱掘形は一边0.7~1.0mの隅丸長方形を呈し、深さは残りの良いもので0.6mを測る。柱痕跡は0.2~0.28m程で、柱穴1の基底部には平瓦を敷いて礎盤としている。

4030Bは4030Aの1.5m西側で、柱筋を重複して検出した。梁行は2間(4.9m)、桁行は西側が削平されるため現状で2間(4.7m)であるが、SB4035Aと柱筋・梁行・柱間を等しくすることから5間に復原される。方位は東に2°45′振っている。すべての柱穴に柱痕跡が確認され、桁行が2.35m(約8尺)、梁行は2.45m(8尺)の柱間を測る。柱掘形は一边0.4~0.7mの隅丸長方形を呈し、4030Aに比してかなり小振りである。柱痕跡も0.15mと貧弱であった。掘形規模・出土遺物からみてSB2435→SB4030A→SB4030Bへ変遷するものと考えられる。

SB4035A・B 第84次補足調査での桁北側の柱穴を5個まで確認していたが、建物として確認するまでには至っていなかった。SB4030Aの4.1m東側に位置し、4035Bと重複する。梁行2間(4.9m)×桁行5間(11.8m)の東西棟建物で、方位は前述した建物同様東に2°45′振れている。柱掘形は一边0.6~0.8mの隅丸長方形を呈し、深さは残りの良いもので0.5m程度である。柱痕跡は4035Aに切られるため殆ど遺存しておらず、柱穴13・15のみ確認できた。径0.2m程で、柱間は2.1mであった。

4035Bは4035Aを切って、そのすぐ東側に位置する。SK4059・SD4044に切れ、SB2435と一部重複している。梁行2間(5.0m)×桁行5間(11.8m)の東西棟建物で、南側に廂を有する。方位は前述した建物と同様で、SB4030Aと柱筋を揃える。柱掘形は一边0.5~0.8mの隅丸長方形を呈し、廂の掘形は一边0.5mとやや小振り。掘形の深さはSB4035Aと同じである。柱痕跡は柱穴14・16・20・22・26・30・32・34で確認され、径0.15~0.25mを測る。柱間は2.4~2.6mと柱一本分程のばらつきがある。

SB4040 発掘区の東半部で検出した建物である。SA4036及びSD4037に切られる。梁行は2

間(3.3m)で、桁行は大半が調査区外に延びるため1間分(1.65m)を確認したに過ぎない。柱掘形は一辺0.6~0.9mで、深さは残りの良いもので0.6m程度。柱痕跡は径0.2m程であるが、掘形底面まで達していない。

SB4046 発掘区の中央やや西側に位置し、SK4056と重複する。梁行1間(2.1m)×桁行2間(3.3m)の小規模な南北棟建物で、方位は1°30'西に振れている。柱穴は円形を呈し、径0.23~0.33mを測る。埋土は黒褐色土で、前述した建物群とは規模・埋土ともに異なり、後出するものと考えられる。

SB4047 SB4046の1.1m東側に位置し、SX4065を切っている。梁行1間(2.4m)×桁行2間(3.9m)の小規模な東西棟建物で、方位は1°30'西に振れている。柱穴は円形を呈し、径0.25~0.4mを測る。埋土はSB4046と同様の黒褐色土であった。SB4046とは直交関係にあり、規模・埋土に類似性が指摘できる。

SB4048 SB4047の4.5m北側に位置し、SB4035A・Bと重複するが、当建物が後出するものと考えられる。梁行1間(2.2m)×桁行2間(4.4m)の東西棟建物で、方位は3°西に振れている。柱穴は径0.35~0.45mの円形を呈し、径0.1~0.15mの柱痕跡を確認した。

柵

SA4034 SA4036とSB4035の間に位置する。2間分(3.7m)検出しているが、周囲は灰白色砂の地山であり、掘形埋土と容易に識別がつくことから掘り残しはないと考える。掘形は円形を呈し、径0.7mとしっかりしている。中央の柱穴のみに径0.2mの柱痕跡が認められた。目隠し堀的なものになろう。

SA4036 発掘区の北端を東西方向に走る柵列で、SB4036・4040を切っている。11間分(25.8m)確認したが、東西ともさらに延びるものと思われる。柵列の方向はSB4030・4035と等しく、柵列の柱間も4030A・4035Bの柱間にほぼ対応している。また、柵列と両建物との間隔は4.9mで、これは両建物の梁行相当分の長さである。東から2・3・4番目の柱穴内には径0.1m程の柱根が遺存しており、柱間は2.25~2.45mと若干のばらつきがあるものの8尺とみてよいだろう。また、柱根が遺存していた柱穴の土層をよく観察すると、柱根の周囲が青灰色の粘土状と化しており、それは検出面までみられた。

溝

SD4037 発掘区の東半部で検出した南北溝でSD4038と一連のものである。上端幅1.4~2.3m、下端幅1.0~1.75m、深さは最大で0.25mを測る。溝底面はかなり急に立ち上がって側壁に至る。溝底のレベルは南端と北端で0.5m程あり南に流れる。SB4040の柱掘形を切る。溝埋土は黄褐色粘質土のブロックが混じる暗褐色砂質土で、人為的に埋め戻されているようである。主

軸は45°程東に振れる。

SD4038 発掘区の南半部で検出した東西溝で、西側はSD4049に切られる。東側はさらに発掘区外に延びている。幅は0.85m、深さは最も残りの良い部分で0.2mを測る。溝は後述するSX4045に伴うもので、南肩には拳大から人頭大の東西方向の石列が伴う。この溝は昭和58年度に調査を行った第85次調査で検出した溝SD2471と一連のものと考えられる。SD2471の延長上にはSX2485というSD2340を埋め戻した後に構築された石組暗渠がある。その北側に配された東西方向の石列は、今回検出したSD4038の石列と筋を同じくするためこれらは一連の施設の可能性がある。

SD4039 発掘区の南壁際で検出した。SD4038と対をなす東西溝である。幅は0.35～0.6m、深さは最も残りの良い部分で0.2mを測る。東側はSX4045の東側集石が切れる部分で終息する。西側については現代の区画溝によって切られている。溝の北肩には拳大の角礫列が伴う。埋土は黄褐色粘土のブロックを含む暗褐色土で、SD4038と同一である。

SD4041 発掘区の南壁際で検出した東西方向の溝である。幅0.45～0.8m、深さは0.1m程で、西側はさらに発掘区外に延びる。

SD4042 SD4038の南側に接する東西方向の溝である。幅0.3～0.8m、深さは0.1mを測る。SD4038よりも新しく、SD4049よりも古い。

SD4043 SD4038と一連のものと考えられる。幅0.7～1.3m、深さは最も残りの良いところで0.15mを測る。SD4038と同じく南肩には石列を伴う。

SD4044 発掘区の中央部を南北に走る溝である。長さ26.5m、幅0.65～1.1m、深さ0.3m程を測る。溝の断面は逆台形状を呈する。埋土は茶灰色の粘質土。主軸は7°45'東に振れる。この溝からは近江産緑釉陶器・文字瓦などが出土した。

SD4049 発掘区南側で検出した東西溝でSD4038・4042と重複する。幅0.3～0.45m、深さ0.2mを測る。

SD4054 発掘区南側で検出した溝である。暗渠施設SX4055を出てすぐ二股に分れ、合流したのち西に流れるものである。幅0.2～0.8m、深さは最も残りの良いところで0.3mを測る。

井戸

SE4031 発掘区の南西側に位置し、SE4032に切られる。掘形は1.5mの隅丸方形形状を呈し、井戸底までは1.5mの深さを有する。井戸枠は二段から成り、下段は高さ40cmの曲物を二段に重ね、上段は外枠の薄い板材を押えるため四周に長さ40cm程の杭を3～5cm間隔で打込んでおり、四隅には太めの部材を用いていた。また、曲物と上段の枠の間には瓦を積めて固定している。埋土上位からは土師器・黒色土器・瓦等が出土した。

SE4032 SK4056を切って東側に位置する。平面形は偏円形を呈し、径1.6m、深さは0.6mを

測る。検出面から0.2m下で、円形の黒色部分(径0.5m)を確認した。井戸枠は遺存していなかったが、円形を呈することから曲物であった可能性が高い。埋土から須恵器・土師器・黒色土器が出土している。

SE4033 SB4046の3.5m西側に位置する。掘形は1.2mの隅丸方形を呈し、深さは1.4mを測る。井戸枠は二段で下段は径35cm・高さ25cmの曲物を二段に重ね、上段は幅20~30cm程の板を立てているが、土圧により内側に迫り出していた。

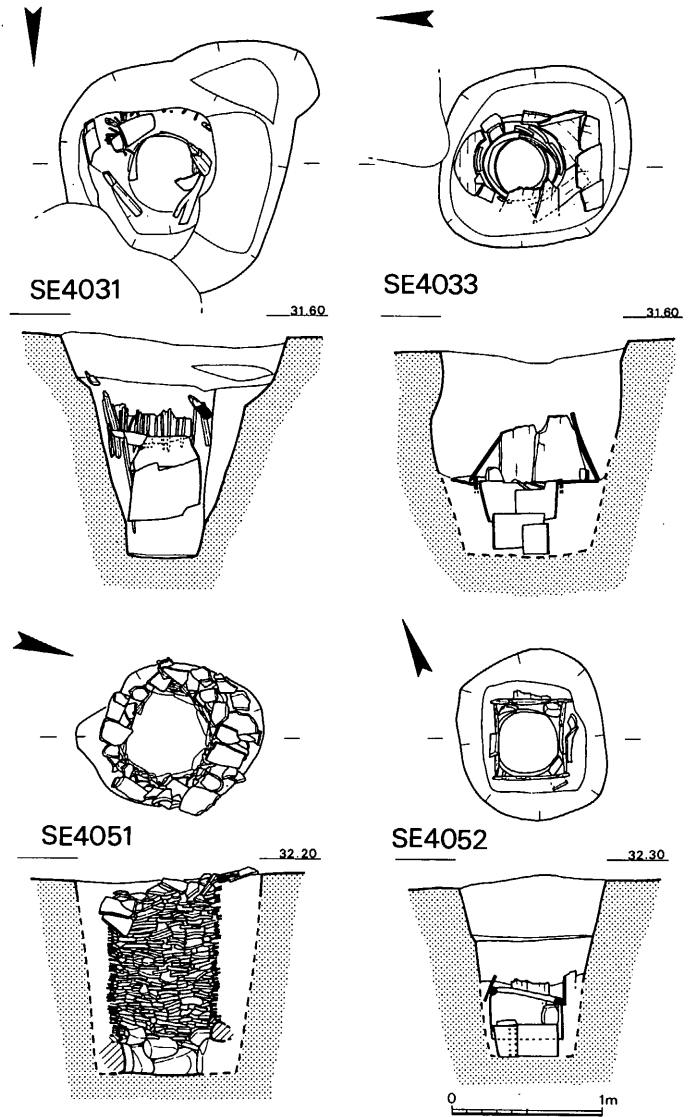
また、曲物と縦板との隙間には円形にくり抜いた板材を3枚置き、さらに瓦・土器・石などを積めて固定していた。埋土から土師器が出土している。

SE4051 SB4040の南西側に位置する瓦積みの井戸である。掘形は径1.0m程の

偏円形を呈し、深さは1.3mを測る。基底部には人頭大程の瓦石を二段に据え、そこから平瓦片をほぼ垂直に積み上げている。内径は0.6mで、瓦積みの高さは1.0m遺存する。

埋土中の遺物は殆ど無く、図示した須恵器高台付き杯身は裏込めの出土である。

SE4052 SE4051の4.5m西側に位置する。掘形は0.9×1.0mの隅丸方形を呈し、深さは1.2mを測る。井戸枠は二段で、下段は径40cm・高さ20cmの曲物を据え、上段は四周に幅20cm程の板を立て、木枠で押えている。また、曲物と縦板との隙間には瓦・土器・石などを詰めて固定していた。



第6図 SE4031・4033・4051・4052実測図

土 壙

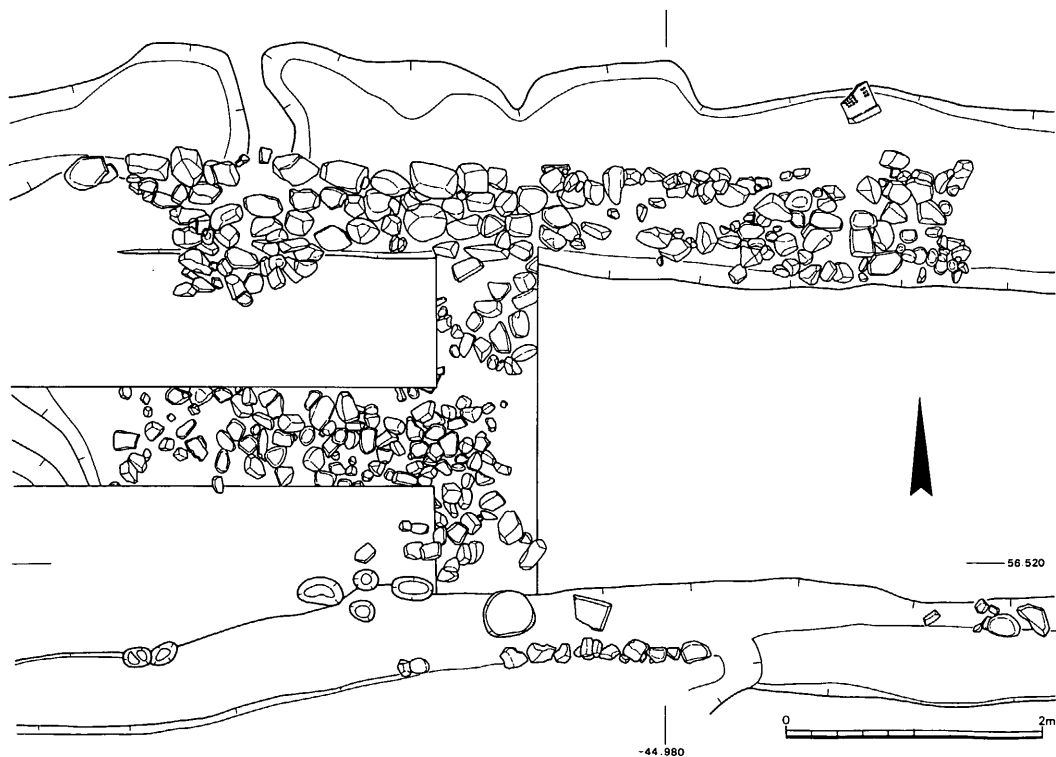
SK4056 発掘区の西南部で検出した長円形の土壙で、三つの土壙が重複したような形状をなす。長さ6.3m、幅2.0mを測る。中央部が最も深く、深さは0.7m。埋土は黒灰色土。鞆羽口・鉄滓が出土した。

SK4057 発掘区の中央部で検出した長円形の土壙である。長さ2.7m、幅1.5m、深さ0.1mを測る。墨書のある須恵器が出土した。

SK4058 SK4057の北側で検出した不整形の土壙で、東側はSD4044によって切られる。底面は平坦ではなく、中央部に向かって低くなる。長さ3.5m、幅2.2m、深さ0.45mを測る。埋土は黒灰色土で炭化物が混じっている。

SK4059 発掘区の北東部で検出した溜り状の土壙である。東西長5.0m、南北長3.7mを測る。底面はほぼ平坦で最も残りの良いところで深さ0.2m程である。埋土は暗灰色土で炭化物が混じっている。

SK4063 発掘区の中央部やや東寄りで見出した土壙である。長さ2.8m、幅1.6mを測る。



第7図 SX4045実測図

その他の遺構

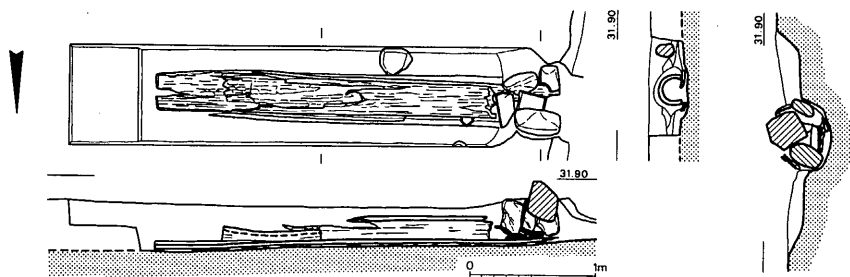
SX4045 発掘区の南壁際で検出した東西方向の道路、あるいは築地の基礎部分と考えられる遺構で、東西溝SD4038とSD4039に挟まれた部分である（第4・7図）。南・北とも東西二ヶ所に人頭大の石列を伴う。石列は一段積みで、組まれたと言うにはやや乱雑である。個々の石の面はあっていないが全体としては一直線に並べられている。ちょうどこの石列が配された部分は、ともに北から南に流れる谷地形で、その谷を塞ぐようになっている。南北の石列間の幅は3.8~4.0mを測る。石列に挟まれた部分には拳大から人頭大の花崗岩の角礫を投棄し、その上を黄色褐色の粘質土で整地している。第84次調査で検出した暗渠施設SX2485と一連の施設の可能性がある（第34図）。この遺構を道路とするか築地などの基礎部分とするか判断は難しいが、官衙域の区画に関する施設であろうことは十分に考えられる。

SX4050 幅10m以上の流路である。最下層は灰褐色の自然堆積層で、その上部は暗褐色の粘質土で整地される。この暗褐色土層は発掘区の北壁際では厚さ約0.5mを測る。

SX4055 発掘区の東半部中央で検出した石組と木樋からなる暗渠施設で、SD4054に接続するものである（第8図）。溝と暗渠が接する部分には北に一つ、南に二つの花崗岩の自然石を配し水口のような施設を作っている。この水口の床面には鴻臚館式軒平瓦が水路を塞ぐようにおかれていた。

木樋は長さ2.18m、径0.27mの木材の一面をカットし、そこから凸形にくり抜いて作られている。木樋は伏せた状態で据えられ、その下部には長さ320cm、幅35cm、厚さ3~5.5cmの板材を敷いて底板としている。この板材は石組の下にまで及ぶ。木樋には掘形が認められず、もともとの流路の土である腐植土の上に設置されているため、この流路が生きている時点で設置され、その後すぐ、SX4050の上層埋土である暗褐色粘質土で埋め戻されたものと考えられる。土層断面で木樋を取り巻いているように見える層は、本体が朽ちて粘土化したものと判断できる。

一方、石組部分では幅1.8mの掘形がみられ、黄色粘土で裏込めされていた。SX4055は木樋の底板のレベルが東の方に18cm程低くなっているため、SD4054からくる水を東に流す暗渠施設と



第8図 SX4055実測図

考えた。そこで木樋東側部分で溝などの接続する施設を精査したが確認できなかった。また、暗渠上部に何等かの構造物も検出できていない。

SX4060 発掘区の南西部で検出した遺構である。幅2.7~4.0mを測る。西側はさらに発掘区外に延びており、溝状になるものか。炭化物を含む暗茶褐色土を埋土とする。巡方が出土。

SX4062 発掘区の北半部、SK4058のすぐ西側で検出したピット。長径0.9m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。灰釉陶器瓶が出土。

SX4065 発掘区の西南部で検出した不整形の落込みみである。埋土は黒褐色で鑄羽口・鉄滓等が出土した。

SX4066 発掘区の東北部で確認した不整形の浅い落込みみである。暗褐色土と黄褐色土で埋められる。「御坏日」と墨書された土師器皿が出土した。暗褐色土層とした整地層の一部になる可能性もある。

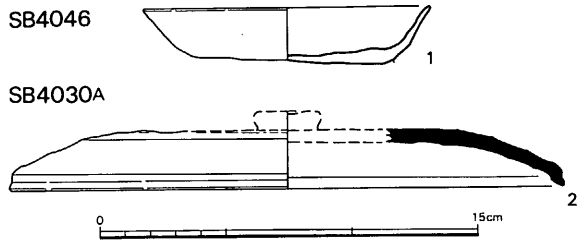
SX4067 SX4066の東側で確認した不整形の浅い落込みみ。埋土はやはり暗褐色土と黄褐色土の埋め土で、SX4066と一連のものと考えられる。

出土遺物

SB4030A出土土器 (第9図)

須恵器

蓋(2) 口縁部破片で、天井部を欠く。口縁端部は外反し、内面に稜を有する。口縁部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ調整による。焼成は堅緻で、明青灰色を呈する。



第9図 SB4046・4030A出土土器実測図

SB4046出土土器 (第9図、図版18)

土師器

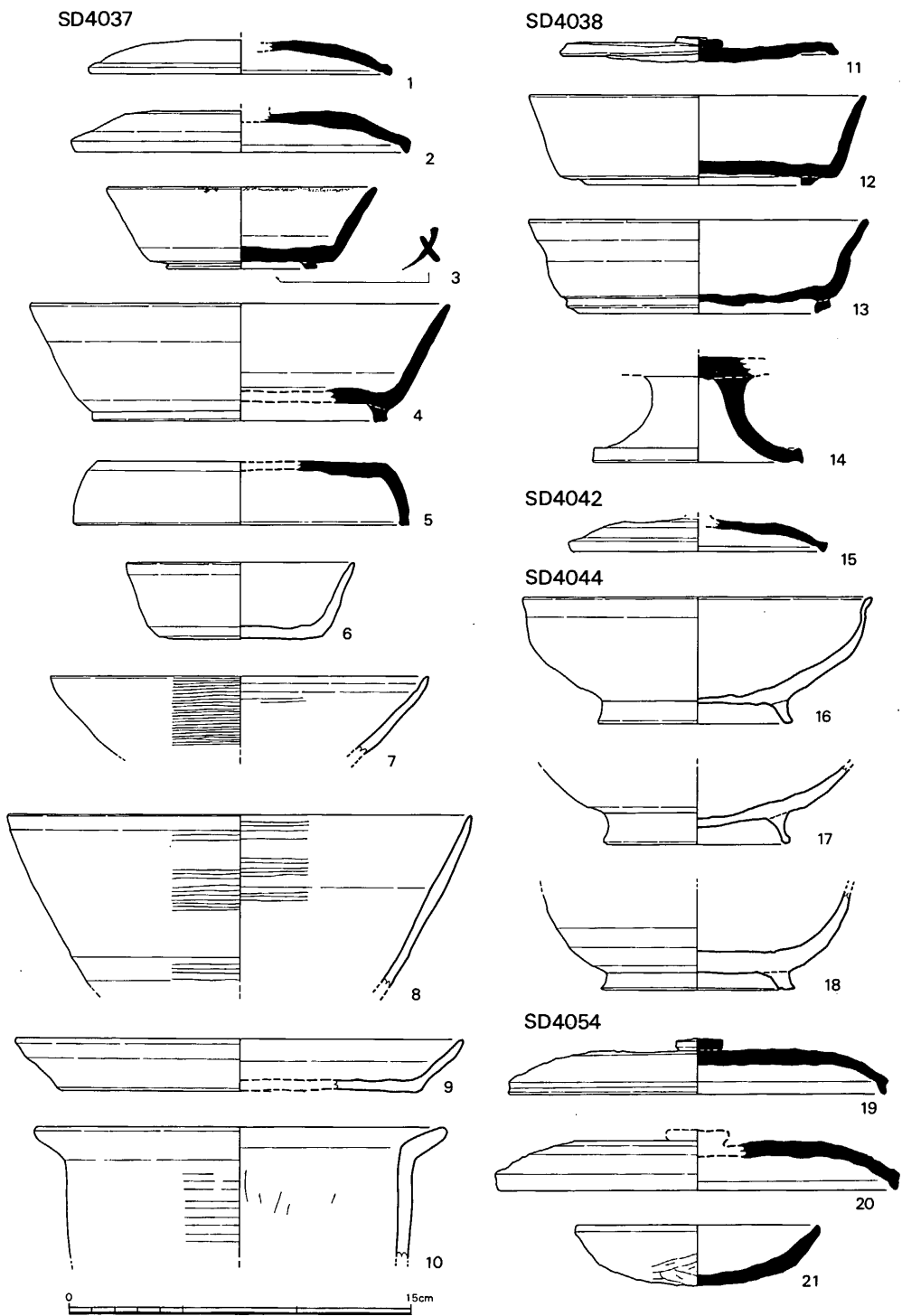
杯(1) 浅めの器形で、口唇部はシャープである。体部は磨滅により調整不明。底部はヘラ切り未調整。胎土に砂粒を多く含むものの焼成は良好で、明黄白色を呈する。

SD4037出土土器 (第10図、図版18)

須恵器

蓋(1・2) 1の天井部外面はヘラ切り未調整のちヨコナデ、天井部内面はナデを施す。2は天井部外面に回転ヘラケズリ、天井部内面はナデを行う。

杯(3・4) 3は体部と底部の境が明瞭なもの。底部内面はナデを施す。口縁部には油煙が付着する。底部外面の中央部には「メ」の墨書がある。4は高台が底部の端に貼付されたもの。ともに底部はヘラ切り未調整。



第10图 SD4037·4038·4042·4044·4054出土土器实测图

壺蓋（5） 短頸壺の蓋。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデを施す。

土師器

杯（6・7） 6の底部はヘラ切り未調整。底部内面はナデを施し、板状圧痕を伴う。7は内外面とも回転ヘラミガキを施す。口縁部の内面には沈線状の段をもつ。胎土は精良。

椀（8） 深めの椀で底部は欠失する。外面の下半には回転ヘラケズリを行う。全面に回転ヘラミガキ調整を施す。胎土は精良。

皿（9） 底部はヘラ切り未調整。

甕（10） 小型の甕の破片。外面はカキ目状の工具ナデ、内面はヘラケズリを行う。

SD4038出土土器（第10図、図版18）

須恵器

蓋（11） 低平なタイプで、焼き歪が著しい。天井部外面は回転ヘラケズリ調整。

杯（12・13） 12は体部が直線的に斜め上方に伸びるもの。13は体部の中位で強く外反するもの。ともに底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ施す。

高杯（14） 14は短脚高杯の脚部。脚端部は下方に摘み出す。

SD4042出土土器（第10図、図版18）

須恵器

蓋（15） 天井部と口縁部の境が不明瞭なもの。口縁端部は断面三角形につくり出す。天井部外面は回転ヘラケズリ調整、天井部内面にはナデ施す。

SD4044出土土器（第10図、図版18）

土師器

椀（16・17） 16は丸みをもった体部に外反する口縁が付くもの。高台は高く、「ハ」の字にふんばる。磨滅が著しく、調整不明。

緑釉陶器

椀（18） 18は丸味をもった体部に、開き気味のしっかりした高台を貼付している。口縁部を欠く。見込みに2条の沈線を巡らす。また、畳付の内側には段状の沈線が入る。体部下半には回転ヘラケズリを施す。底部には糸切り痕がみられる。畳付以外の全面に淡緑色の釉が施される。土師質だが締まりがある。近江産。

SD4054出土土器（第10図、図版18）

須恵器

蓋（19・20） とともに口縁端部を下方に屈曲させるものである。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデを施す。

皿（21） 丸底の杯で、底部外面は手持ちヘラケズリを行う。底部内面はナデ調整。

SE4031出土土器（第11図）

黒色土器

椀（1） A類。「ハ」の字に開く高い高台をもつもの。高台部の調整はヨコナデで、内面には油煙がこびり付いている。胎土は精良で、砂粒を殆ど含んでいない。

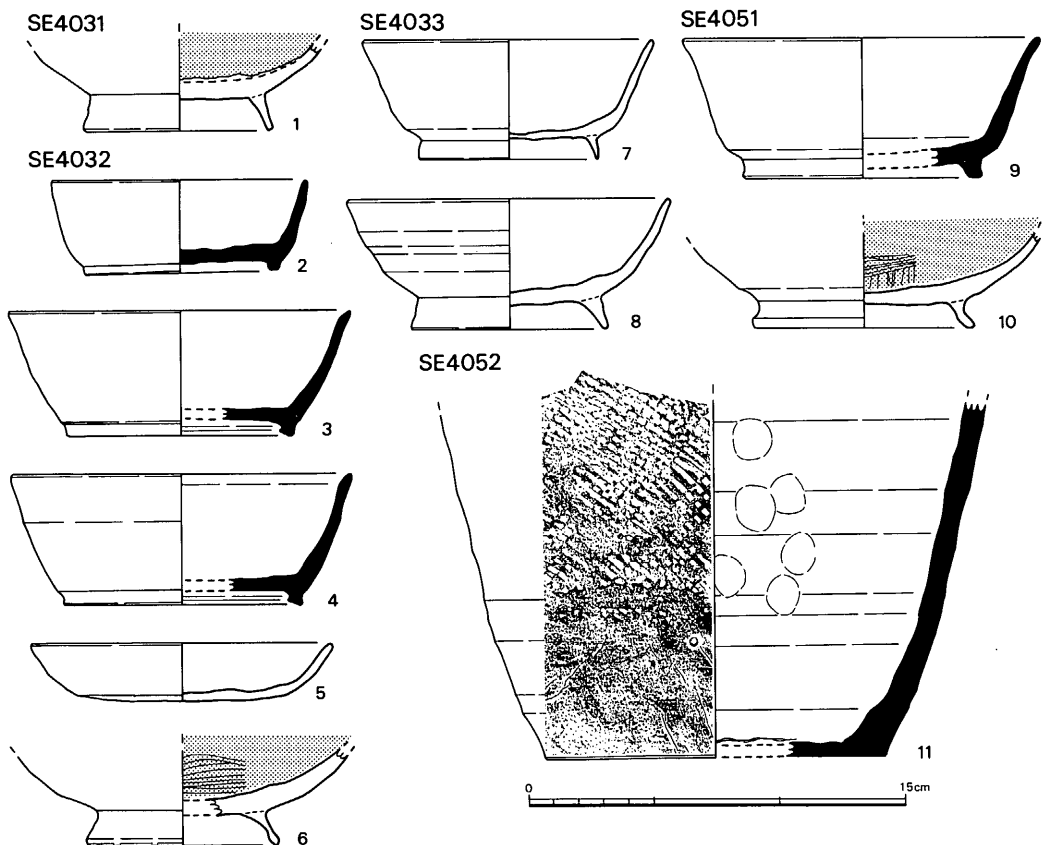
SE4032出土土器（第11図、図版18）

須恵器

杯（2～4） 高台付きの杯身で、いずれも高台は底部端に貼付している。2の体部は垂直気味に立上がり、3・4は開き気味。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデで、4の底部はへら切りによる。焼成は堅緻で、色調は2が暗灰色、3は青灰色、4は灰色を呈する。

土師器

杯（5） 体部は丸く、底部との境は不明瞭である。調整は磨滅により不明。色調は明黄褐色。



第11図 SE4031～33・4051・4052出土土器実測図

黒色土器

椀(6) A類で、口縁部を欠く。高台はシャープで、高目である。内面はヘラミガキ調整による。胎土は精良で、外面は橙褐色を呈する。

SE4033出土土器 (第11図)

土師器

椀(7・8) 7は体部が直線的に開くもので、8はやや丸みを帯びる。ヨコナデ調整する。8の外底部は未調整。ともに焼成は良好で、黄褐色を呈する。

SE4051出土土器 (第11図)

須恵器

杯(9) 高台付きの杯身で、高台は底部端よりやや内側に付している。器面はヨコナデ。口唇部は丸くおさめる。焼成は良好で、暗青灰色を呈する。

黒色土器

椀(10) A類で、口唇部を欠く。高台は低めで、ハ字形を呈する。内面は粗いヘラミガキ、外面はヨコナデ、外底部には板状圧痕がみられる。

SE4052出土土器 (第11図)

須恵器

壺(11) 平底の底部破片である。外面は斜格子タタキ、下半部は回転ヘラケズリ、内面はヨコナデによる凹凸が著しい。胎土は粗く、砂粒を多く含む。

SK4056出土土器・土製品 (第12図、図版18)

須恵器

鉢(1) 体部が斜め上方に直線的に広がる平底の鉢。口縁端部は平坦面をなす。体部の中体よりやや上に、削って面取りされた一對の把手を貼付する。調整は底部外面から体部下位は回転ヘラケズリ、底部内面はナデを施す。

土製品

轆羽口(2) 轆羽口の先端部付近の破片。径は中位で6cm程、中央の孔径2.7cmを測る。外面は加熱を受けて青灰色に変色する。

SK4057出土土器 (第12図、図版19)

須恵器

杯(3) 小型の杯の底部片。外傾する高台を貼付する。底部に文字様の墨書が認められるが、判読はできない。

SK4058出土土器 (第12図、図版19)

土師器

杯(4・5) 底部はともにヘラ切り未調整。

SK4059出土土器 (第12図)

土師器

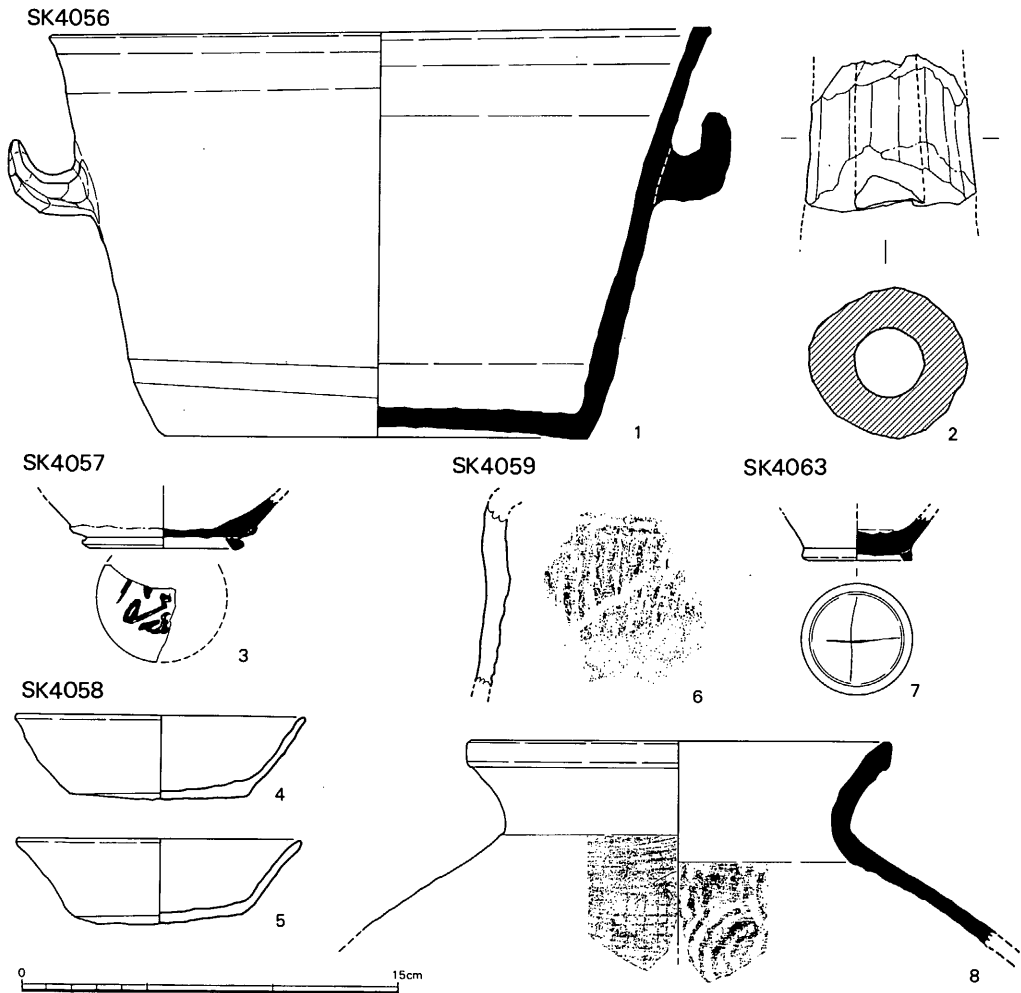
甕 (6) 玄界灘式製塩土器の口縁部近くの破片。体部外面は擬格子のタタキ、体部内面は同心円の当具痕が残る。胎土には砂粒を多く含む。

SK4063出土土器 (第12図)

須恵器

壺 (7) 断面四角形の高台を有する小壺。底部外面はへら切り未調整、その他はヨコナデする。底部外面にはへらによる「+」字の線刻がある。

甕 (8) 球形の体部に緩く外反する口縁部が付くもの。体部外面は格子のタタキ、内面には同心円の当具痕が残る。



第12図 SK4056~59・4063出土土器・土製品実測図

SX4050出土土器（第13図、図版19）

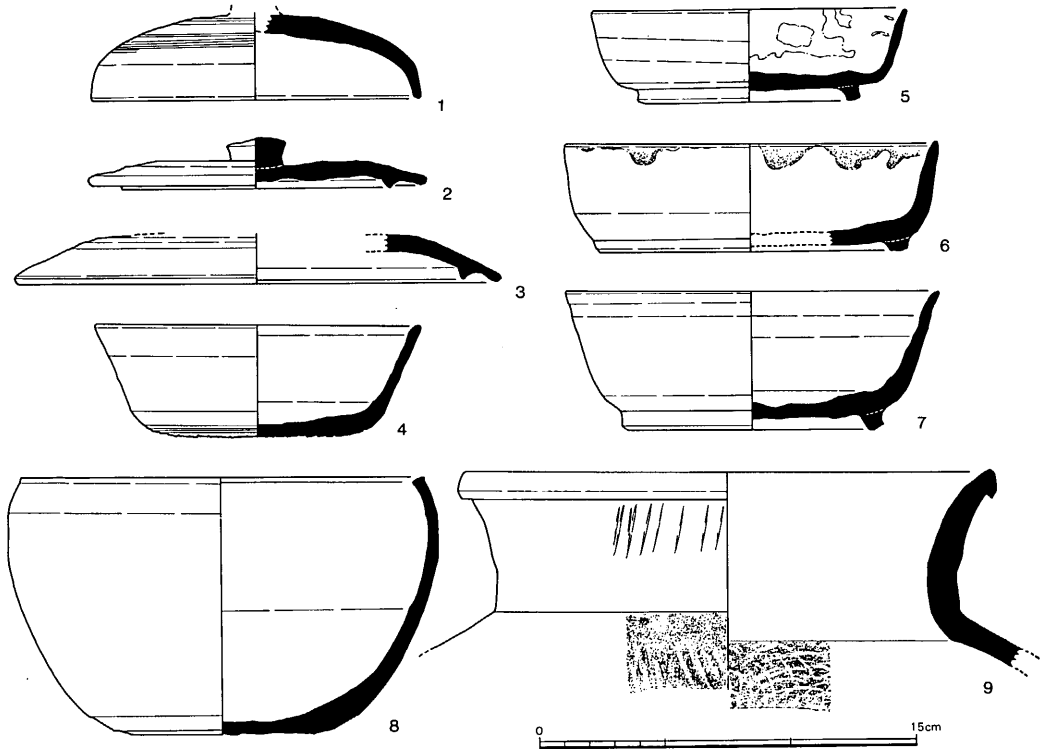
須恵器

蓋（1～3） 1は有蓋高杯の蓋で、撮みは欠失する。天井部にはカキ目を施す。2・3はともに身受けの返りを有するものである。2・3は天井部外面が回転ヘラケズリ、その他はヨコナデ。

杯（4～7） 4は無高台の杯。底部は回転ヘラケズリ調整した後、ヘラ先によりカキ目状の線刻を施す。底部内面はナデ調整。5～7は有高台の杯で、口縁部はやや外反する。5は内面に漆が付着している。5の底部はヘラ切り未調整。6は回転ヘラケズリを行う。口縁部に油煙が付着する。7の底部外面には板状圧痕が伴う。すべて底部内面はナデる。

鉢（8） 体部が内弯しながら立上る平底の鉢。底部外面は回転ヘラケズリ調整、内面の体部下半から底部にかけてナデを施す。その他の部位はヨコナデ。

甕（9） 緩く外反する口縁をもつもので、口縁端部は折り返して下方に垂れる。頸部外面にはヘラによる縦位の沈線がある。体部外面は平行タタキ、体部内面には同心円の当具痕がみ



第13図 SX4050出土土器実測図

られる。口縁部内面には自然釉がかかる。

SX4060出土土器・石製品（第14図、図版19）

須恵器

杯（1） 体部と底部の境が不明瞭なもの。底部はへら切り未調整。

土師器

椀（2～4） すべて「ハ」字に開く高台をもつものである。2・3は体部の器壁が非常に薄い。磨滅が著しく調整不明。

黒色土器

椀（5） A類。丸味をもつ体部に断面三角形に近い高台を付すものである。内面はへらミガキされ、黒色に燻されている。底部外面はへら切り未調整。

石帯

巡方（6） 3.5cm×3.4cm、厚さ0.6cmを測る。下端部は面取りされている。裏面には3ヶ所にかがり孔をもつ。やや透明感のある緑色で白の斑入がある硬質の石材である。

SX4062出土土器（第14図）

灰釉陶器

瓶（7） 底部のみの破片だが、瓶と考えられる。外面に灰色の釉がかかる。底部は糸切り。その他はヨコナデ。

SX4065出土土器・陶磁器（第14図、図版19）

須恵器

蓋（8～11） すべて口縁部を下方に屈曲させるものである。10は転用硯で内面に墨痕があり、器面が平滑である。11の口縁部は一旦横に伸びたあと、下方に屈曲させる。すべて天井部外面は回転へラケズリ、天井部内面はナデを施す。11の天井部内面はよく擦れてつるつるしており、墨痕は残っていないものの転用硯の可能性もある。

杯（12） 底部外面はへら切り未調整。

灰釉陶器

皿（13） 底部の小破片。内面にガラス質の緑灰色の釉を施す。外面は露胎となる。

黒色土器

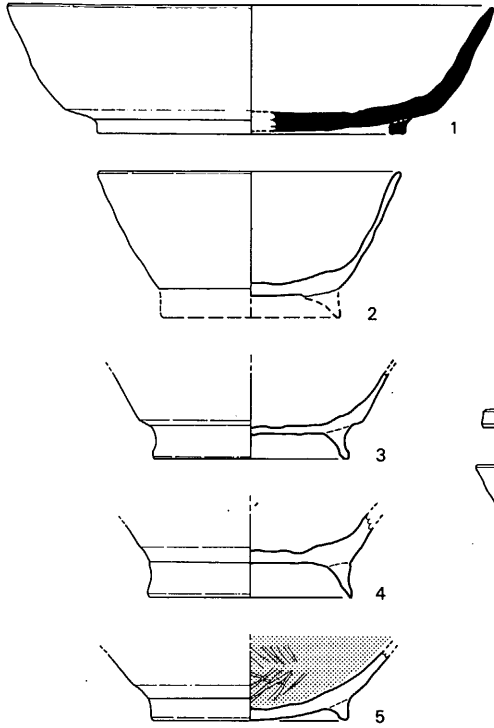
鉢（14） 口縁部の小破片。外面は口縁端部から1cm程下がった部分から回転へラケズリを行っている。その後、内外面とも横方向のへらミガキを施す。内側のみ黒色に燻しているA類。胎土は精良。

中国陶磁器

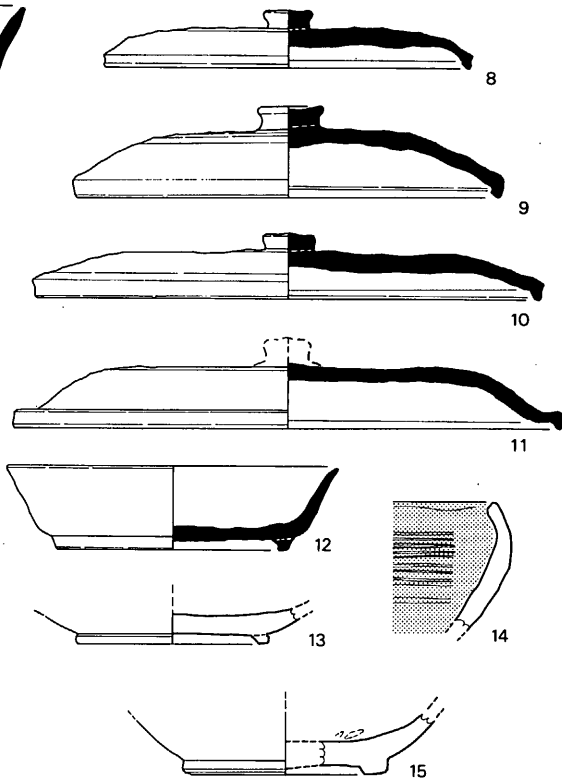
青磁

椀（15） 越州窯系。淡茶白色の胎に緑灰色の釉をかける。高台畳付から底部にかけては露

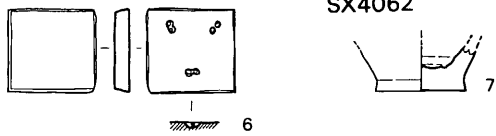
SX4060



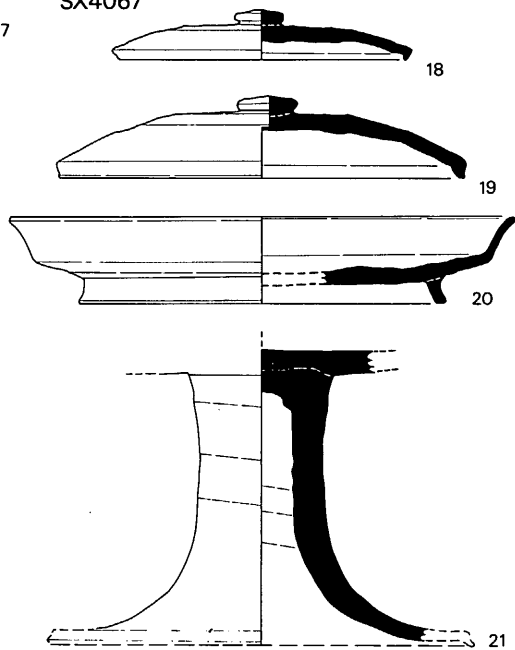
SX4065



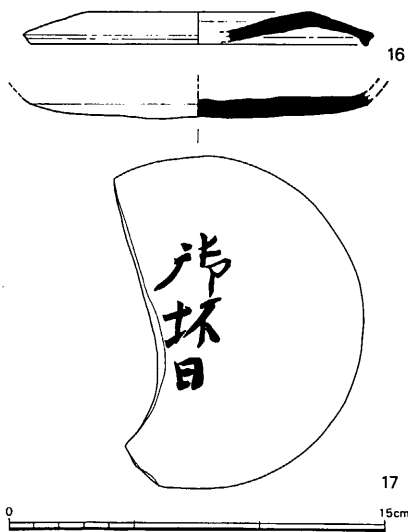
SX4062



SX4067



SX4066



第14図 SX4060・SX4062・4065~67出土土器・陶磁器・石製品実測図

胎となる。見込みには目跡が残る。

SX4066出土土器（第14図、図版19）

須恵器

蓋（16） 天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデ。焼き歪が著しい。

土師器

皿（17） 底部分のみの破片。底部外面は手持ちヘラケズリのあとミガキを施す。胎土は精良で、色調は赤味のある茶褐色を呈する。外面の中央部「御坏日」と読める墨書がある。

SX4067出土土器（第14図、図版19）

須恵器

蓋（18・19） とともに口縁端部を下方に屈曲させるものである。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデを施す。

皿（20） やや丸味をもった底部に外反する口縁が付くものである。器壁は薄い。胎土は極めて精良。調整も丁寧である。同形の金属器の写しと考えられる。

高杯（21） 高台部の破片。内面の上位はヨコナデによる凹凸が著しい。

暗褐色土層出土土器・硯・土製品（第15～19図、図版20～22）

須恵器

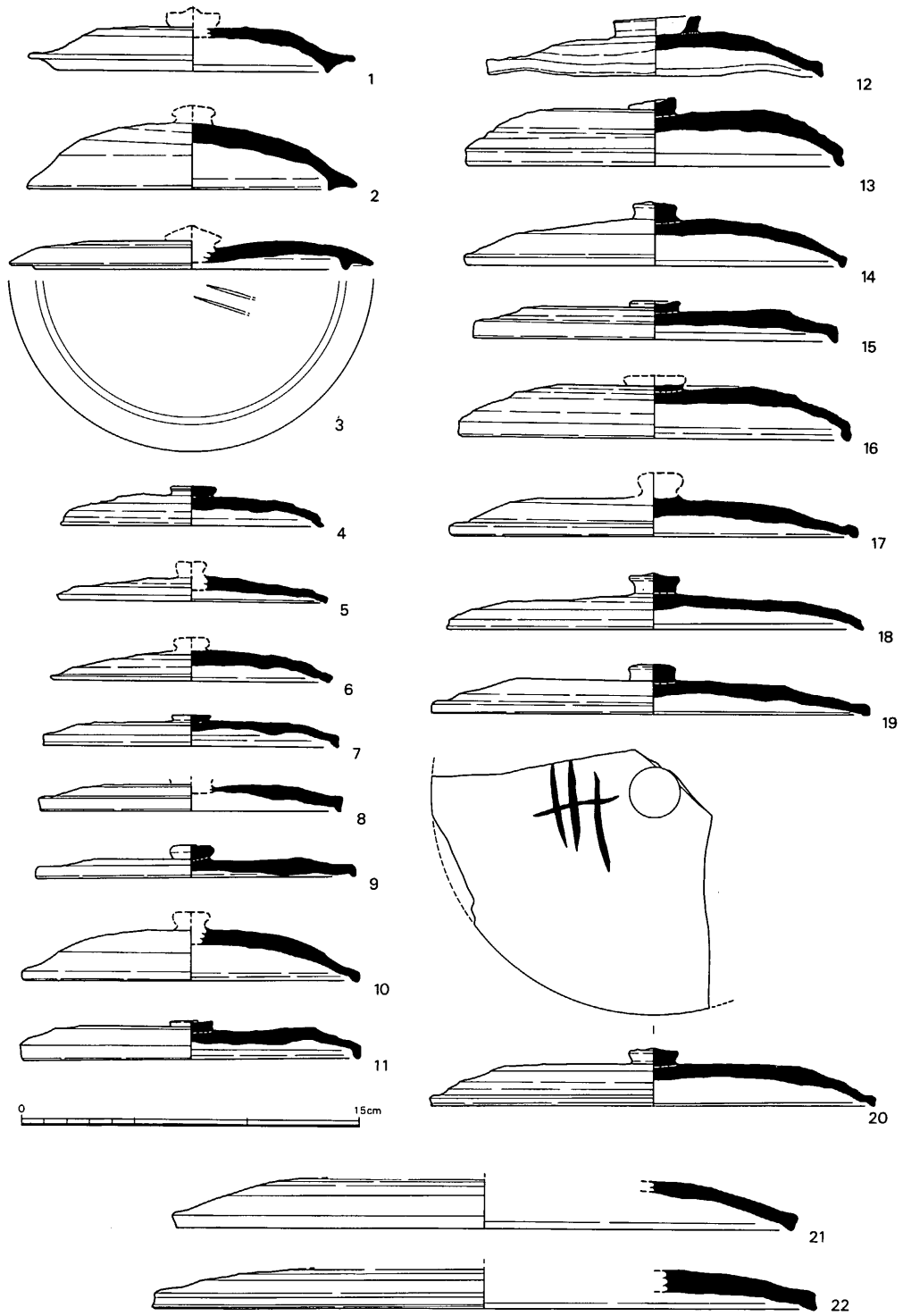
蓋（1～22） 1～3は見受けのかえりを有する蓋で、何れも撮みを欠く。1の天井部は扁平で、かえりは口縁端部より突出する。2の天井部は丸く、3は焼け歪んでいる。調整は口縁部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ、内面ナデ。3の内面には2本線のヘラ記号を付している。

4～22は口縁端部が小さく立つ器形で、口径により大・中・小に分けられる。4～12は口径12～15cmの小型品、13～20は口径17～20cmの中型品、21・22は27～29cmの大型品。撮みには扁平なもの（4・7・9・11）、内側が若干窪むもの（13・15）、擬宝珠形のもの（14・18～20）、輪状のもの12がある。調整は口縁部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ、内面ナデを主体とし、4・6・10・14・17・19・20の天井部はヘラ切りによる。また、4・10～13の内面には墨痕がみられ、10～12は硯に転用している。20は墨書土器で、天井部外面に「卅」の文字がみられる。

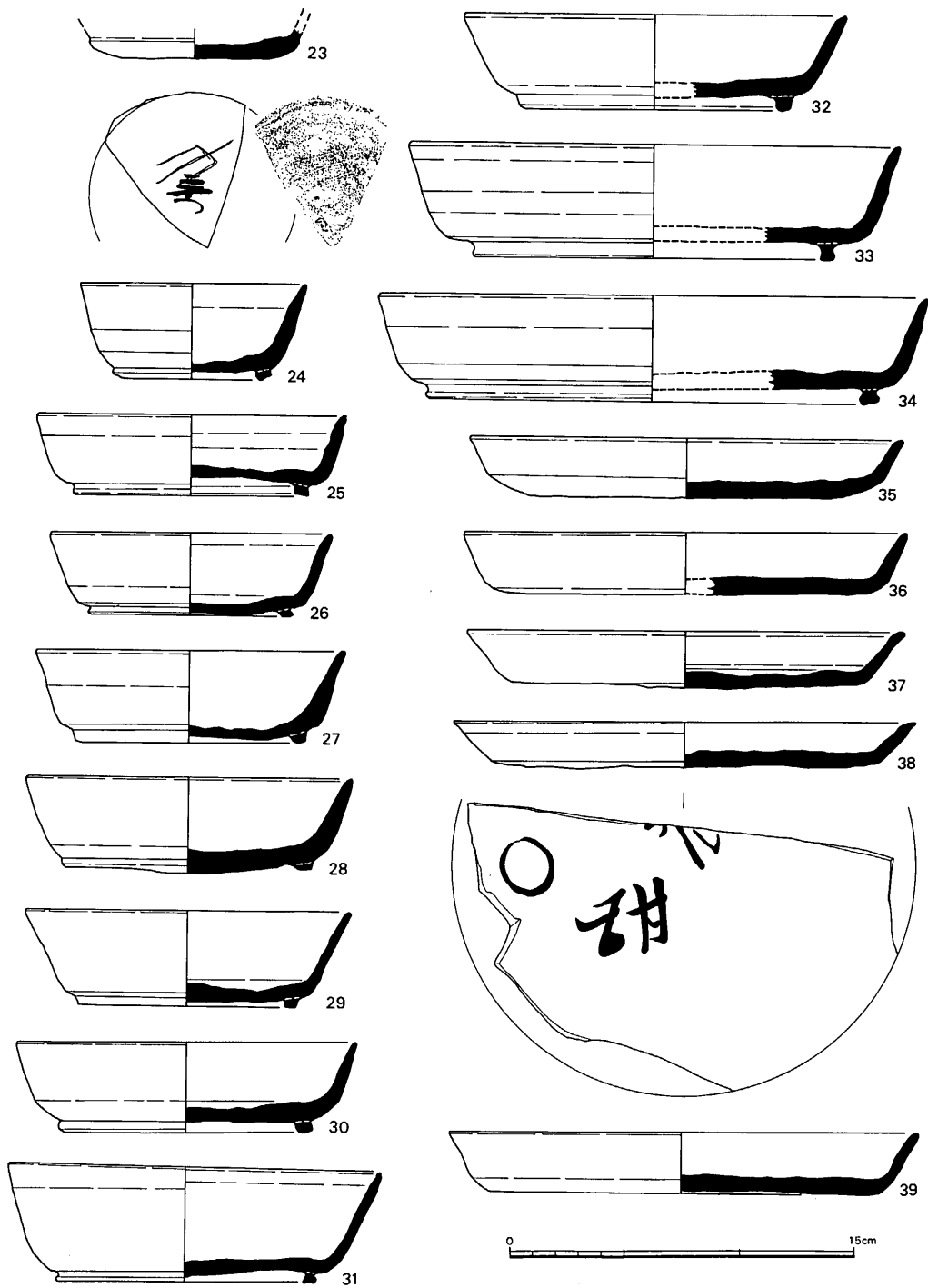
杯（23～32） 23は無高台の底部片で、外底部には「巾」字状のヘラ書きと墨書「寿？」がみられる。胎土は精良で、硬質の土器である。24～32は高台付きの杯身で、24は口径10cmの小型品。25～32は口径12～16.5cm。25～27・29・31は底部との境に稜を有する。高台は低目である。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデを主体とし、24の外面はヘラケズリ、25～27・30の外底部ヘラ切り未調整。

盤（33・34） 杯に比して口径が大きいことから盤とした。体部ヨコナデ、外底部ヘラケズリ。胎土は精製され緻密である。

皿（35～39） 35・37・38の口唇部は小さく外反し、36・39は丸くおさめる。調整は口縁部



第15図 暗褐色土層出土土器実測図(1)



第16図 暗褐色土層出土土器実測図(2)

ヨコナデ、内面ナデで37～39の外底部はへら切りを施す。また、38の外底部には3箇所墨書がみられ、○の記号及び「甜」の文字を記したもののか。その他にも判読不明な小片2点がある(a・b)。

高杯(40～42) 40・41は浅目の杯部破片で、40の口縁端部は突出する。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面回転へラケズリ。42は脚部破片で、脚端部は小さく立つ。絞った後ヨコナデを施している。

壺(43・44) 43は口縁部破片で、頸部から大きく外反し、さらに上方に立上がる。内外面ともナデ。焼成は堅緻で、青灰色を呈する。44は胴部小片で、幅広の凸帯を貼付する。外面斜格子タタキ、内面ナデ。

鉢(45・47) 45は口頸部がS字状に屈曲する。調整はヨコナデ。焼成は堅緻で、灰白色を呈する。47は1/4程の破片であるが、器高がさほど高くないことから取手付き鉢とした。口唇部は三角形に突出する。頸部の締めりは悪く、肩部のやや下位に偏平な取手を付す。口縁部はヨコナデで、内面はナデによるか。焼成は不良で、生焼け品。

甕(46・48～50) 46は口頸部小片で、口縁部は緩く外反する。調整は外面粗い格子タタキの後ナデ、内面同心円当具による。48～50は甕の口縁～肩部破片で、反転復元した。48は口縁部に面を有する。調整は口縁部ヨコナデで、外面は48・49が格子タタキ、50は平行タタキで、内面は何れも同心円当具による。また、50の頸部内面の屈曲部にはへら状工具によるオサエ痕が連続している。焼成は堅緻で、50の外面には自然釉がかかる。

硯

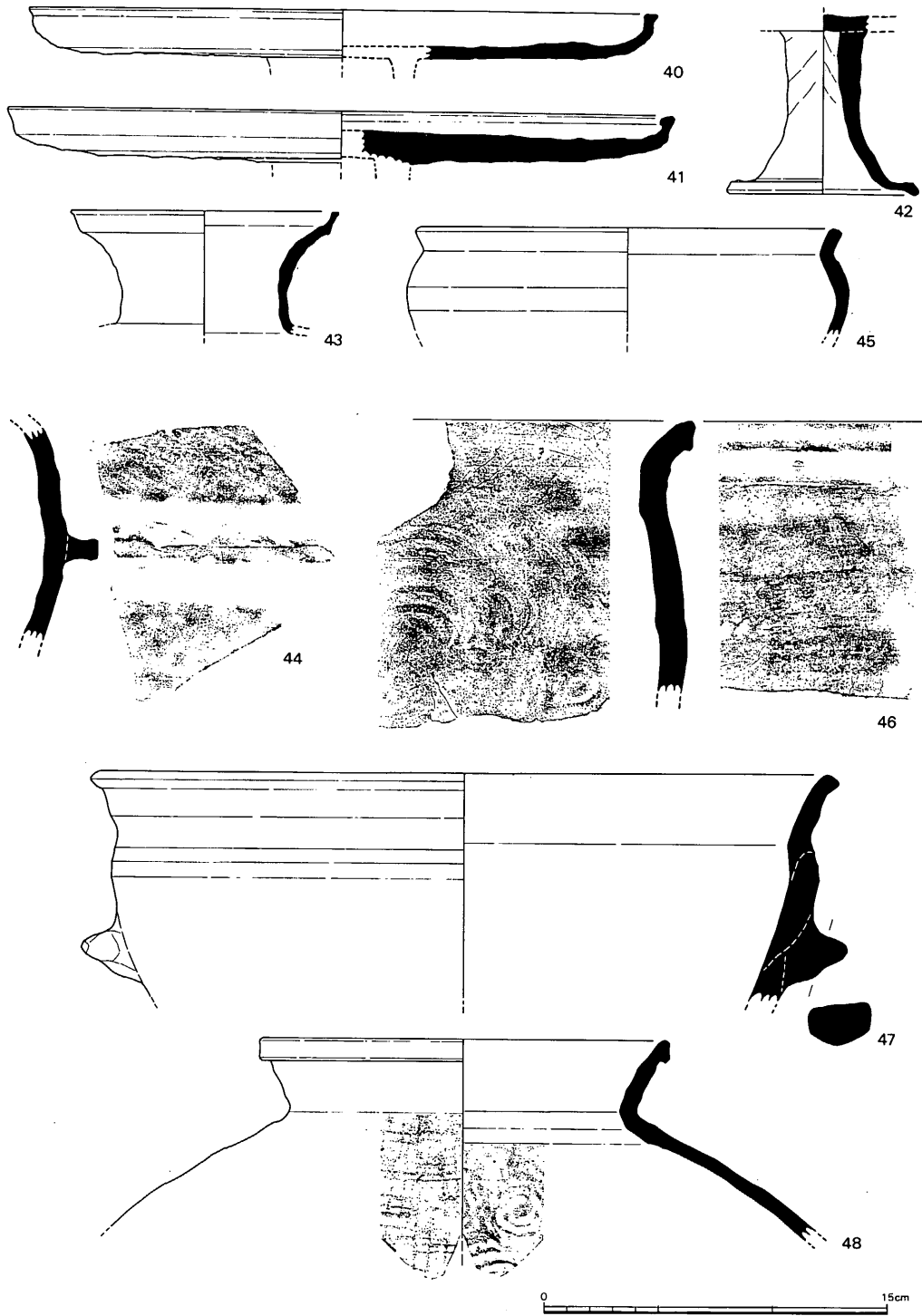
円面硯(51・52) 51・52は透かしを有する円面硯で、51は1/5程の破片。外堤部と陸部の高さはほぼ等しい。脚裾は外方に引き出し、端部は丸くおさめている。脚部には長方形の透かしを空け、図上復原で36個数える。陸・海部には墨痕がみられるが、残存部位には研いだ痕はみられない。52は外堤部の小片であるが、脚部に長方形の透かしを設けたことが知られる。外堤部・脚部とも陸部に貼付して成形している。両者とも胎土は精製され、緻密である。

土師器

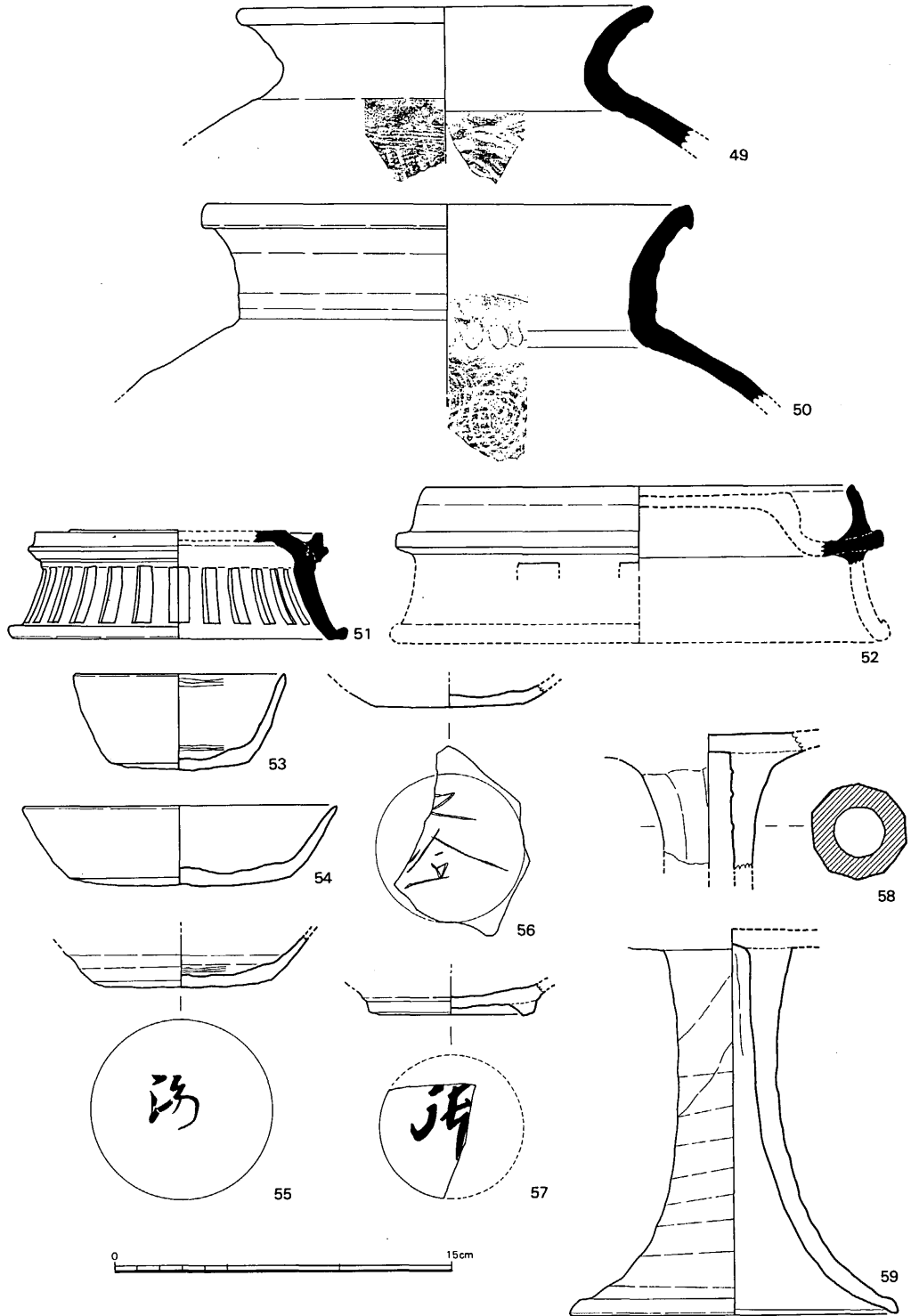
杯(53～57) 53は小型の杯で、深めである。内面は回転へラケズリによる。54の外底部はへら切り未調整、55～57はへら切り。また、55～57は墨書土器で、底部には55が「海」、56は「之合」、57は「御」の字がみられる。57は焼きがあまり須恵器の可能性がよい。

高杯(58・59) とともに脚部破片で、58の外面はへラケズリによる面取を行なっている。59の脚裾はラップ状に開く。絞った後ヨコナデを施している。胎土に砂粒を多く含むものの、焼成は良好で赤褐色を呈する。

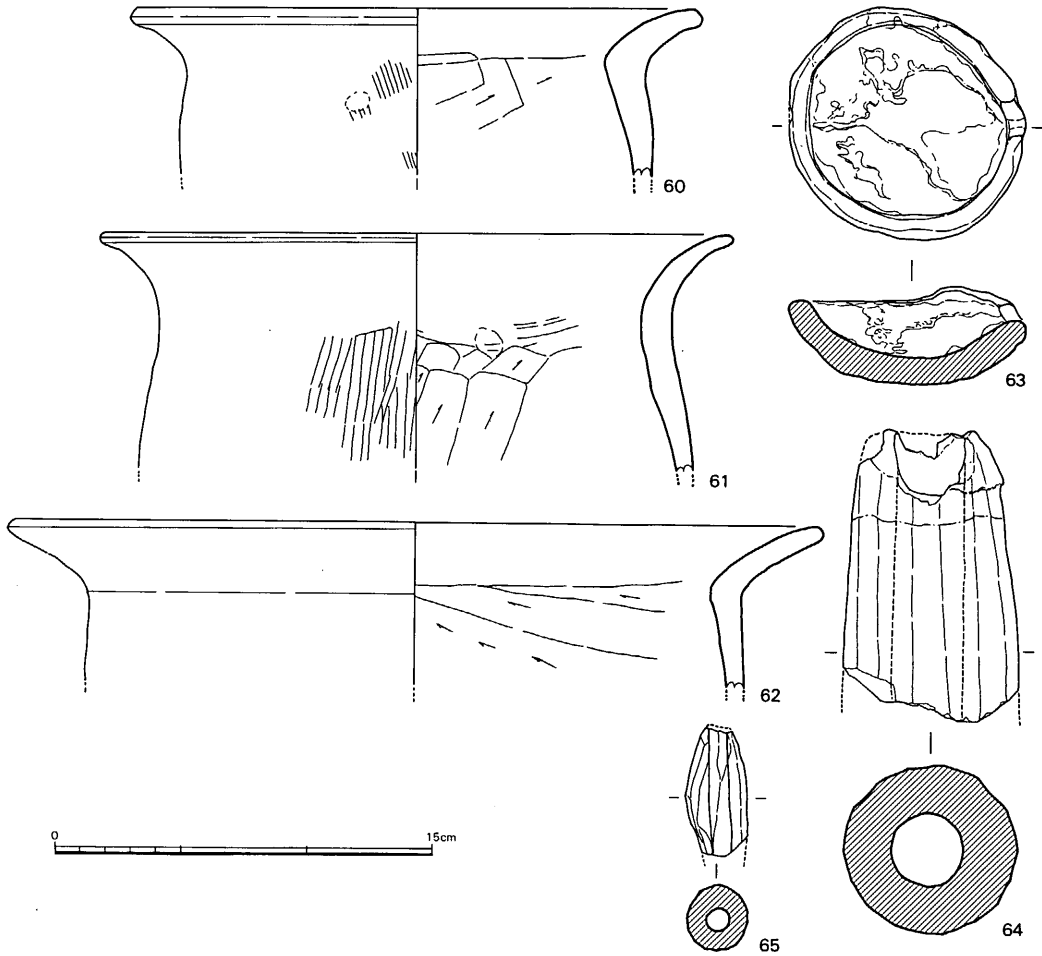
甕(60～62) 60～62は甕の口縁部破片で、反転復元した。口縁部は大きく外反し、61の口唇部はシャープである。調整は何れも口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面へラケズリ、60の外



第17图 暗褐色土層出土土器実測図(3)



第18图 暗褐色土層出土土器実測図(4)



第19図 暗褐色土層出土土器実測図(5)

面には僅かに煤が遺存する。

土製品

坩堝 (63) 片口を有する坩堝で、手捏ね品。内面には黒色の溶解物が厚く付着しており、口縁部には赤褐色のガラス状と化したものが斑点状にみられる。口径9.4cm、器高3.8cm。

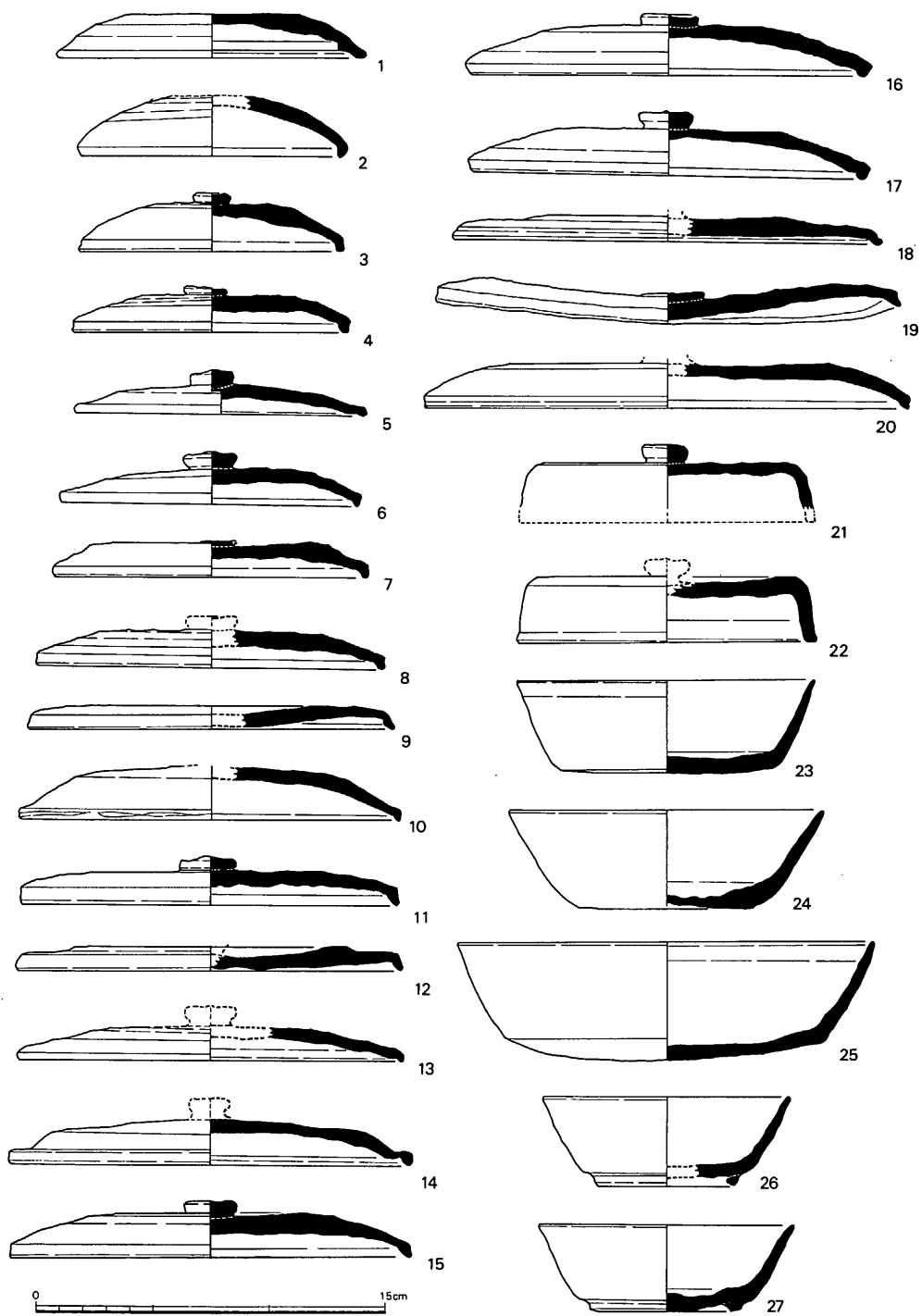
鞆羽口 (64) 先端部の破片。先端は加熱により青変し、ガラス状と化した溶解物が付着している。

土錘 (65) 管状土錘で、両端部を欠く。焼成は堅緻で、須恵質。残存長5.0cm。

茶褐色土下層出土土器・陶磁器・土製品 (第20～25図、図版23～25)

須恵器

蓋 (1～20) 見受けのかえりを有する1とそれ以外のかえりを持たないものがある。1は



第20図 茶褐色土下層出土土器実測図(1)

撮みを付さないタイプである。かえりは口縁端部より内側に入っている。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、天井部内面はナデを施す。2～20は法量に11.2～13.6cm、15.0～16.6cm、17.0～20.6cmの三種があるようである。口縁端部は下方に屈曲させるが、5・13が退化し、僅かに段状に或いは沈線状になっているだけである。調整は5・11・14・17の天井部外面がヘラ切り未調整の他は、すべて回転ヘラケズリ調整を施す。天井部内面はナデ。14は転用硯で天井部内面に墨痕がみられる。19は焼き歪が著しい。天井部内面は磨滅により、平滑になっているため転用硯の可能性もある。

壺蓋 (21・22) 22は撮みを欠失する。調整はともに天井部外面がヘラ切り未調整、天井部内面はナデ、口縁部はヨコナデ。

杯 (23～35) 無高台の23～25とそれ以外の有高台に分かれる。無高台のものは形態的に高台を持つものと変わらない。法量に大小二種がある。調整は底部外面がヘラ切り未調整、底部内面は23・25がナデ、口縁部はヨコナデ。25には板状圧痕が伴う。有高台杯は杯蓋に対応して法量が三種に分かれるようである。底部外面は29～31・34・35が回転ヘラケズリ、その他はヘラ切り未調整。底部内面にはすべてナデを施す。

皿 (36～38) 底部外面はともにヘラ切り未調整。底部内面はナデを施す。38は底部外面の中央に「木」の墨書がみられる。

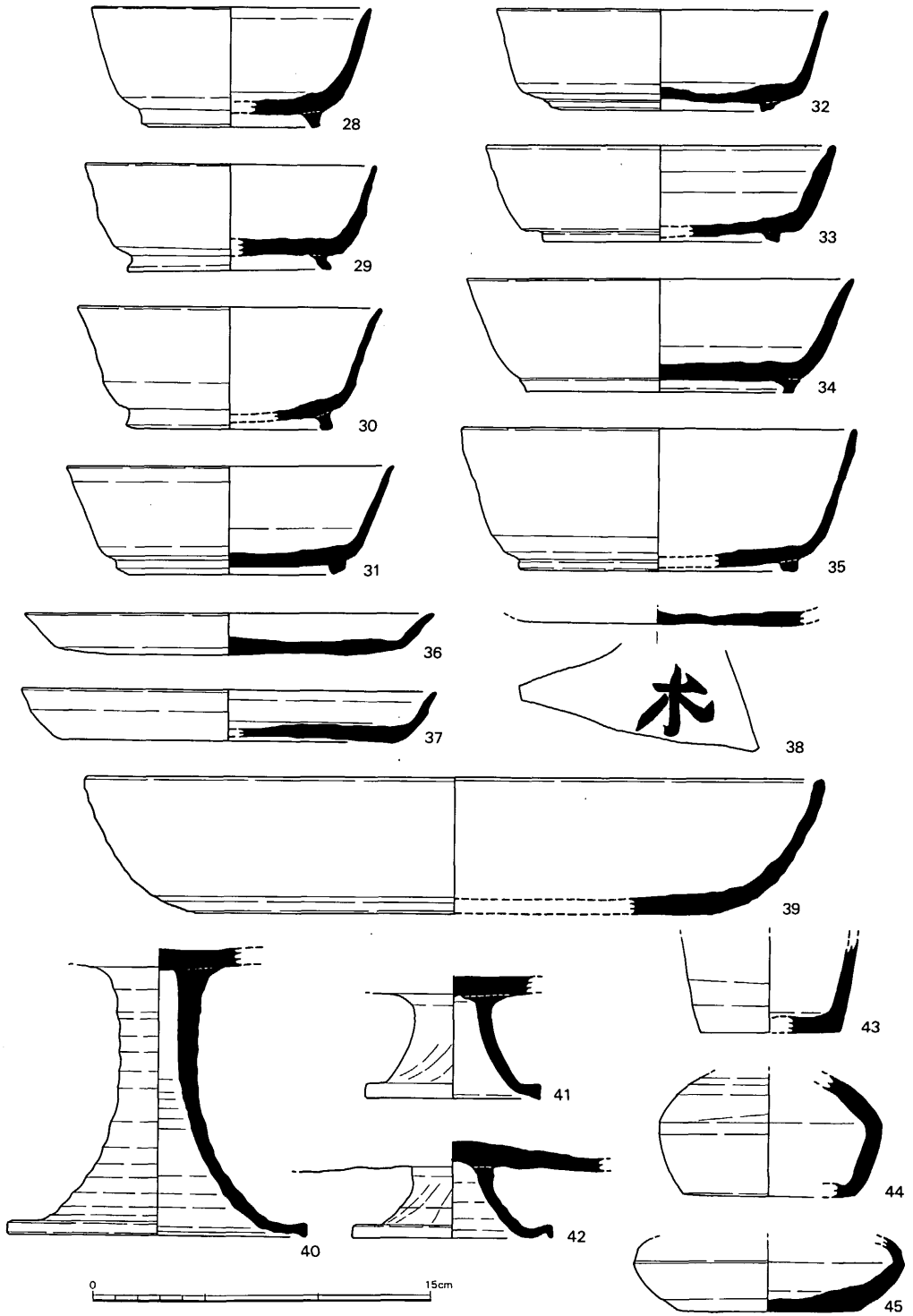
盤 (39) 平底で、体部は丸味をもつ。外面の底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリ、底部内面はナデ、体部はヨコナデ調整。

高杯 (40～42) すべて脚端部は下方に屈曲させている。40は長脚の高杯の脚部。調整は内外面ともヨコナデ。41・42は短脚。調整は杯部外面は回転ヘラケズリ、杯部内面はナデ、脚部は内外面ともヨコナデ。脚部外面にシボリ痕がみられる。

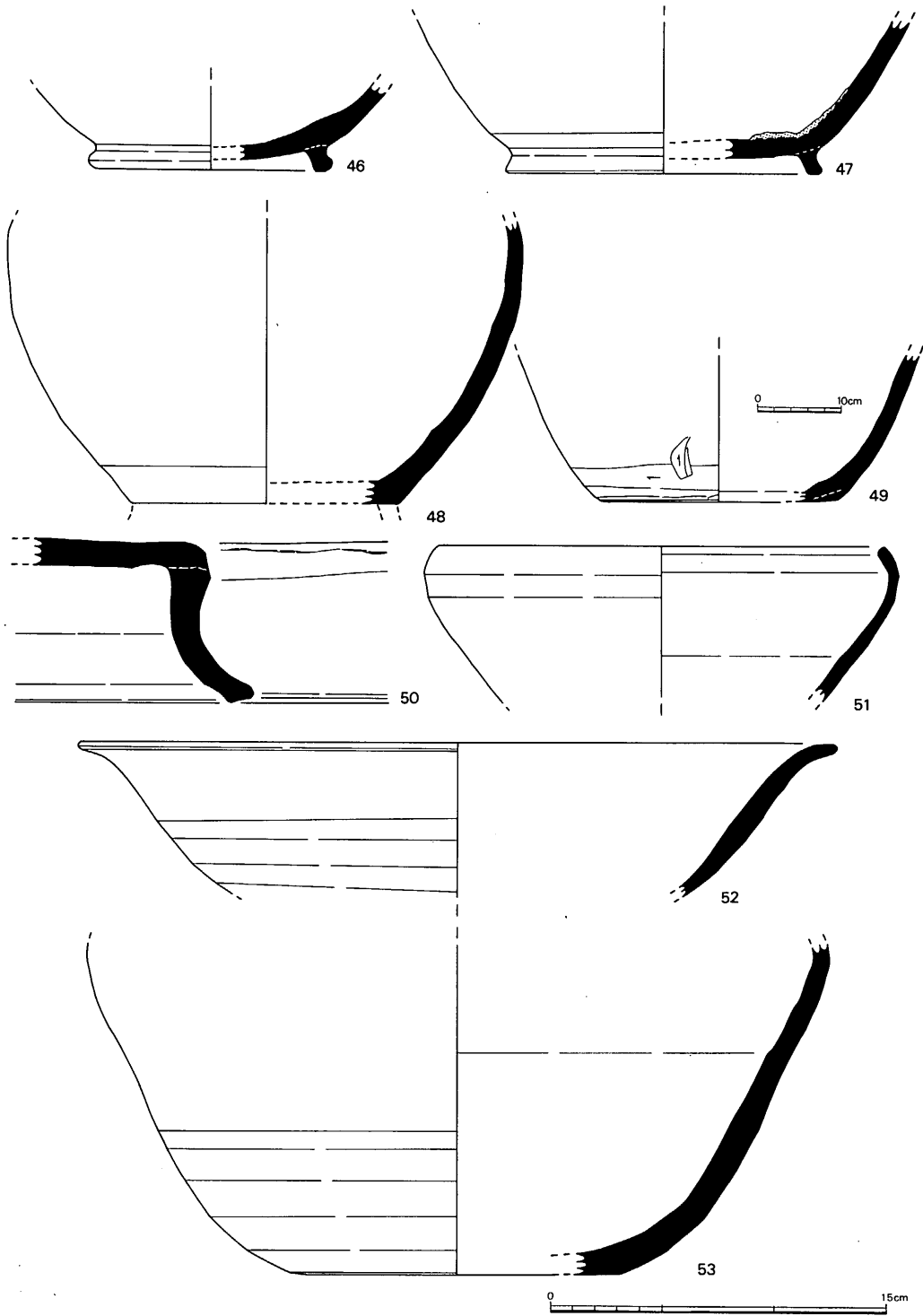
壺 (43～49) 43～45は平底の小壺。43は底部から直線的に立ち上がるもの。底部外面から体部下半にかけて回転ヘラケズリ調整。内面と体部外面はナデを施す。44・45は底部から丸味をもって立ち上がるもの。44は外面の肩部に回転ヘラケズリを施す。その他の部位はナデ調整。45は外面の底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリ、外面の体部はナデ、内面はヨコナデを施す。

46・47は長頸壺の底部。外面に回転ヘラケズリをした後、「ハ」の字に開く高台を貼付する。46の内面はナデ。47の内面はヨコナデで、底部内面に灰白色の付着物がみられる。48は球形の体部となるもの。底部端に高台の貼付痕が残る。外面の底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ、内面の底部から体部位下半にかけてナデ、体部は内外面ともヨコナデ調整。49も外面の底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ、体部外面はナデ、内面はヨコナデを施す。

台 (50) 円盤に「ハ」の字に開く脚がつくもので、台と考えられる。台部は内外面ともナデしているが内面は粗い。台部周縁はヘラケズリ。脚部は内外面ともヨコナデ。



第21図 茶褐色土下層出土土器実測図(2)



第22図 茶褐色土下層出土土器実測図(3)

鉢 (51~53) 51は鉄鉢形の口縁部。内外面ともヨコナデ。52は洗面器形の浅鉢。体部下半は回転ヘラケズリ、口縁部から内面にかけてはヨコナデ調整。53は口縁部を欠くが鉢になるものと考えられる。底部は平底で、そこから丸味をもって立ち上がる。外面の底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ調整。内面は底部から体部下半がナデ、体部の上半はヨコナデ調整。

甕 (54~60) 54~58は球形の体部に外反する口縁部が付くものである。体部外面は格子タタキで、内面には同心円の当具痕が残る。54の内面の口縁部と体部の境には丸棒状工具のアタリ、あるいはヘラナデと考えられる痕跡がある。56・58の肩部分にはカキ目を施す。59は平底の甕の底部。外面は平行タタキ、内面には同心円の当具痕が残る。60は把手の破片。体部外面は格子タタキ、内面は同心円の当具痕が残る。把手はヘラによるケズリ風の面取りを行なう。

硯

円面硯 (61) 圈足硯の上半分の破片である。硯面および海部に墨痕が付着する。透しは長方形で8ヶ所残存し、復原すると12~13個となる。硯面は径8.2cmをはかり、使用により平滑になっている。外堤部は陸部よりも低く、外傾して貼付される。

土師器

杯 (62~64) 62は内外面ともヨコナデ。底部の調整は不明。口縁部には油煙が付着する。63は風化が著しく調整不明。64は高台が付くもの。底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面はナデ、口縁部はヨコナデ。胎土は精良で、赤褐色を呈する。

椀 (65) 底部外面は回転ヘラケズリ、その他は回転ヘラミガキ調整。胎土は精良で砂粒を殆ど含まない。

皿 (66) 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反するもの。器面の風化が著しく、調整不明。

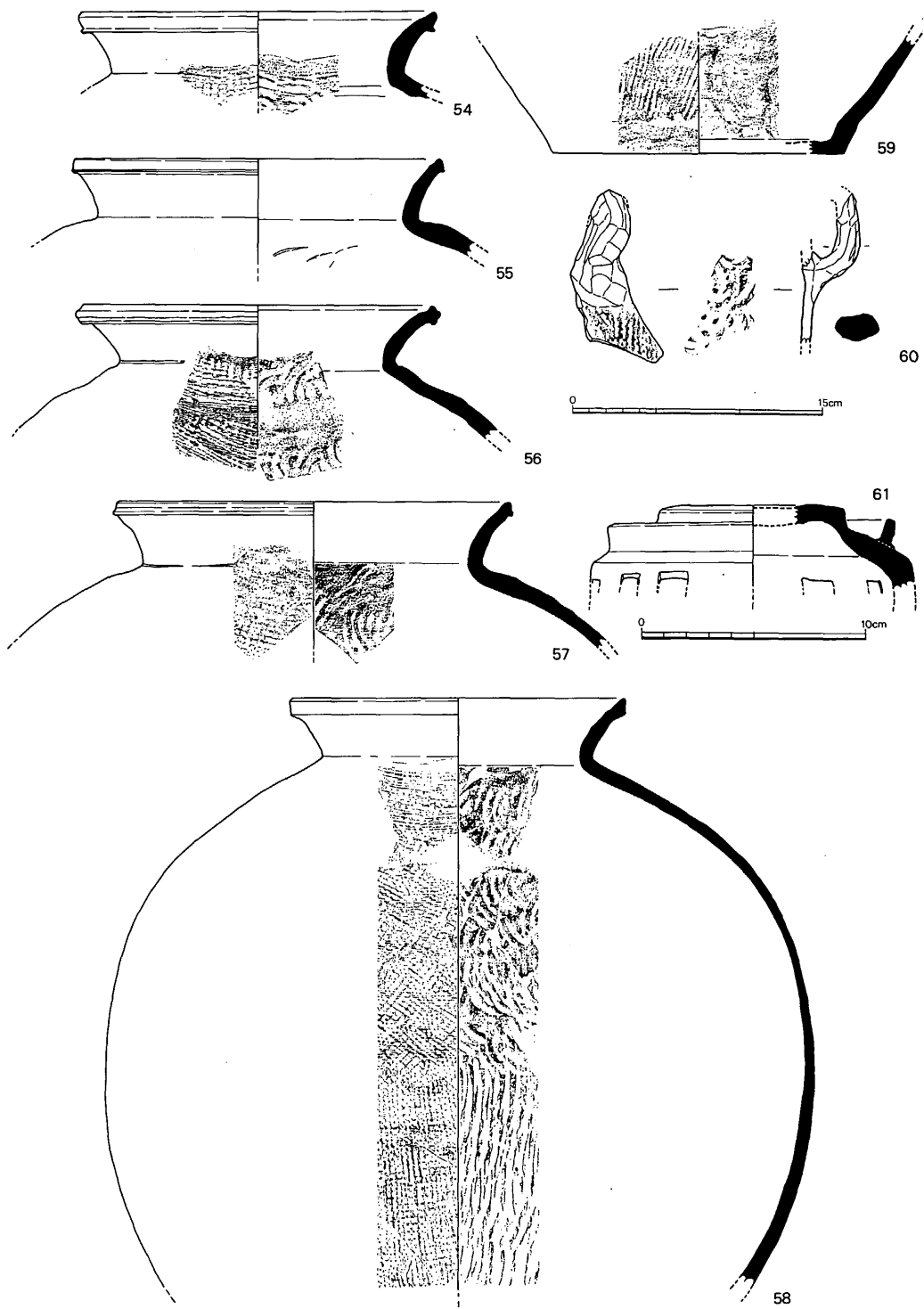
焼塩壺 (67~69) 67・68は円筒形、69は円錐形になるものである。67・68の外面には指頭圧痕が、67の内面には細かい布目が残る。69は磨滅が著しく調整不明。

甕 (70~75) 70は玄界灘式製塩土器の胴部破片である。調整は外面が擬似格子のタタキで、内面には同心円の当具痕が残る。甕には71・72・75のように胴部が張らないものと、74のようにやや張るもの、73のようになりに張るものがある。いずれも体部外面は縦方向のハケ、内面は縦或いは斜め方向のヘラケズリ、口縁部にはヨコナデを施す。胎土には砂粒を多く含む。

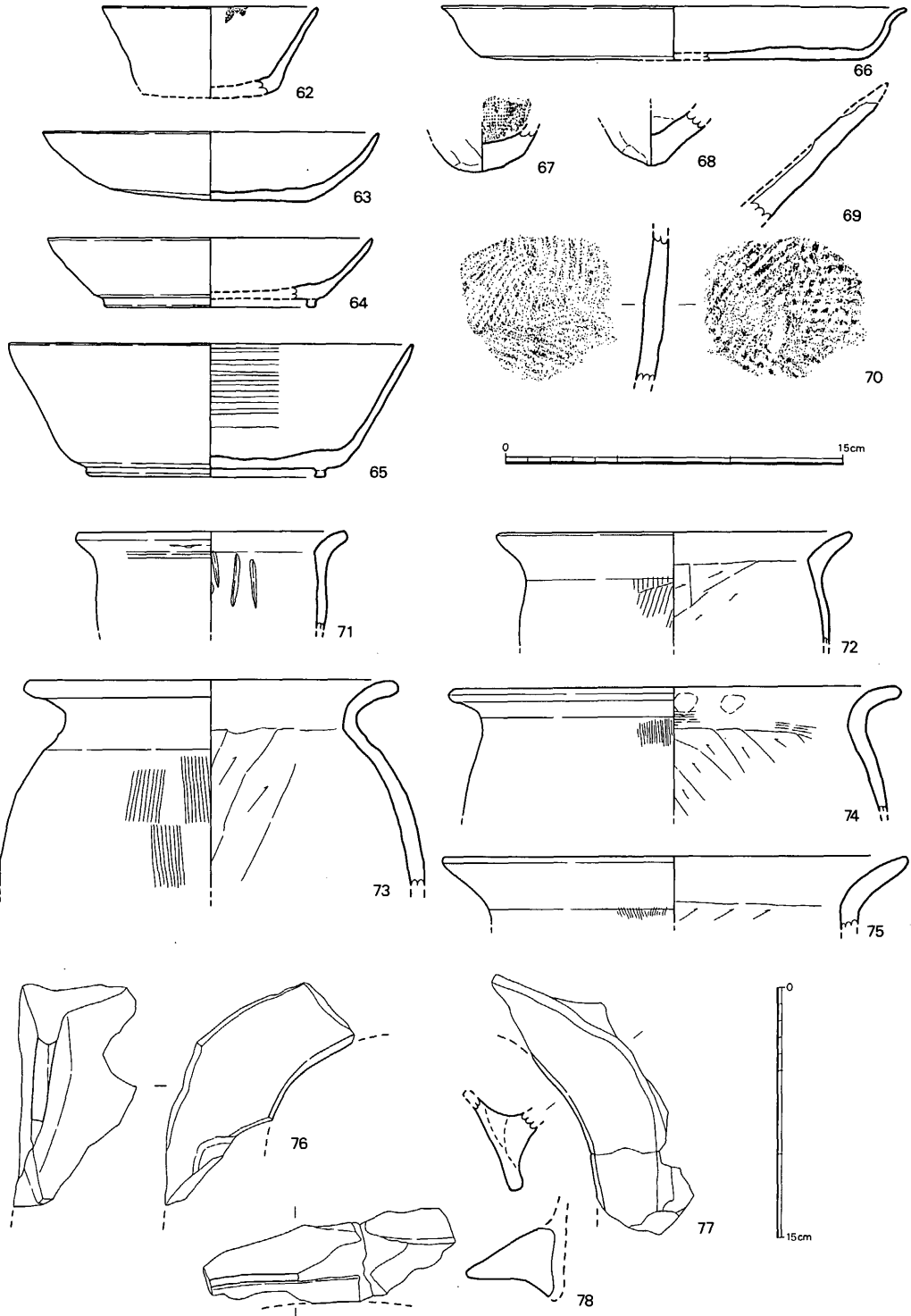
竈 (76~78) 76・77は移動式竈の鏝の部分である。色調は黄褐色~暗茶褐色で内面は焼けて煤が付着している。78は底の部分で、断面が三角形を呈する。

灰釉陶器

皿 (79~81) 79は口縁部の小破片。内面の中位に段をもつ。内外面ともヨコナデ。釉は内面にかかり、外面は露胎となる。須恵質。80・81は底部。ともに断面四角形の高台を貼付する。



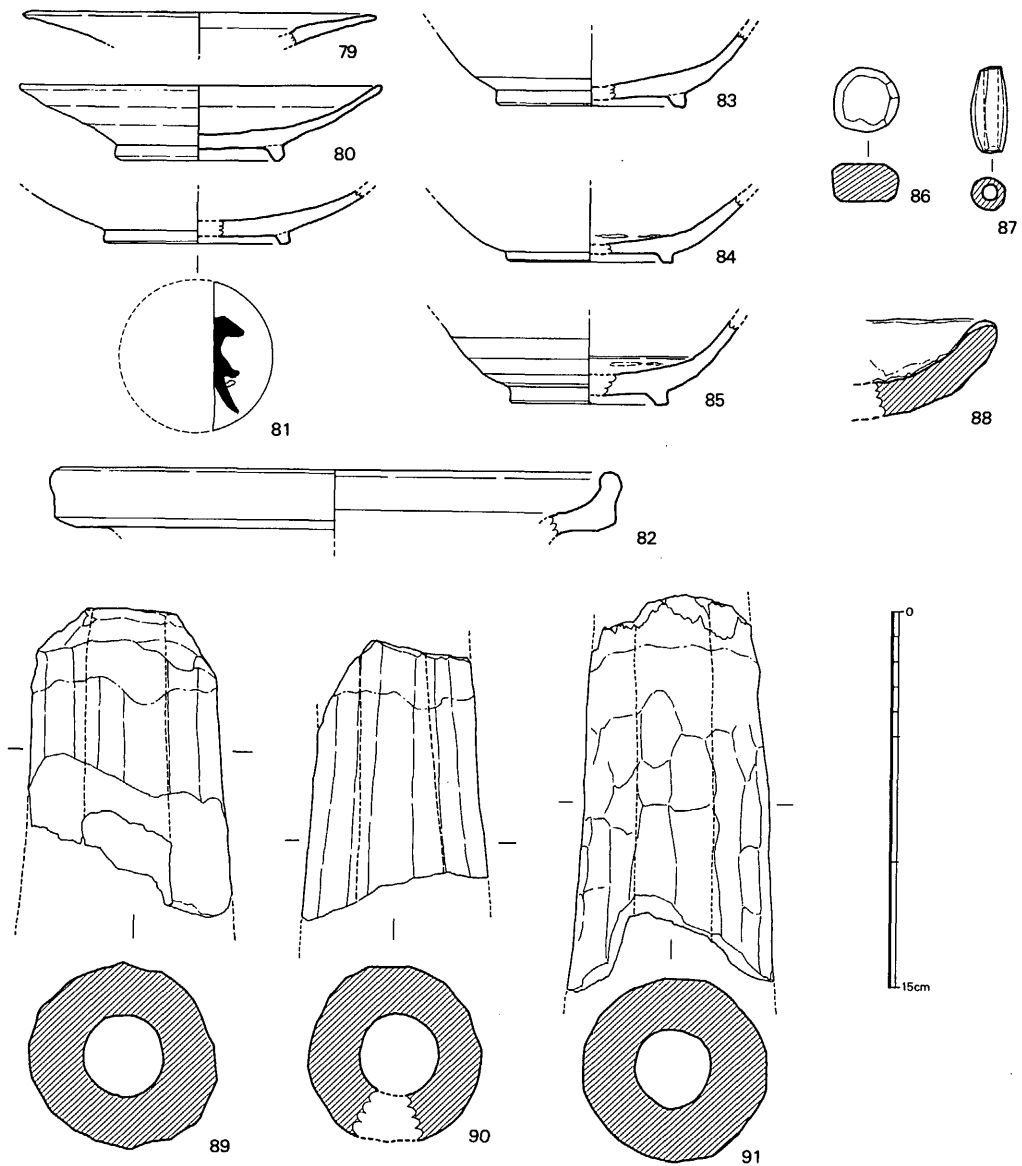
第23图 茶褐色土下層出土土器実測图(4)



第24図 茶褐色土下層出土土器実測図(5)

外面はヘラケズリ、内面は細かいミガキを施す。内面には緑味をおびた灰色釉がかけられる。外面は露胎となる。81の底部には文字と思われる墨書があるが、1/3程しか残存しておらず判読不明。aは底部破片で内面にわずかに釉が残っている。

椀 (83) 椀の底部。胎土は灰白色で、内面に半透明の淡緑色の釉を施す。外面は露胎となる。



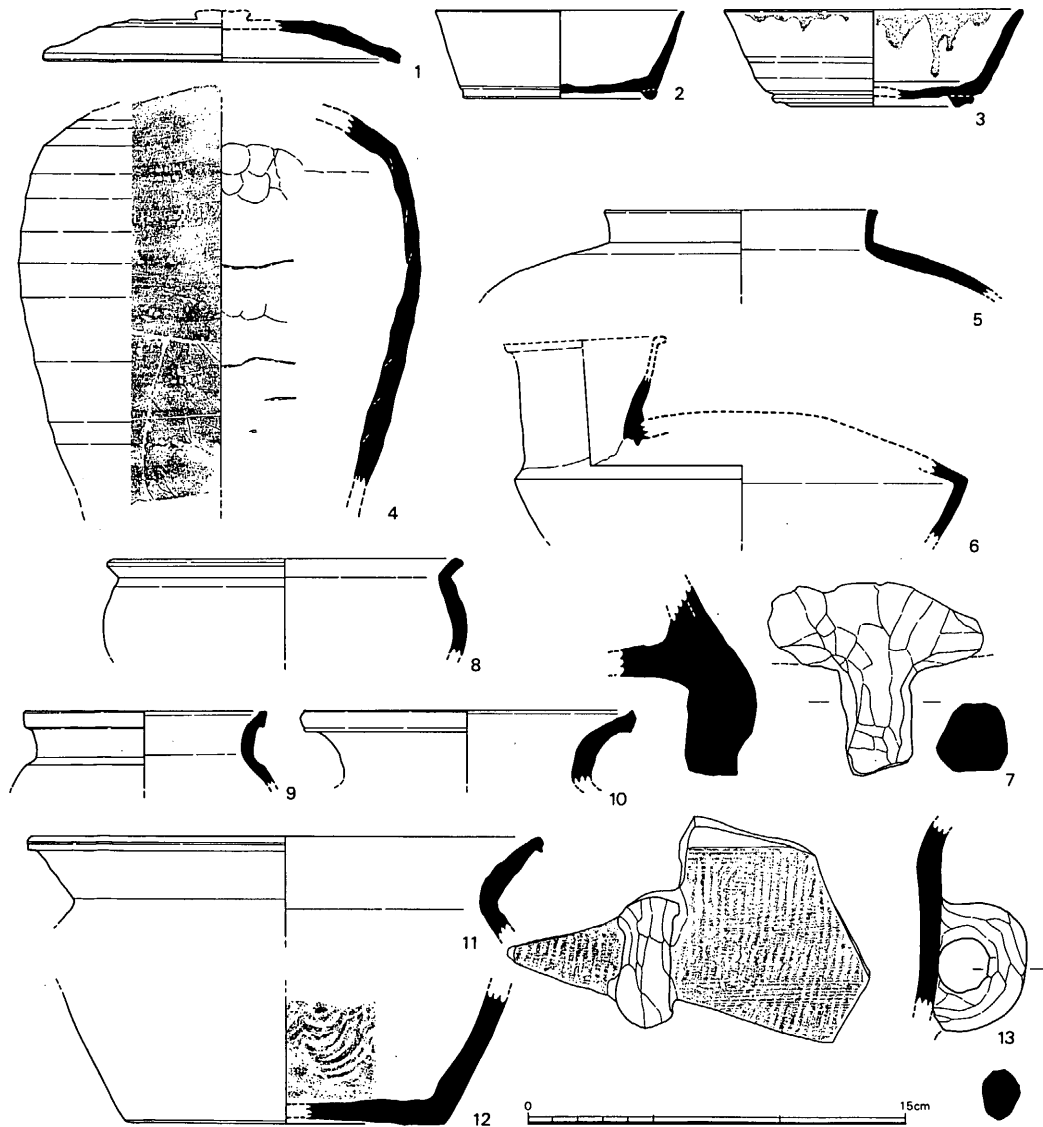
第25図 茶褐色土下層出土土器実測図(6)

緑釉陶器

長頸瓶 (82) 二重口縁瓶の口縁部の破片。口縁端部は丸くおさめる。胎土は淡茶白色で、内外面に光沢のある暗緑色釉を厚めにかける。土師質。

中国陶磁器

碗 (84・85) ともに底部破片。淡茶色の胎に黄味をおびた緑色釉をかける。高台壘付は露胎となる。見込みには目跡が残る。



第26図 茶褐色土層出土土器実測図(1)

土製品

円盤状土製品 (86) 瓦の周縁を打ち欠き、磨いたもの。径2.5cm、厚さ1.5cmを測る。

土錘 (87) 砲弾形で中央に径0.6cmの孔を穿ったもの。長さ3.5cm、径1.3cm。重さ7.5g。

埴塼 (88) 手捏ねの埴塼の片口部分の破片。凹凸が著しい。外面は火熱を受けて灰青色になる。内面には鉄滓が付着する。胎土は粗く、砂粒を多く含んでいる。

韃羽口 (89~91) いずれも先端部の破片である。先端部は火熱を受けて灰青色に変色する。89はさらに先端が溶解してガラス化している。すべて手捏ね。中央部付近で89は径7.3cm、90は径6.8cm、91は径7.3cm。孔径はすべて3.2cm。胎土には砂粒が多く含まれている。

石製品

石帯 (b) 巡方の小破片。風化が著しい。

茶褐色土層出土土器 (第26・27図、図版26)

須恵器

蓋 (1) 口縁端部の内側に僅かに段をもつもの。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデ、口縁部はヨコナデ調整による。

杯 (2・3) 2 底部と体部の境が明瞭なもので、体部は直線的である。底部はヘラ切り未調整。高台は底部の端に貼付される。3は口縁部の内外と底部内面に油煙が付着する。

壺 (4・5) 4は二重口縁壺の体部の破片。つくりは雑で、内面には粘土の継目が確認できる。外面は格子のタタキの後、回転ヘラケズリを施す。内面は肩部がユビオサエ、上半部がナデ、下半部はヨコナデを施す。5は短頸壺。内外面ともヨコナデによる。

平瓶 (6) 頸部下半から体部にかけての破片である。頸部から体部上半はヨコナデ。外面の下半は回転ヘラケズリ調整。

脚付盤 (7) 獣脚が1ヶ所のみ残存する。全面ヘラによるナデ調整を施す。

鉢 (8) 球形の体部に外反する短い口縁が付くもの。体部内外面はナデ、口縁部はヨコナデを施す。

甕 (9~13) 9・11の体部外面は粗い格子タタキが残る。口縁部はすべてヨコナデ調整。12は底部破片。外面はタタキの後ナデ調整、内面には同心円の当具痕が残る。底部内面はナデ。13把手付甕の口縁部近くの破片。外面は格子タタキの後カキ目を施す。内面には同心円の当具痕が残る。把手は環状で一つのみ残存する。把手はヘラによって面取りされる。

土師器

杯 (14) 小形の深い杯。調整は器面の風化が著しく不明である。

椀 (15) 底部の破片。直立する高台が付く。底部はヘラ切り未調整。

甕 (17・18・a) とともに胴部があまり張らないものである。外面は縦方向の粗いハケ、内面は斜め方向のヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。18の体部下半には煤が付着する。aは玄界灘式製

塩土器片で、外面に擬似格子、内面にアテ具痕が残る。

緑釉陶器

碗 (16) 円盤状高台を持つもの。全面に施釉するが風化が著しい。土師質。

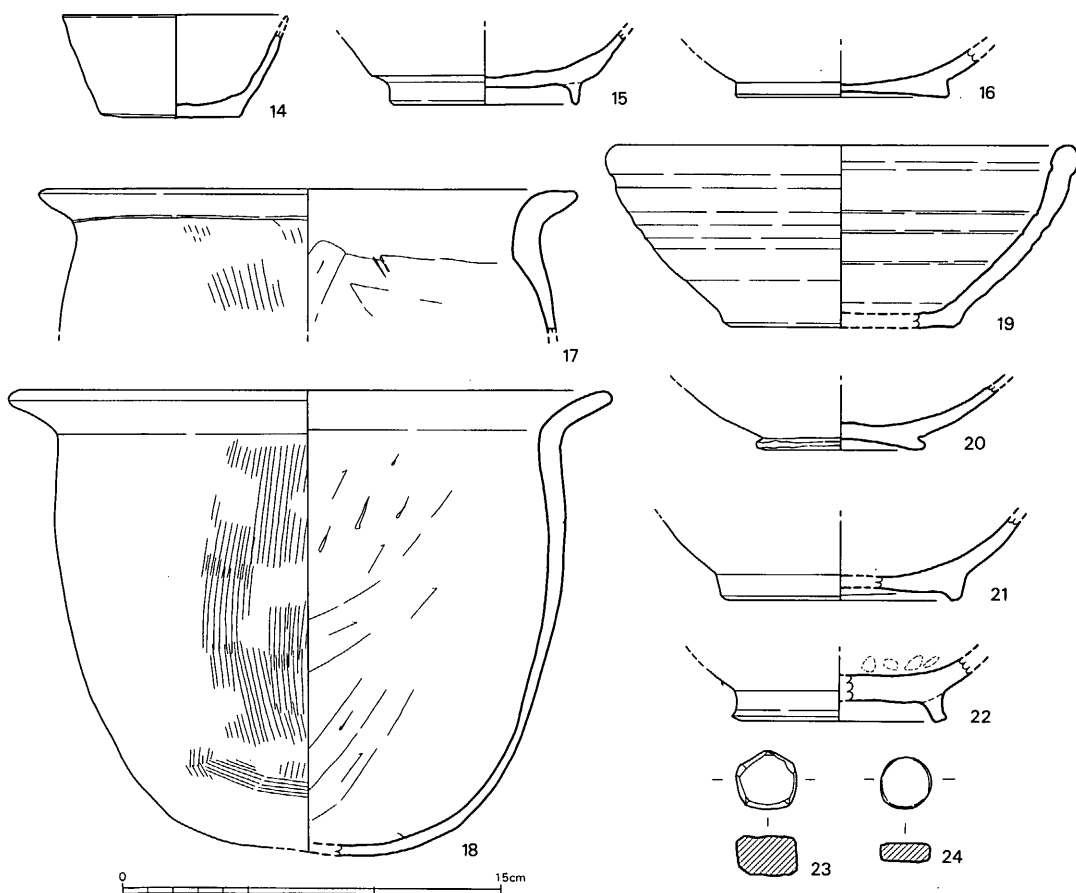
国産陶器

鉢 (19) 平底で、体部は丸味をもって立ち上がる。口縁部は玉縁状に丸くおさめる。内外面ともヨコナデで、底部は不整方向のヘラケズリを行う。色調は灰色で、胎土は精良。篠窯産。

中国陶磁器

青磁

碗 (20~22) 20は底部が円盤状になるもので、内面と外面の上位に黄味のある緑色の釉を施す。体部の中位内面に沈線状の凹みを巡らす。底部内面に目跡が残る。21・22は輪状高台をもつもの。畳付を除いて内外面に灰緑色の釉を施す。22の底部内面には目跡が残る。すべて越



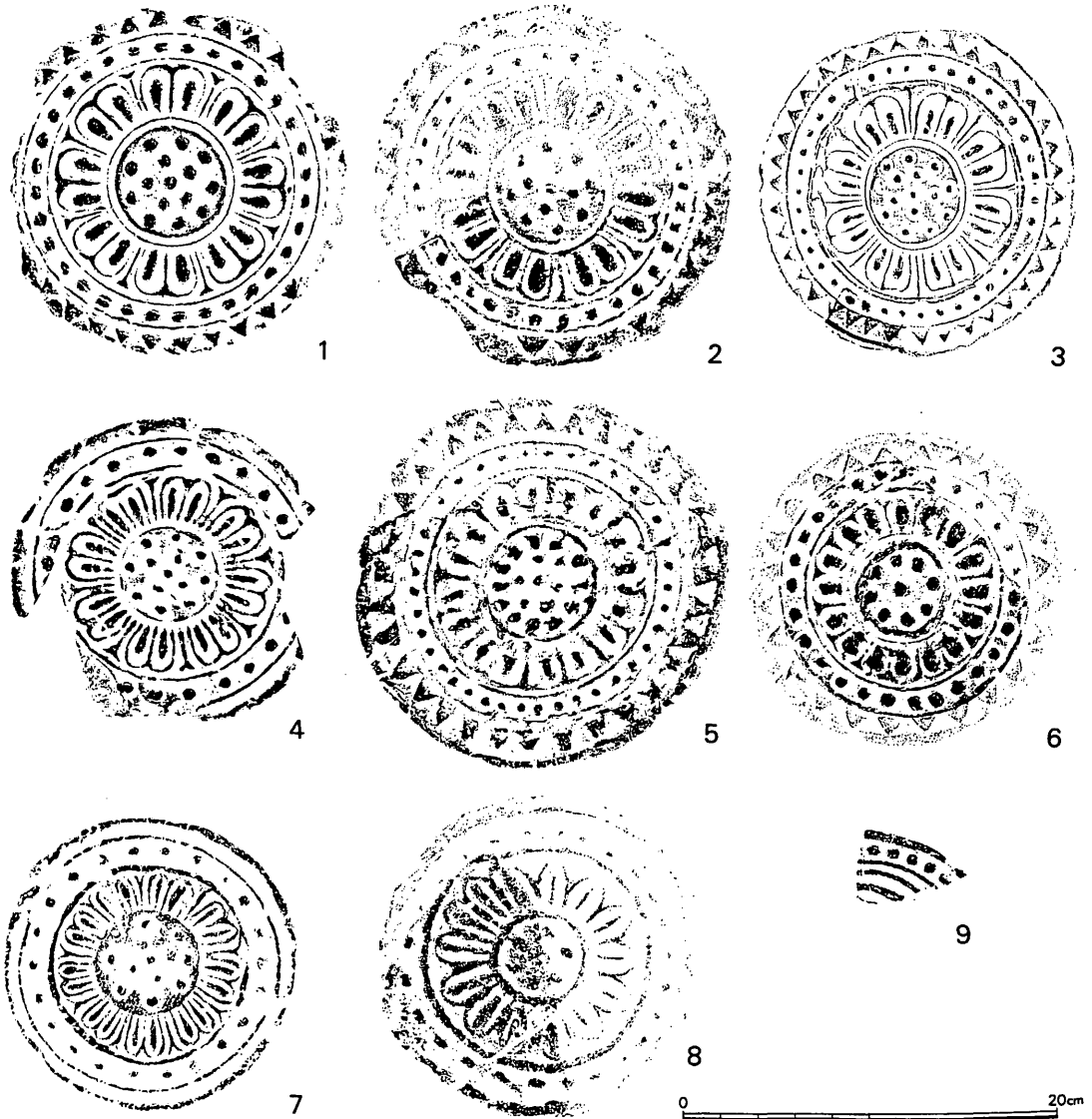
第27図 茶褐色土層出土土器実測図(2)

州窯系。

土製品

円盤状土製品 (23・24) 瓦の周縁部を削って円形に整えたもの。23は径2.4cm、厚さ1.6cm。
24は径2.1cm、厚さ0.8cm。

渦埴(c) 小破片で青灰色を呈する。



第28図 軒丸瓦拓影

石製品

石鍋（a） 鏝部の破片で転用品と考えられる。

瓦類

軒丸瓦9種33点・軒平瓦6種63点・鬼瓦1点・丸瓦・平瓦等の出土があった。なお、丸瓦・平瓦片には叩打具に文字を刻んで凸面を叩打した文字瓦片20点も出土している。

軒丸瓦（第28図、図版27、別表）

1は老司II式軒丸瓦である。老司I式軒丸瓦の裏面下部にみられる凸帯はなく、瓦当周縁に櫛状の器具による整形痕がみられることが特徴的である。9点（27%）と今次調査では最も多い。2は1に類似する瓦当文様の軒丸瓦である。1に比較して蓮弁が偏平になっている。文様では中房の珠文が1では1+5+9なのに対し、2では1+4+8となり、外区内縁の珠文数が1より二つ多く34珠ある。逆に鋸歯文の数は四つ少ない。2点出土。

3の軒丸瓦の特徴は中房・内区蓮弁の部分より外区珠文帯・鋸歯文帯が一段高く平坦であるから小破片でも見誤ることはない。2点出土。

4は鴻臚館I式軒丸瓦である。この地区出土の鴻臚館I式軒丸瓦は范傷などのない端正な瓦当で、比較的木型の新しい時期に制作されたものと考えられる点特徴的である。5点（15%）出土。5は中房の蓮子が1+6+12と多く、弁区では間弁が子葉を周って連なる大振りの軒丸瓦である。7点（21%）が出土している。

6は瓦当文様が5に類似しているがやや小型となっている。中房の蓮子は1+8で、5に比較すると蓮弁の子葉がやや幅広で短く盛り上がっている。1点出土。

7は4に類似する。両者の差異は4では複弁8弁なのに対し、7では9弁になっていること、間弁が細く長いこと、外区蓮子数が4より二つ少なく22子であることなどである。3点が出土している。

8は単弁14弁の軒丸瓦である。1点出土しているが、木范傷が縦方向に走っている。

9は左回りの巴文軒丸瓦である。巴の尾が長いこと、外区素文縁の幅が狭いことから巴文軒丸瓦としては古い形式のものと思われる。1点出土。

なお、1・3・5は不丁地区で調査されたSD2340から出土している。

軒平瓦（第29図、図版28、別表）

1は老司II式軒平瓦である。今次調査では26点（41%）と最も出土量が多かった。平瓦部凸面は擦り消されたものもあるが、粗い縄目叩打痕がつく例が多く、格子目叩打痕のものは1点もない。また、平瓦部凹面では明らかに粘土紐桶巻き作りと考えてよい横方向の粘土の紐跡が認められるものがある。

2は偏行唐草文の流れが1とは逆に左から右に流れる。また、脇区は区画だけの表現で珠文も鋸歯文も配置されていない。5点程出土しているが、粘土紐桶巻き作りと考えられそうな資

料がある。

3は鴻臚館II式軒平瓦である。この地区で24点(38%)と1に次いで出土量が多い。4回反転する均整唐草文の両端は仕上げ時に軒平瓦の側面を削り仕上げするため、文様の一部が削り取られているのが通常である。平瓦部凹面には糸切り痕・模骨痕・粘土板合わせ目痕・布の継ぎ目痕などがつくから粘土板桶巻き作りと考えてよい。また、平瓦部凸面には正方形の格子目叩打痕と縄目叩打痕の両者がつくものが多い。明確にはしがたいが、縄目叩打が後からされたと考えられるものがある。また、格子目痕も2種類以上あるようだ。

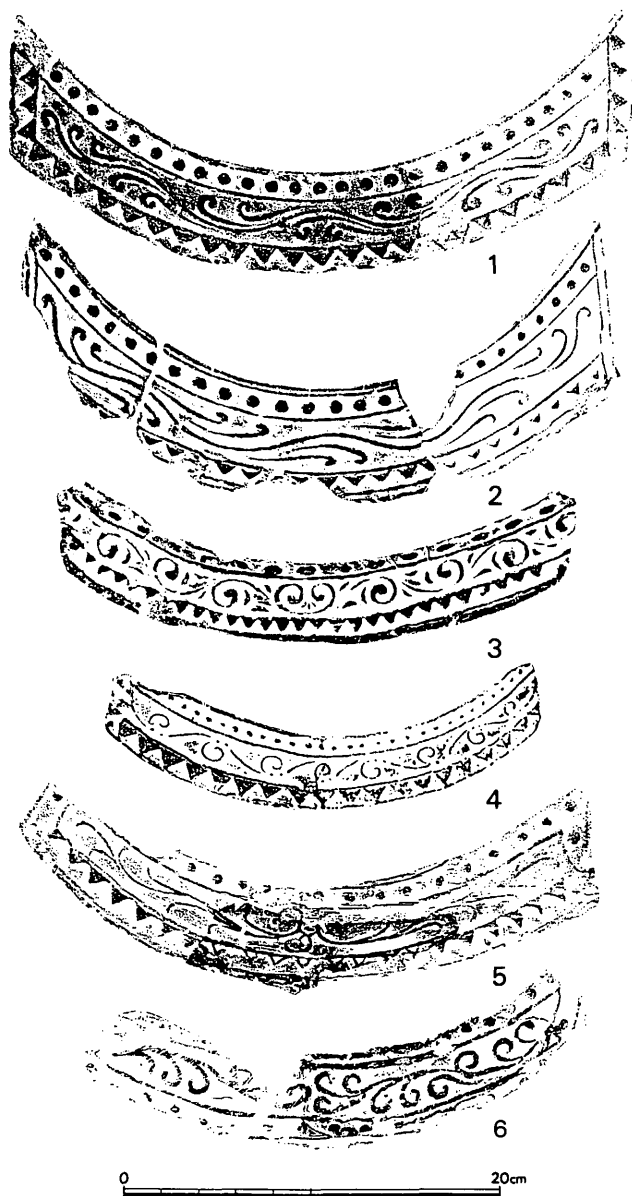
4は右から左に偏行する唐草文で、上帯に細かい連珠文、下帯凸鋸歯文である。8.5cm程の比較的深い段顎の瓦で、顎裏には縄目叩打痕が縦方向に付く。瓦当文様からは第28図3の軒丸瓦とセットと考えたい資料である。5点が出土している。

5は細かい均整唐草文の中心飾りの部分である。出土した2

点は下帯が線鋸歯文であるが、凸鋸歯文の瓦と重ね合わせることができると彫り直しの関係にある。第28図7の軒丸瓦とセットとなる可能性が不丁地区では考えられている。

6は中心飾りのない均整唐草文軒平瓦である。4cm程の浅い段顎の軒平瓦で、顎には縦方向の縄目が付く。1点出土。これらの軒平瓦のうち1~4はSD2340から出土している。

以上が軒瓦の出土状況である。軒丸瓦では老司II式が最も多く出土し、次いで第28図5の老



第29図 軒平瓦拓影

司系と考えてよい軒丸瓦の順で、鴻臚館Ⅰ式軒丸瓦が3番目に多い出土量であった。他の軒丸瓦の出土量は比較的少ない。

軒平瓦では、老司Ⅱ式・鴻臚館Ⅰ式の順に多く、第29図2・4がこれに次ぐ。SD2340からはこれらのほとんどの軒瓦が出土している。SD2340の存続期間は和銅前後から天平末年頃までと考えられている。瓦類の出土量は多くはないが、不丁官衙の成立時期と存続期間について、これまでの調査成果を補強した結果と考えられよう。

鬼瓦（第30図、図版28）

右側脚部の破片1点が出土している。これまで出土している鬼瓦の文様とやや異なった点が認められる。大宰府式鬼瓦のいわゆる憤怒相は基本的に踏襲しているとみられるが、大きく開いた口の下歯が太く長く表現されていること、口脇の髭の表現が盛り上がり線となっていること、外区珠文帯が幅広くなっていることなどの相違点がある。

時期的にはやや新しい形式となるものと思われる。新出資料である。

文字瓦（第31図、図版29～31）

叩打具の一部に文字を陽刻・陰刻したものが丸・平瓦の凸面に叩打痕として残されている。

1は斜格子文の一部に「平井」の正字が陽刻されている。図は丸瓦凸面で叩打された後に周囲の斜格子文が指で擦り消されている。他に平瓦1点が出土している。

2は「平井瓦」の左右逆字が斜格子文の間に陽刻されている。丸瓦で3点出土。

3は粗く不規則な斜格子文に「平井」の左右逆字がある。木製叩打具の木目が一部破損した状況が残る。平瓦片のみ3点出土。

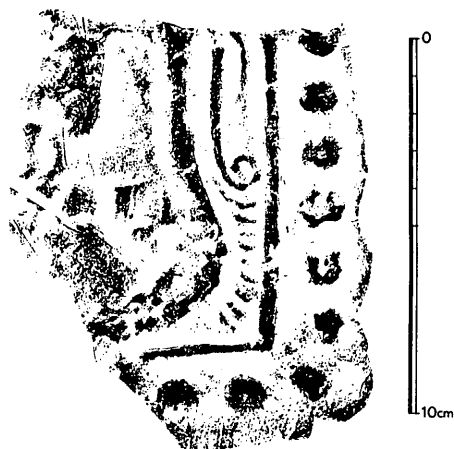
4は「平井」の左右逆字が認められる。「平井」の上に余分な一画がある。平瓦片で1点出土。

5は粗い斜格子にやや大きめの「平井」の文字が横方向に記されている。叩打具もやや幅広で7cm程が測れる。平瓦片で1点出土。

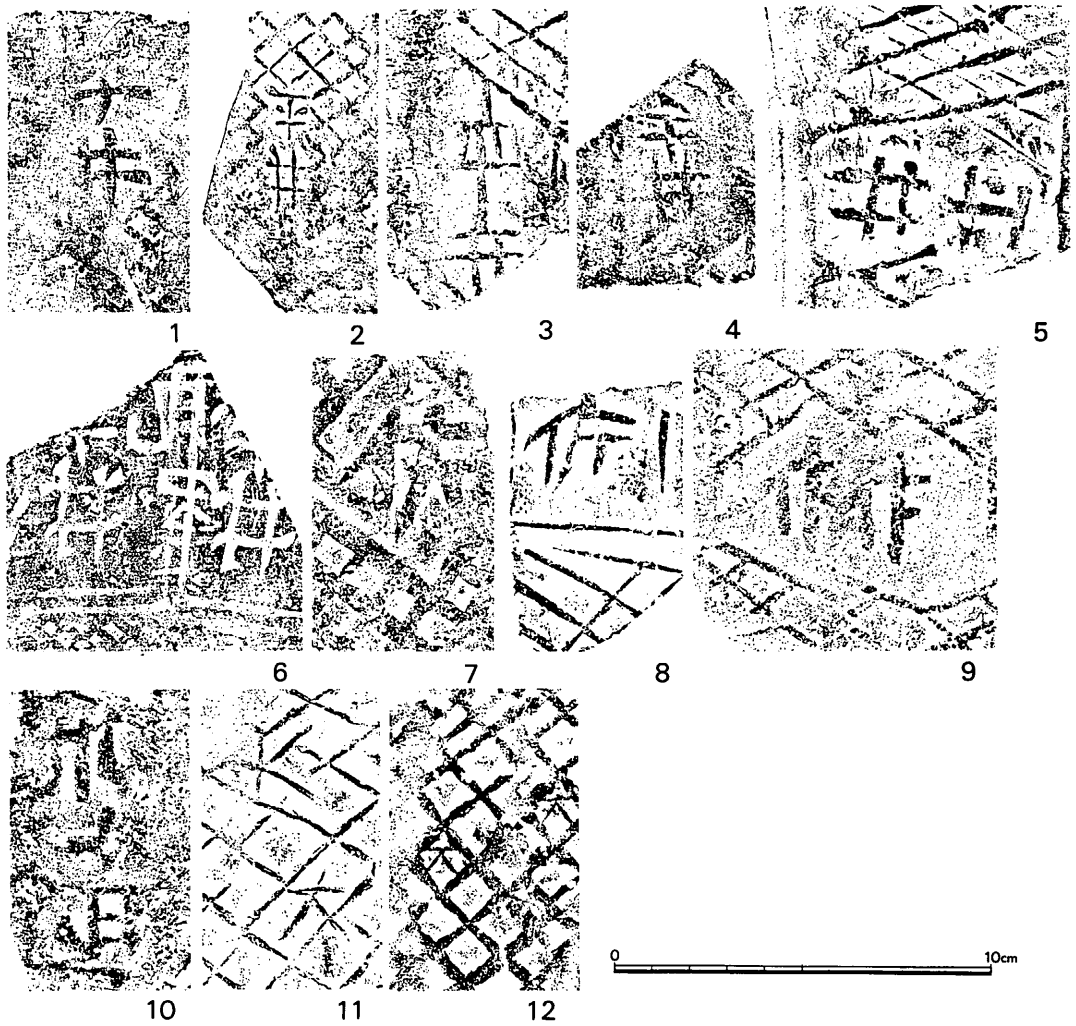
6は細かい斜格子の間に「平井瓦屋」の左右逆字が陰刻され、4字の周囲に一辺6.5cm程の二重の方形の枠が陰刻されている。平瓦片で2点出土。

7は「佐」の字であろう。最終画が欠落する。斜格子文は粗い。平瓦が1点出土。

8は斜格子文の中央に幅6cm程の方形の枠を彫り、「佐」と思われる文字を配置している。「佐」の右側には縦棒が陽刻される。平瓦片で1点出土。



第30図 鬼瓦拓影



第31図 文字瓦拓影

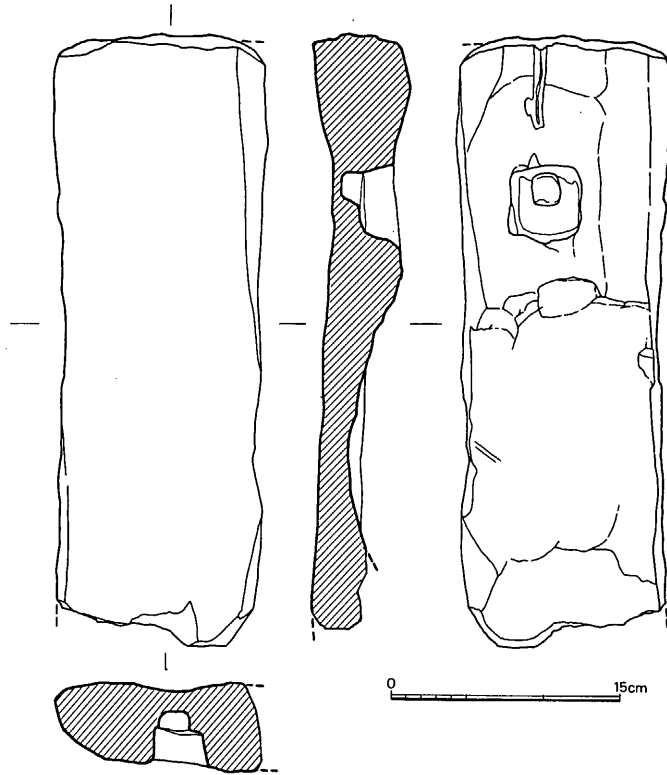
9は文字を表現したものと思う。「佐」に近い。周囲の斜格子文も粗い。平瓦片で1点出土。

10は「小ト瓦」の左右逆字である。意味は不明である。平瓦片で1点出土。

11は幅6cm、長さ25cmの叩打具痕がつく平瓦片である。一打ちされた斜格子目の中に縦方向・横方向の「大」と読める文字が一ヶ所ずつ配置されている。

12は11に類似する丸瓦である。斜格子文の一枠内に「大」字が配置される。

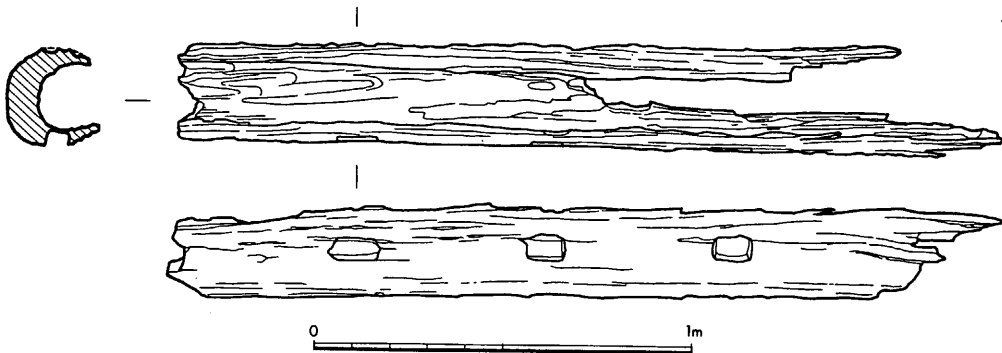
これらの丸・平瓦の叩打痕や制作技法には共通性がある。叩打痕から想定される叩打具は長さ25cm前後で、幅5～6cm程の叩打面を持つ縦長の器具である。また、丸・平瓦とも粘土円筒をそれぞれ二分割・四分割して制作されたものであるが、粘土円筒内面の広端側から狭端側へ



第32図 SX4050出土木製品実測図

分割截線が刃物で付けられる。刃物の痕はおよそ粘土の厚さの半分付近で止まり、残りは破面となっている。分割截線を粘土円筒に入れ乾燥後に割ったものと考えられよう。

この特徴の瓦類では、浜口廃寺と神興廃寺で出土している『延喜十一年』(911) 銘の平瓦、筑前国分寺出土の『天延三年』(980) 銘の平瓦、筑後国分寺出土の『延喜十□』銘平瓦等とも共通した特徴と考えられる。



第33図 SX4055出土木樑実測図

木製品

SX4050出土木製品（第32図、図版32）

現状で長さ40.5cm、幅14.0cm、最大厚6.2cmを測る。表裏とも削っているが凹凸が著しい。裏面には一辺4.6cm、深さ2.0cmの方形の孔を穿ち、さらにその中に一辺2.0cm、深さ1.4cmの穴を穿つ。穴がある部分は厚みをもつが、下半は薄く抉っている。台であろうか。SX4050の南端部で東西方向に入れたトレンチの腐植土層から出土した。

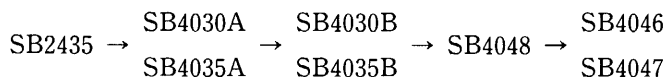
SX4055出土木樋（第33図、図版32）

長さ218cm、径27cmの木材に径17cmの抉り込みを入れる。側面には39cm等間隔で穴が3カ所に穿たれている。孔は長さ10cm、幅6cm、深さ4cmの長方形で貫通していない。建築部材を再加工して木樋に使用したものと考えられる。材質はコウヤマキか。

小結

今回の調査では8世紀前半代から10世紀代にわたる多くの遺構を検出した。検出した主な遺構は掘立柱建物9棟、柵2条、溝4条、井戸5基、土壇6基、流路、暗渠状遺構、道路ないしは築地の基礎部と考えられるものなどである。時期的には8世紀前半代～10世紀におよぶ。

まず、掘立柱建物の相互の関係については遺構の切り合い、出土遺物から次のようになる。



このうち柱掘形から出土した遺物により時期が特定できるのは、SB2435・SB4048・SB4046で、それぞれ8世紀前半・9世紀後半・10世紀中頃と考えられる。そしてSB4035Bは9世紀後半の土壇SK4058と切り合うため、下限を9世紀前半代におくことができる。SB4030A・4035Aの先後関係についてみると柱掘形の大きさに差があるものの、柱間が等しく柱筋も通るため並列して同時存在したと考えられる。SB4030B・SB4035Bはそれらの建て替えて、後者は南に扉をつけている。また、SB4047はすぐ西に建てられたSB4046と方位を同じくするため、これに近い時期のものであろう。

柵についてはSA4036はSB4030A・SB4035Aと方向を一にし、柵と建物の北側柱までの距離が建物の梁間と等しいことから、一連の施設の可能性がある。不丁地区では今回の調査分を含めて33棟（うち1棟の礎石建物を含む）の建物を確認したことになる。以前、不丁地区の8世紀前半～9世紀代の遺構について大きく4期に分けたことがある。これに従うとSB2435がI期、SB4030A・SB4035AがII期あるいはIII期、SB4030B・SB4035BがIII期あるいはIV期に比定できる。これらの不丁地区の建物については重複関係から考えるとさらに細分されるようであるが、それは今後の検討課題としたい。

次に井戸について見てみよう。今回検出した5基の井戸は9世紀末～10世紀代にかけてのも

ので、奈良時代に遡るものはない。このうち最も古いものはSE4033で9世紀末～10世紀初頭頃。SE4032は10世紀前半代、SE4051は10世紀中頃に位置づけられる。SE4031、SE4052についてもほぼ近い時期が考えられる。このうちSE4031、SE4032はSB4046、SB4047に伴う可能性がある。また、発掘区の中央部で検出した溝SD4044は10世紀後半代に埋没しており、先の掘立柱建物・井戸と一連のものである。

その他の顕著な遺構としては、SX4050上層の整地層と発掘区の南端部で検出したSX4045があげられる。前者については建物建設に先立つ地業としての流路の埋め立てが、8世紀前半代に行われていることが確認された。これは政庁跡前面の他の調査地点の結果とも一致する。後者は検出した位置・構造から考えて、不丁官衙域の南を限る施設との関わりが注意される。その時期については、今回、北側溝SD4038から出土した遺物をみると8世紀後半代にくだるような土器を含んでいない。しかし、先に触れたように第85次調査で検出したSD2471・SX2485と一連の施設と考えると埋没時期を8世紀後半代に置くことができる。この東西溝は1°程東に振れており、8世紀代の建物方位と一致する。いずれにせよ、この遺構が8世紀代に官衙域の南を画していたことは間違いない。このことは官衙的な掘立柱建物がSX4045を境として、その南側には広がっていないことによってもわかる。ここで問題となるのは、SX4045のさらに南にある東西溝SD2015である。SD2015はこれまで府庁域の南限としていた溝である。これは8世紀後半代に掘削された溝で、SX4045と並存した可能性もないではないが、出土遺物からSX4045より後出するものと考えたい。詳細については後日に譲りたい。

(註) 九州歴史資料館『大宰府史跡－昭和58年度発掘調査概報』1984

3. 第152次調査

本調査地は太宰府市観世音寺字大楠321-5に所在する。アパート建設に伴う事前の発掘調査である。調査面積は142㎡。

調査区は大楠官人居住域と広丸官人居住域に挟まれた部分で、平成4年度に第138次調査として発掘調査を行なった地点の西側隣接地にあたる。この第138次調査では8世紀末～10世紀初頭にかけての井戸4基を検出している。また、調査区の西北側隣接地の第132次調査では、2間×3間と考えられる8世紀末の掘立柱建物を確認しており、この地区の造営が8世紀代には始まっていたことが判ってきた。そこで今回は、さらに遺構の広がり把握することを主眼として調査を行なった。平成5年10月27日に重機により表土剥ぎを開始する。遺構検出の後、11月7日までに写真撮影・実測を終え、調査を完了した。

検出遺構

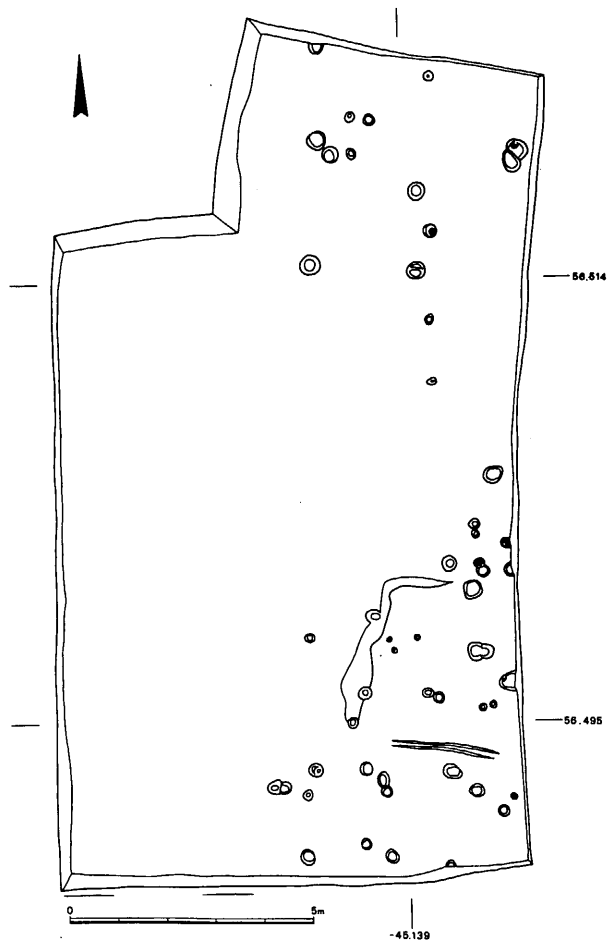
発掘調査の結果、検出した遺構は溝と多数のピットである。遺構は発掘区の東半部のみにみられ、西半部分は空地となっている。東側の第138次調査では遺構面を茶褐色土層が覆っていたが、本調査区では地山のすぐ上まで攪乱が入っていた。

出土遺物

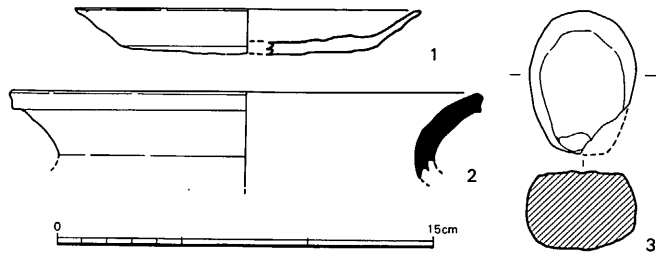
ピット出土土器 (第35図)

土師器

皿(1) 底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整、口縁部はヨコナデを施す。



第35図 第152次調査遺構配置図



第36図 第152次調査出土土器・石製品実測図

須恵器

甕（2） 口縁部の破片。内面に緑灰色の自然釉がかかる。

石製品

円盤状石製品（3） 長径5.7cm、短径4.2cm、厚さ3.1cm。全面を擦っている。軽石製。

別 表

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
SB4046 (第147次調査)									
土師器 杯	9	1	11.4	8.0	2.1				
SB4030A									
須恵器 蓋	9	2	(22.0)						
SE4032									
須恵器 杯	11	2	10.1	7.7	3.6				
	〃	3	(13.6)	9.0	5.0				
	〃	4	(13.5)	(9.4)	5.2				
土師器 皿	12	5	(10.0)	(8.4)	2.3				
SE4033									
土師器 椀	12	7	11.6						
	〃	8	(12.9)		5.2				
SE4051									
須恵器 杯	12	9	(14.2)	9.4	5.6				
SD4037									
須恵器 蓋	10	1	(13.2)						
	〃	2	(14.6)						
杯	〃	3	12.0	6.6	3.7				
	〃	4	(18.4)		5.2				
壺蓋	〃	5							
土師器 杯	〃	6	(10.0)		3.4				
椀	〃	7	(16.6)						
	〃	8	(20.4)						
皿	〃	9	(19.6)		2.3				
甕	〃	10	(18.2)						
SD4038									
須恵器 蓋	10	11	(12.3)						
杯	〃	12	(14.6)						
	〃	13	15.0	11.6	4.2				
SD4042									
須恵器 蓋	10	15	(11.0)						
SD4044									
土師器 椀	10	16	15.4	8.6	5.6				
SD4054									
須恵器 蓋	10	19	16.6		2.5				
	〃	20	(17.6)						
須恵器 皿	〃	21	(10.8)		2.7				







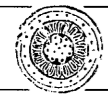


器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナアの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
SK4056									
須恵器 鉢	12	1	25.8		16.1				
SK4058									
土師器 杯	12	4	11.6	7.0	3.4				
	"	5	11.4		3.4				
SK4063									
須恵器 甕	12	8	(16.8)						
SX4050(灰褐色土層)									
須恵器 蓋	13	1	(13.0)						
	"	2	(10.8)		2.0				
	"	3	(19.4)						
須恵器 杯	"	4	(13.0)		4.5				
	"	5	12.6	8.9	3.7				
	"	6	(15.0)		4.3				
	"	7	(15.0)		5.5				
須恵器 鉢	"	8	(16.0)		10.2				
須恵器 甕	"	9	(21.0)						
SX4060									
須恵器 杯	14	1	(19.4)	(12.4)	(5.2)				
土師器 杯	"	2	(12.1)						
SX4065									
須恵器 蓋	14	8	(14.5)						
	"	9	17.0		15.7				
	"	10	20.3		2.6				
	"	11	(21.8)						
須恵器 杯	"	12	(13.2)	9.0	3.4				
SX4066									
須恵器 蓋	14	16	(13.4)						
SX4067									
須恵器 蓋	14	18	11.4		2.0				
	"	19	(16.0)		3.3				
須恵器 皿	"	20	(20.0)		3.5				
暗褐色土層									
須恵器 蓋	15	1	(12.0)						
	"	2	14.7						
	"	3	(16.2)						
	"	4	11.8		1.8				
	"	5	11.8						

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
須恵器 蓋	15	6	(12.2)						
	"	7	(13.0)		1.4				
	"	9	14.2		1.4				
	"	10	(15.0)						
	"	11	(15.0)		1.8				
	"	12	15.0		2.7				
	"	13	(15.8)		3.0				
	"	14	16.0		2.9				
	"	15	16.3		1.8				
	"	16	(17.4)						
	"	17	18.2						
	"	18	(18.5)		2.6				
	"	19	(19.5)		2.3				
"	20	(19.8)		2.6					
"	21	(27.4)							
"	22	(29.2)							
須恵器 杯	16	24	10.0		4.2				
	"	25	13.4		3.5				
	"	26	12.4		3.6				
	"	27	13.6		4.1				
	"	28	14.2		4.0				
	"	29	(14.2)		4.2				
	"	30	14.8		4.0				
	"	31	16.2		5.1				
	"	32	(16.8)		4.2				
須恵器 盤	"	33	(20.5)		5.0				
	"	34	(22.0)		4.7				
須恵器 皿	"	35	19.0		2.6				
	"	36	(19.4)	16.5	2.7				
	"	37	9.6	15.2	2.5				
	"	38	20.0	17.0	2.0				
	"	39	20.5		2.7				
須恵器 高杯	17	40	(27.6)						
	"	41	(29.2)						
須恵器 鉢	"	45	(18.8)						
	"	47	(33.0)						
須恵器 甕	"	48	(18.0)						
	18	49	18.6						
	"	50	21.9						
土師器 杯	"	53	9.6		4.3				
	"	54	(14.0)		3.6				
土師器 甕	19	60	(22.8)						
	"	61	(25.2)						
	"	62	(32.4)						
茶褐色土下層									
須恵器 蓋	20	1	(13.4)		1.9				

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
須恵器 蓋	20	2	(11.2)						
	"	3	11.4		2.5				
	"	4	11.9		2.0				
	"	5	(12.4)		1.9				
	"	6	12.8		2.3				
	"	7	13.6		1.6				
	"	8	(15.0)						
	"	9	15.6						
	"	10	(16.2)						
	"	11	16.2		2.1				
	"	12	(16.4)		1.0				
	"	13	(16.6)						
	"	14	17.0						
	"	15	17.2		2.5				
	"	16	(17.0)						
	"	17	17.2						
	"	18	(18.5)						
	"	19	20.0						
	"	20	(20.6)						
	須恵器 壺蓋	"	22	(13.0)					
須恵器 杯	"	23	12.8						
	"	24	13.6		4.2				
	"	25	17.9	7.0	5.1				
	"	26	(10.8)						
	"	27	11.0	6.6	3.8				
	21	28	(12.4)		5.4				
	"	29	13.0	9.0	4.8				
	"	30	(13.6)	9.2	5.5				
	"	31	(14.6)		4.9				
	"	32	14.8		4.6				
	"	33	15.6	10.5	4.4				
	"	34	16.2		5.1				
	"	35	17.6	12.4	6.4				
	須恵器 皿	"	36	(18.2)	15.6	1.9			
"		37	18.4	16.0	2.4				
須恵器 盤	"	39	(31.8)	(23.0)	6.1				
須恵器 鉢	22	51	(19.8)						
	"	52	(33.4)						
須恵器 甕	23	54	(11.0)						
	"	55	(21.4)						
	"	56	(20.8)						
	"	57	(23.2)						
	"	58	20.2						
土師器 杯	24	62	9.6	6.3					
	"	63	15.0		3.1				
	"	64	(14.4)		3.1				
	"	65	18.0	10.0	6.0				

器種	挿 図 番 号	番 号	口 径 (cm)	底 径 (cm)	器 高 (cm)	切 り 離 し		内 底 部 の ナ デ の 有 無	板 状 圧 痕 の 有 無
						ヘ ラ	糸		
土師器 皿	24	66	(20.8)		2.4				
土師器 甕	〃	71	(15.2)						
	〃	72	(21.2)						
	〃	73	(22.4)						
	〃	74	(27.2)						
	〃	75	(27.6)						
茶褐色土層									
須恵器 蓋	26	1	(14.2)						
須恵器 杯	〃	2	(10.0)		3.5				
	〃	3	12.0		3.9				
須恵器 壺	〃	5	(14.4)						
須恵器 甕	〃	8	(19.0)						
	〃	9	(13.6)						
	〃	10	(17.6)						
	〃	11	(27.0)						
土師器 甕	27	17	(28.6)						
	〃	18	32.0		25.0				

第147次調査出土軒丸瓦の出土遺構・層位等

	SD4037	SD4038	SD4039	SD4043	SD4044	SE4051	SK4056	SK4058	SK4059	SX4050 (灰褐土)	SX4055 (石組内)	SX4065	茶褐色 土下層	茶褐土	暗褐土	その他	合 計
 1			1										1	2	4	1	9
 2													2				2
 3														1	1		2
 4	1												2		1	1	5
 5						1 (掘方)				1			3		2		7
 6													1				1
 7													2	1			3
 8														1			1
 9														1			1
不明														1	1		2
33																	

第147次調査出土軒平瓦の出土遺構・層位等







	SD4037	SD4038	SD4039	SD4043	SD4044	SE4051	SK4056	SK4058	SK4059	SX4050 (灰褐土)	SX4055 (石組内)	SX4065	茶褐色 土下層	茶褐土	暗褐土	その他	合計
 1		1			1					2		1	7	6	8		26
 2													2	1	2		5
 3				1 (北石列溝内)				1	2	1	2	1	6	1	6	3	24
 4							1			1			2	1			5
 5									1					1			2
 6														1			1
63																	

圖 版



第96次補足調査区全景（南から）

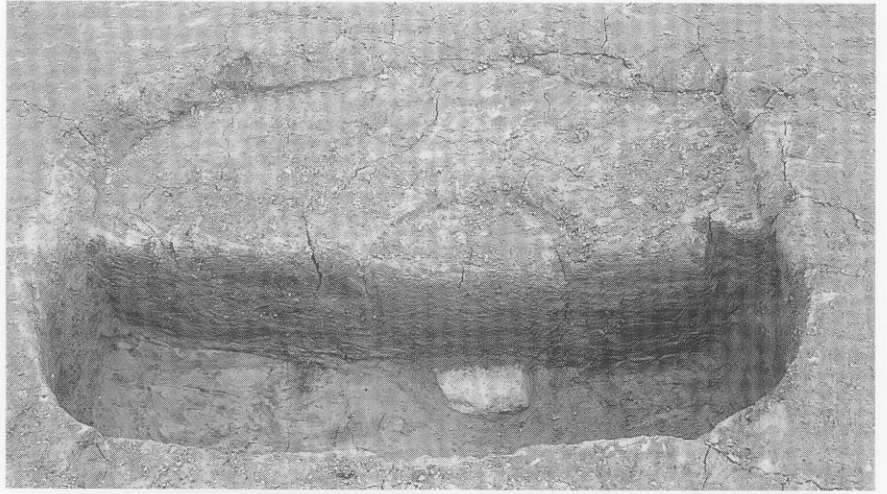


掘立柱建物SB2820、土坑SK2841（西から）



柵SA2833（北から）

掘立柱建物SB2820
柱掘形(A)



掘立柱建物SB2820
柱掘形(B)



掘立柱建物SB2825
柱掘形





第147次調査区全景（空中写真）図版左側が北



第147次調査区西半部全景（空中写真 西から）



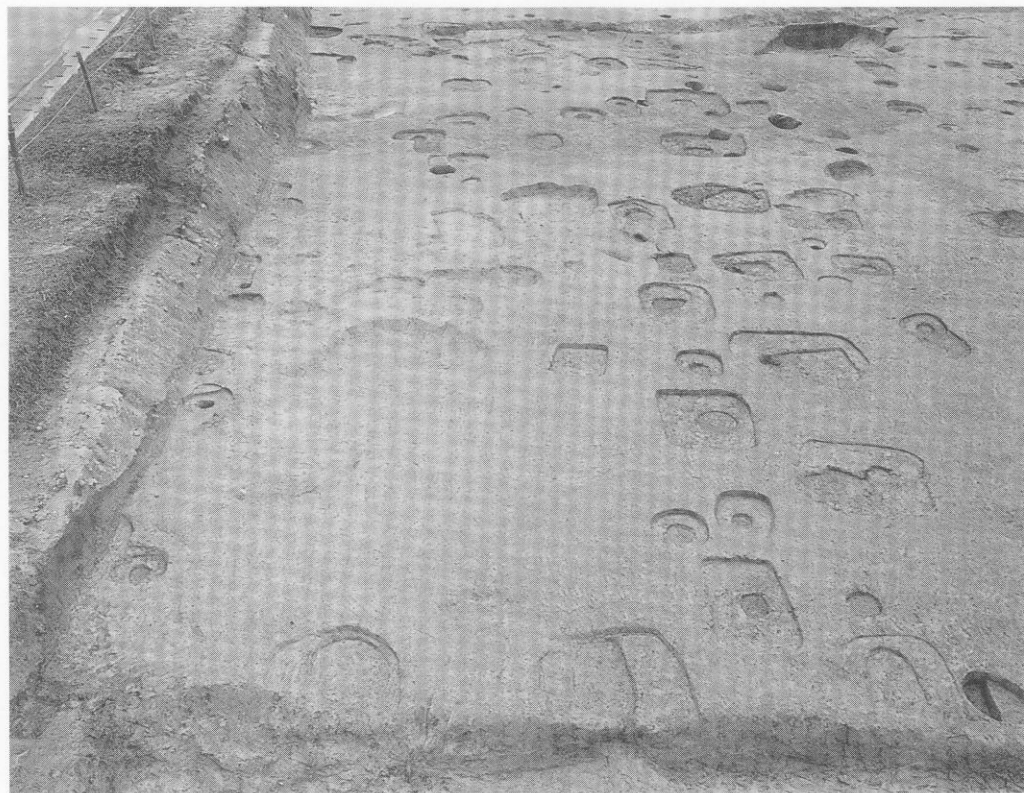
第147次調査区西半部全景（北から）



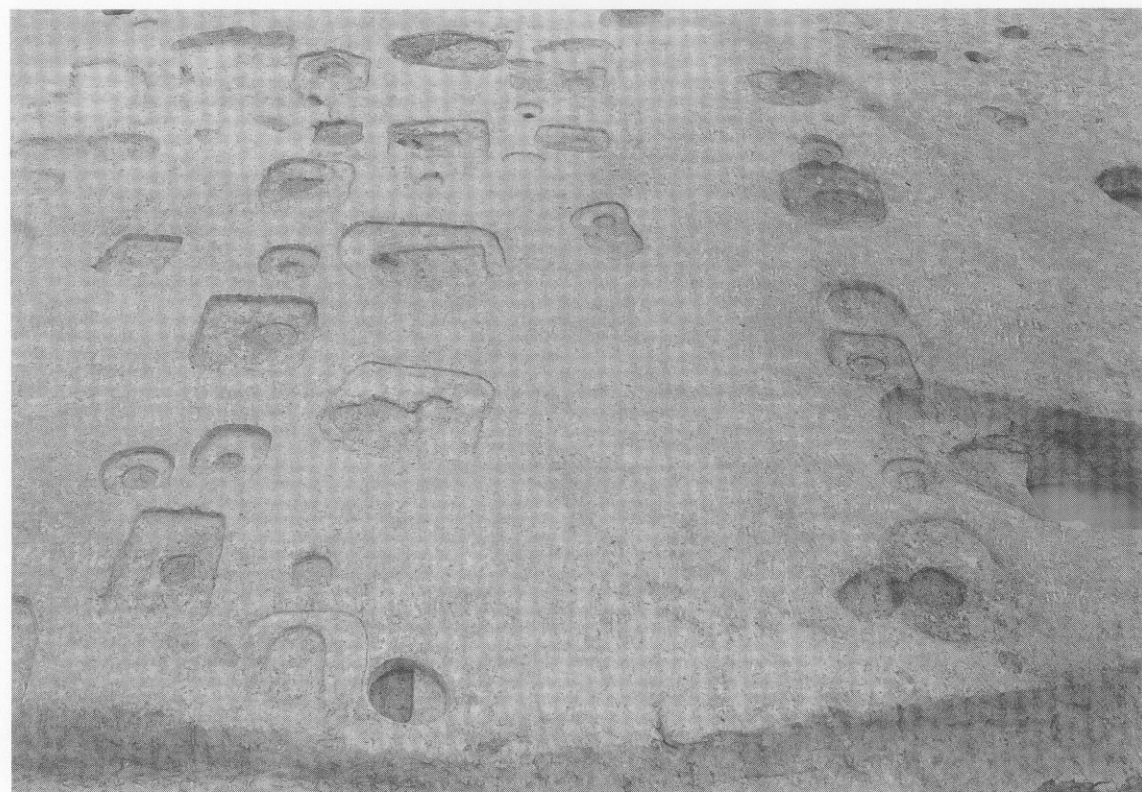
第147次調査区西半部全景（東から）



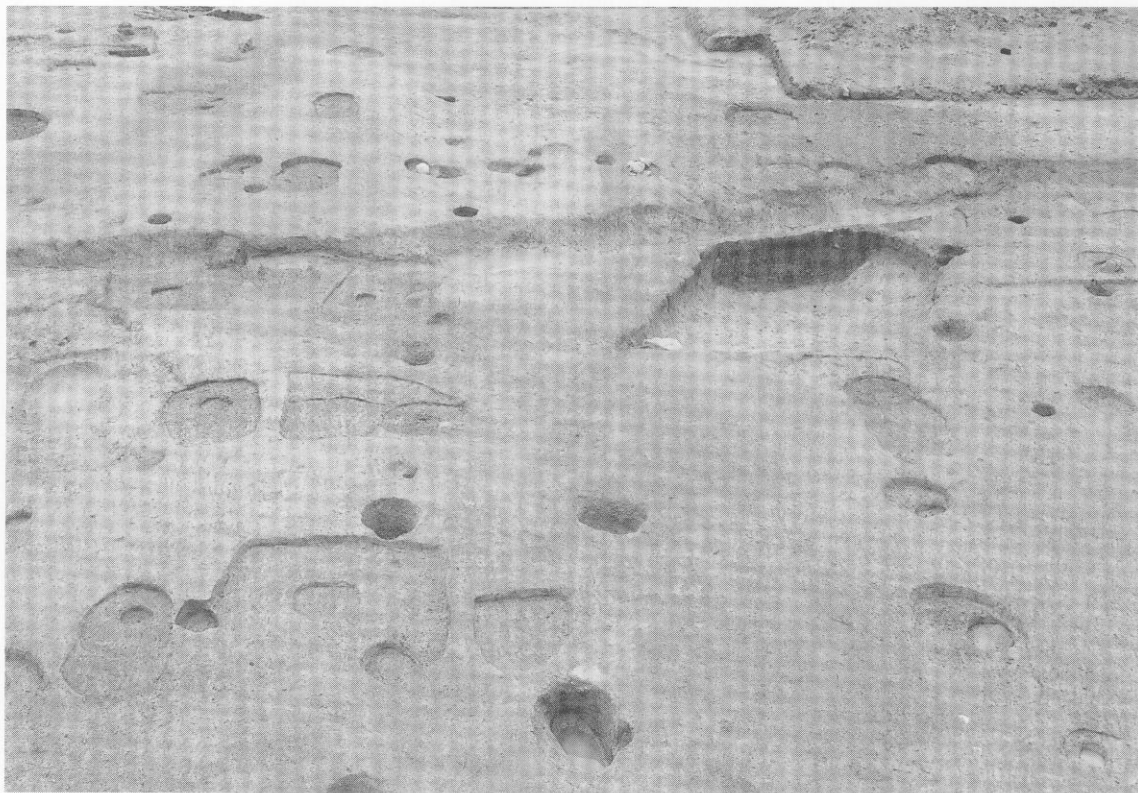
第147次調査区北側掘立柱建物群（空中写真）図版上部が北



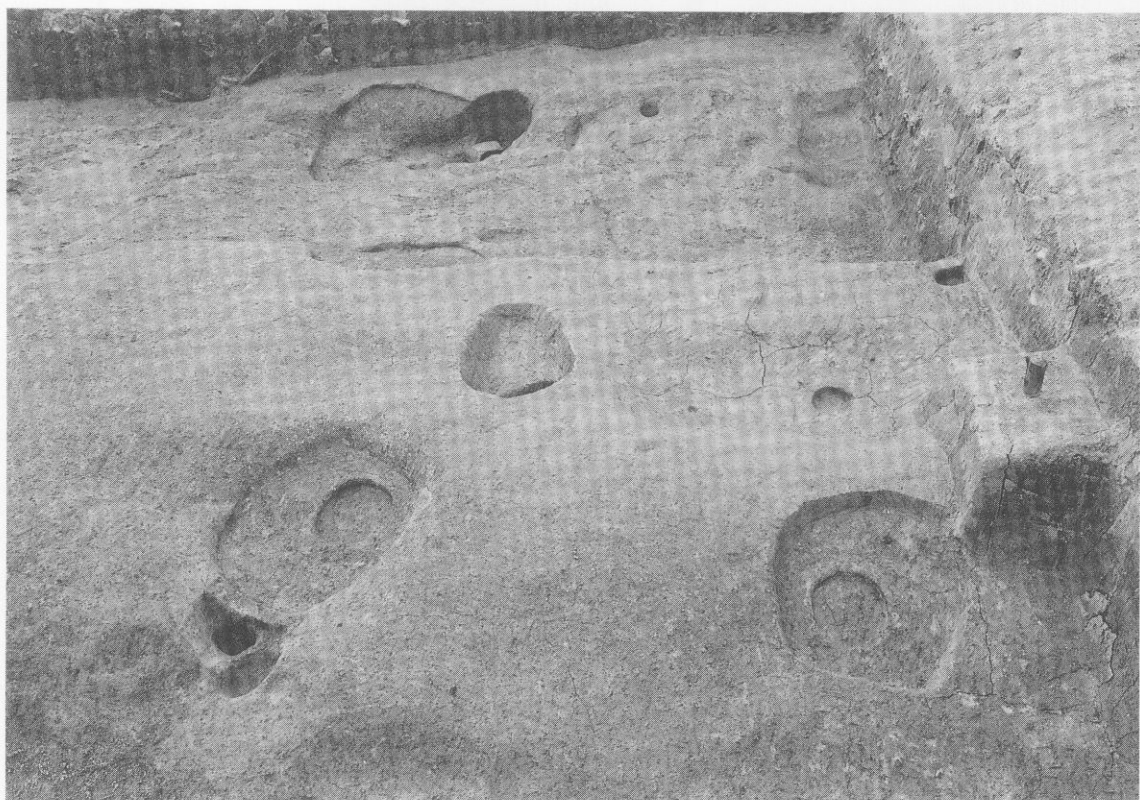
掘立柱建物SB2435、柵SA4036（西から）



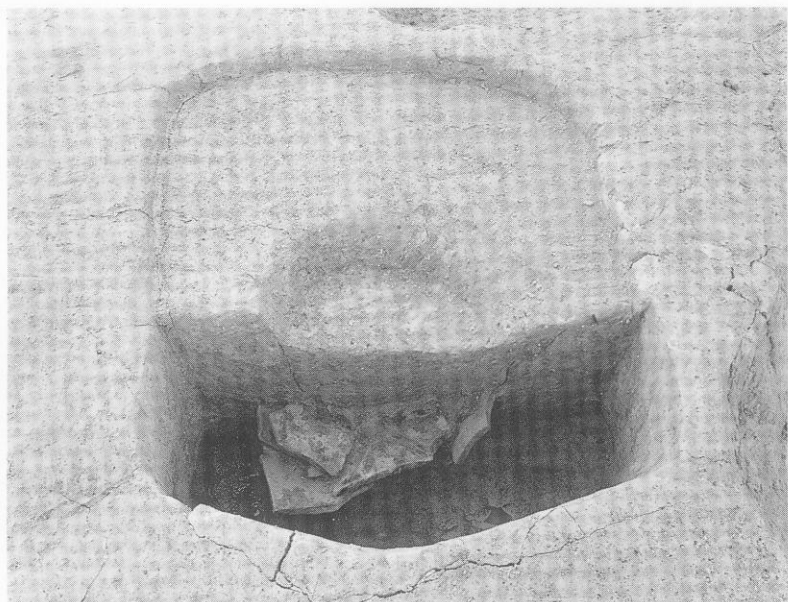
掘立柱建物SB4030A・B（西から）



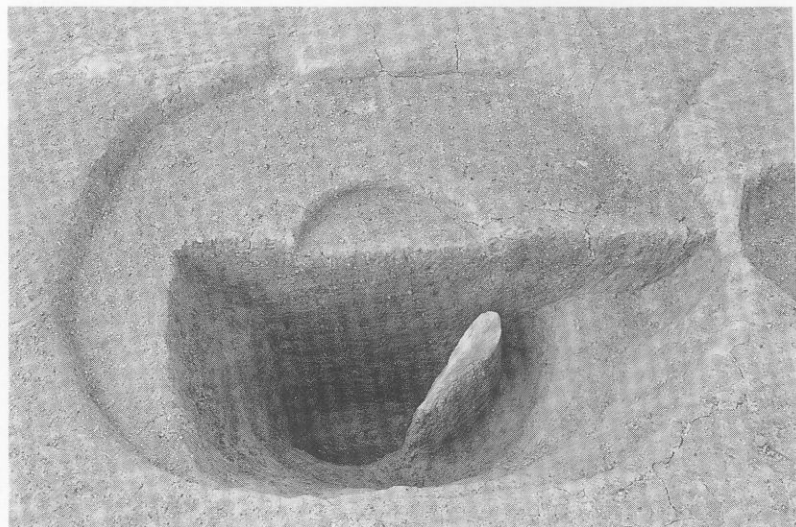
掘立柱建物SB4035A・B、土壙SK4058（西から）



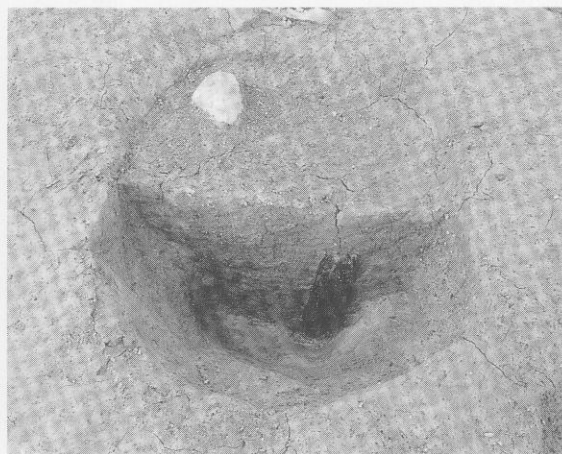
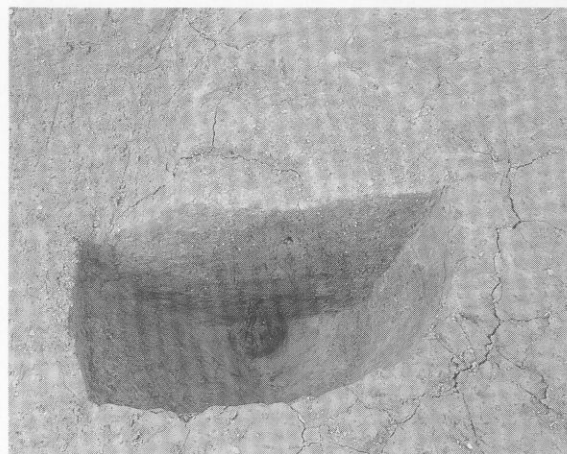
掘立柱建物SB4040（東から）



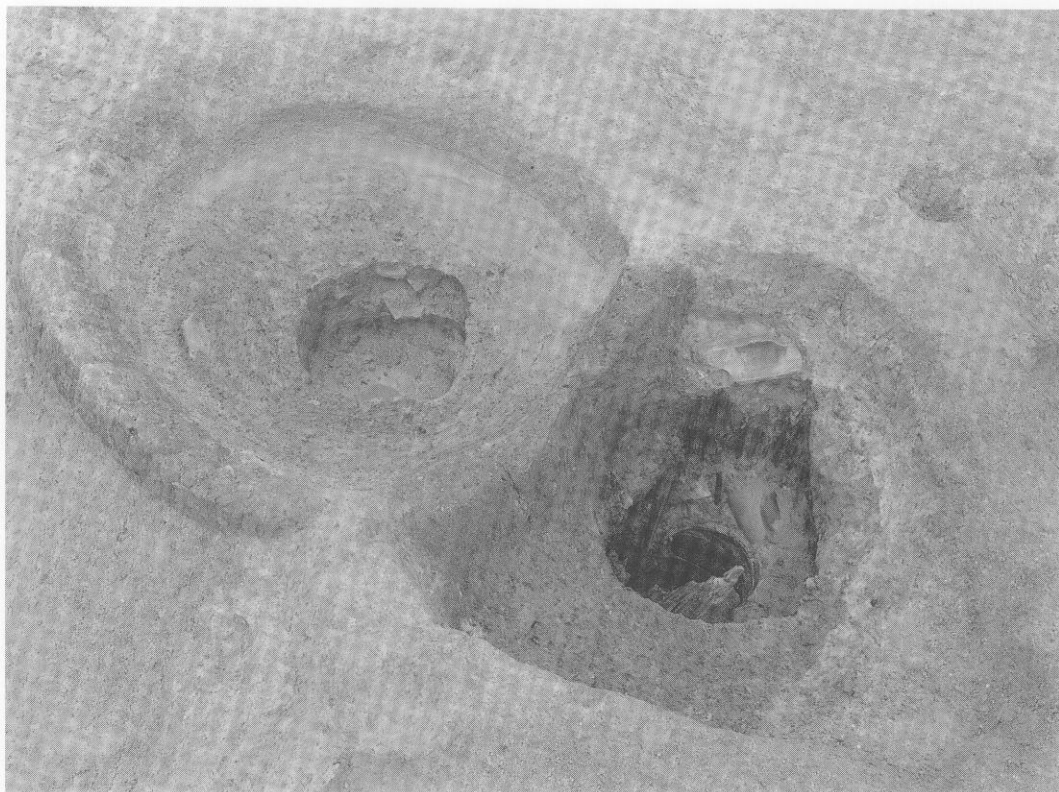
掘立柱建物SB4030A
柱掘形(1)



掘立柱建物SB4030A
柱掘形(4)



柵SA4036柱掘形



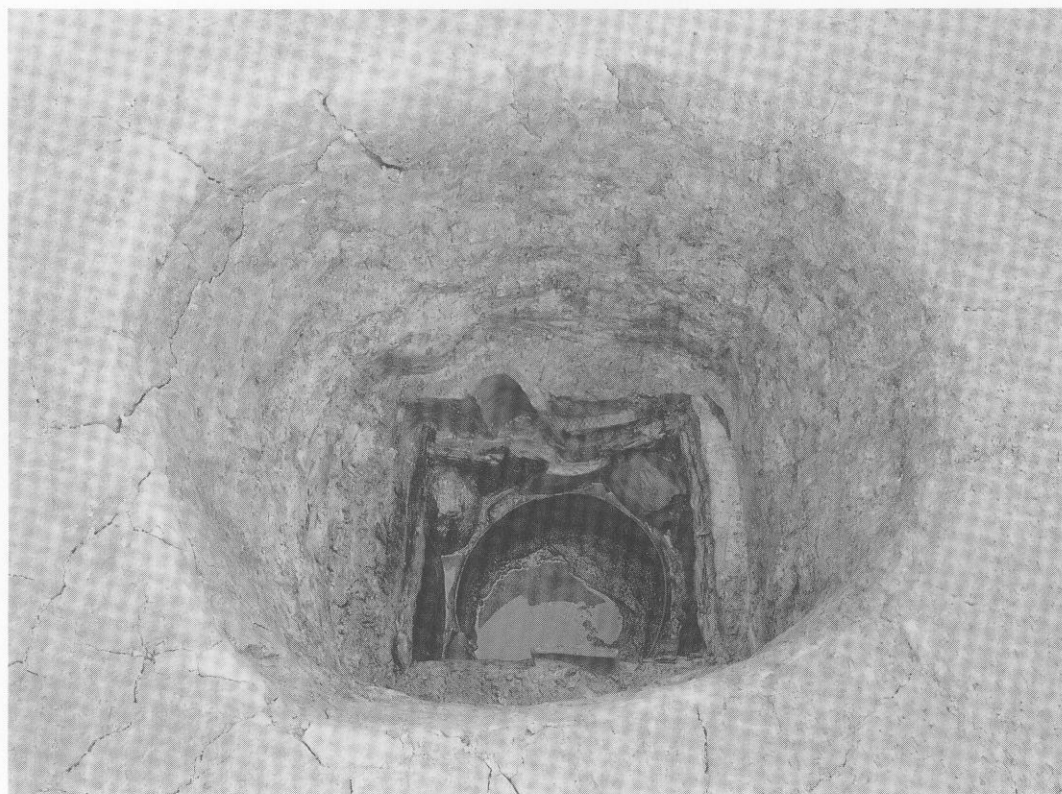
井戸SE4031・4032（西から）



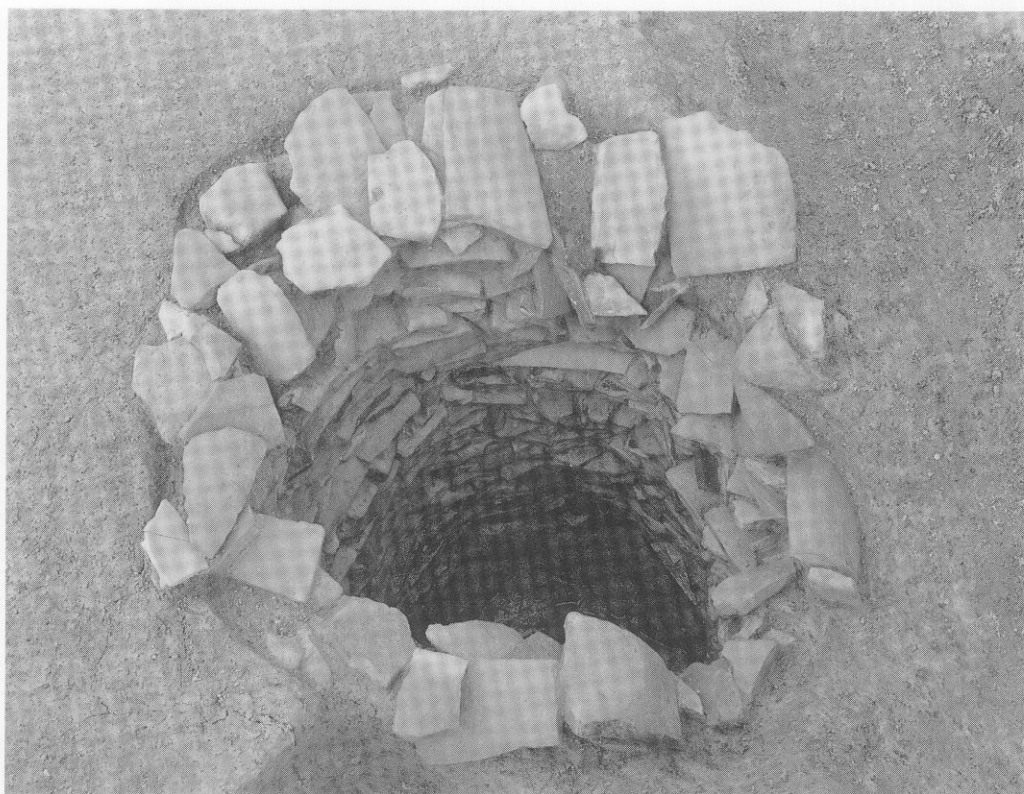
井戸SE4031（北西から）



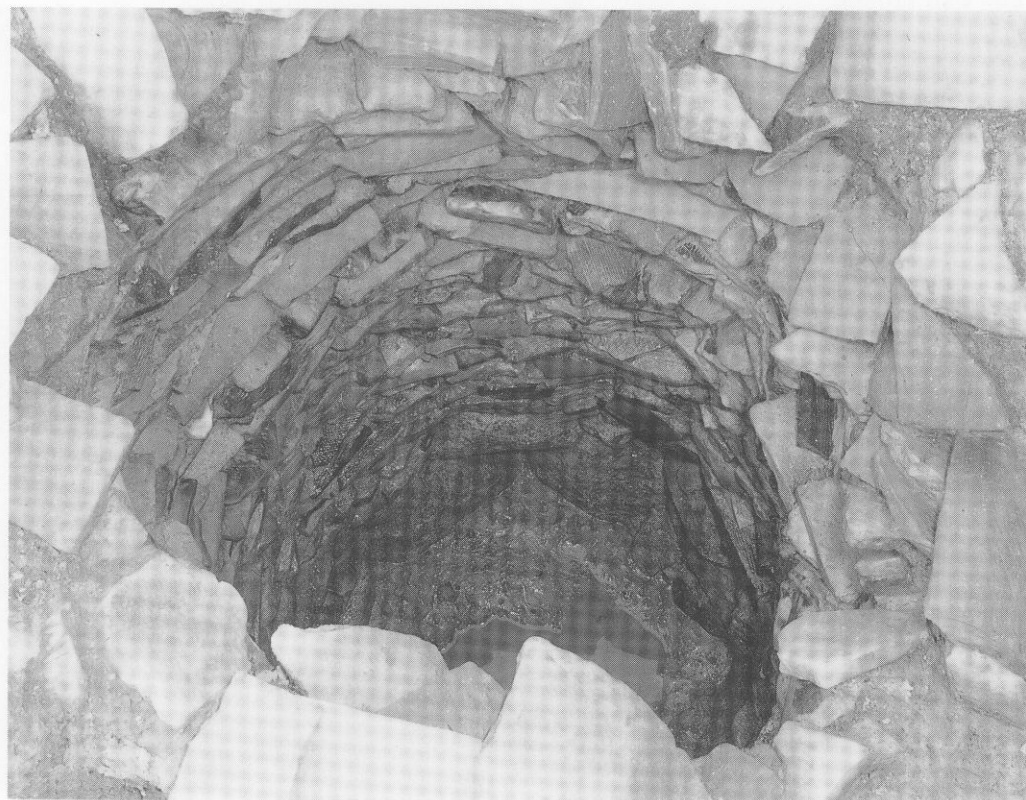
井戸SE4033 (西から)



井戸SE4052 (北西から)



井戸SE4051 (南から)



井戸SE4051細部 (南から)



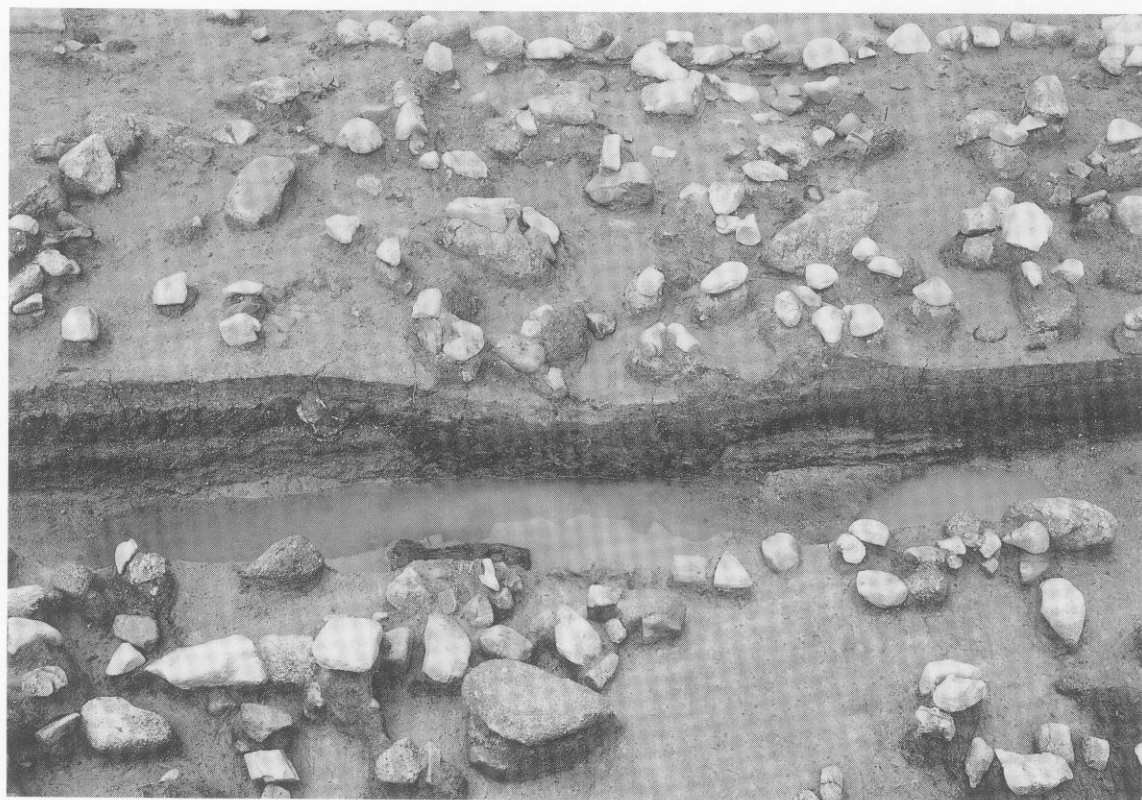
流路SX4050 (北から)



溝SD4037・4054、SX4045 (南から)



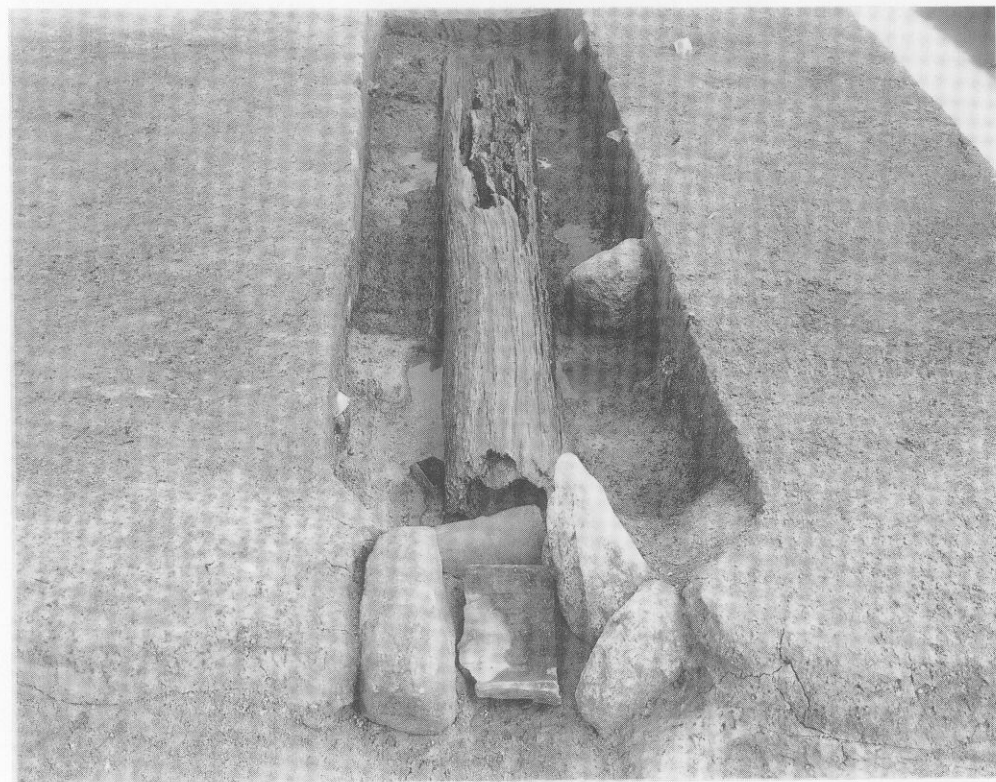
SX4045東半部（東から）



SX4045東半部土層断面（南から）



SX4045西半部（東から）



暗渠施設SX4055（西から）



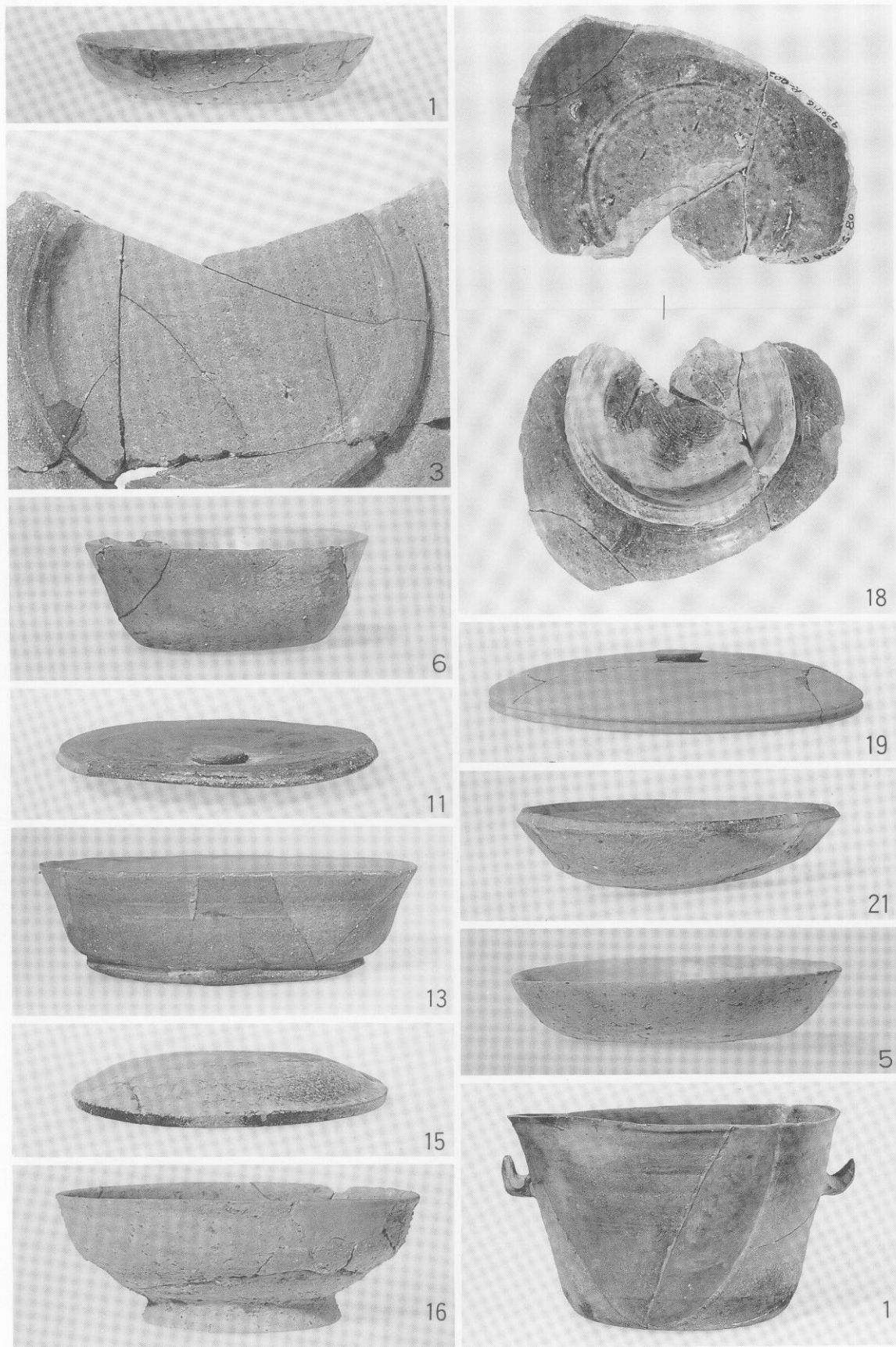
第150次調査区全景（北から）



第151次調査区全景（西から）



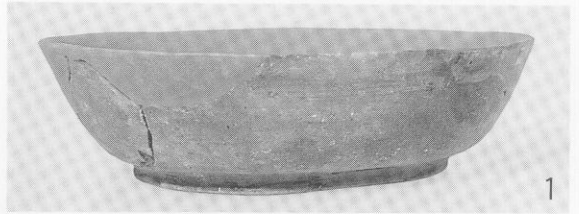
第152次調査区全景（北から）



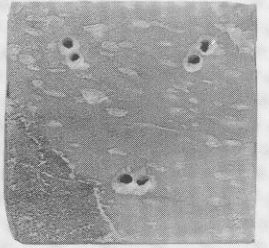
第147次調査SB4046、SD4037・4038・4042・4044・4054、SE4032、SK4056出土土器・陶磁器



3



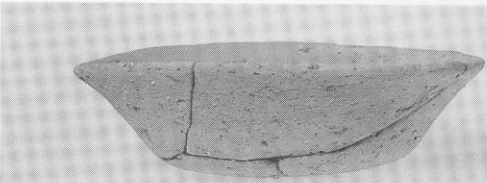
1



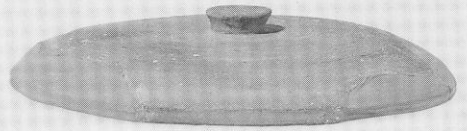
6



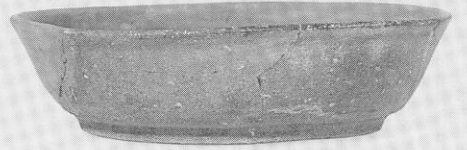
4



5



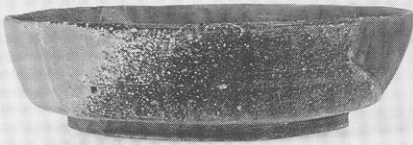
8



12



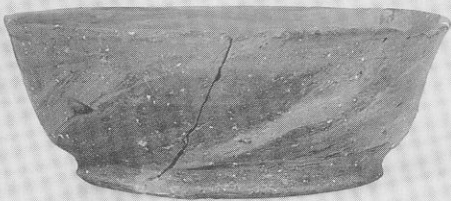
2



6



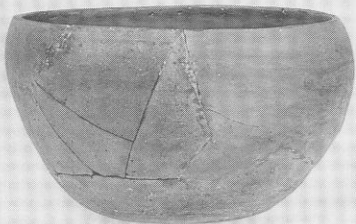
17



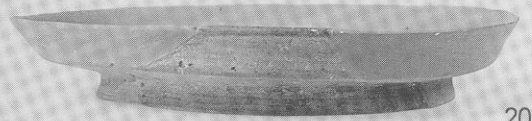
7



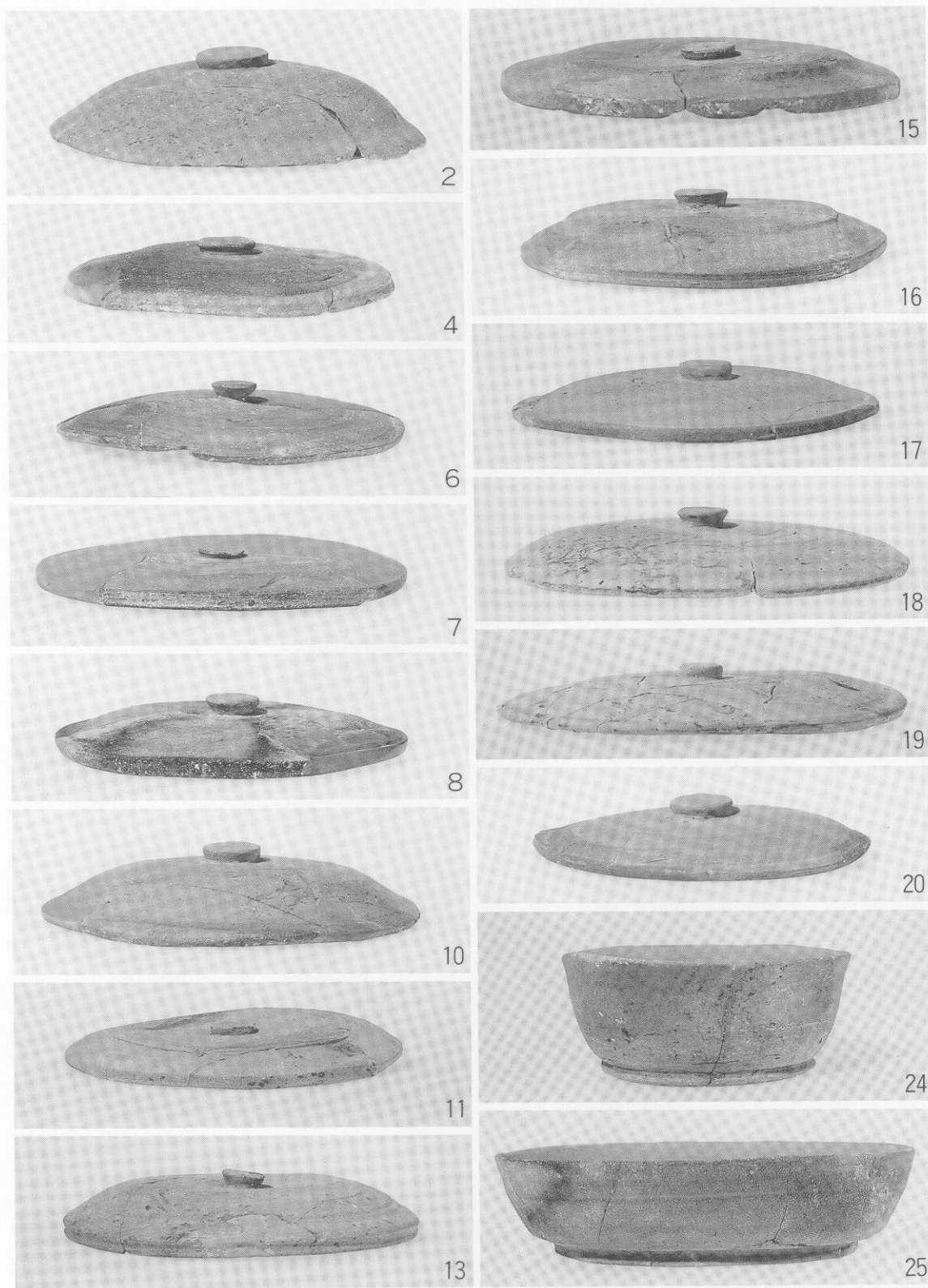
18



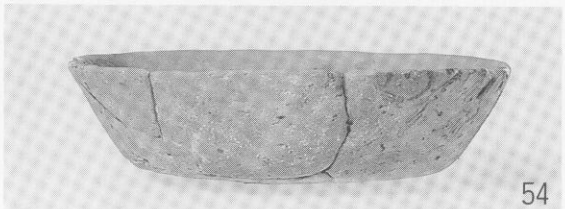
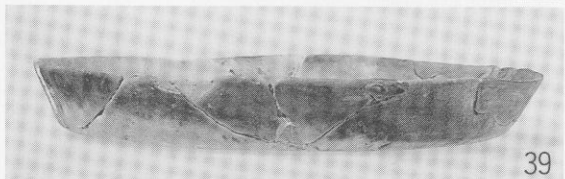
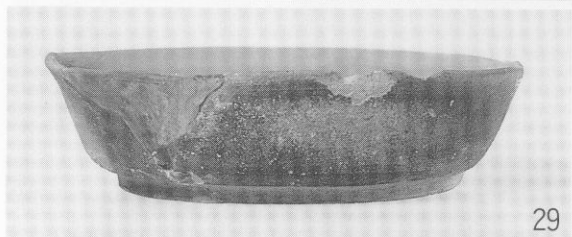
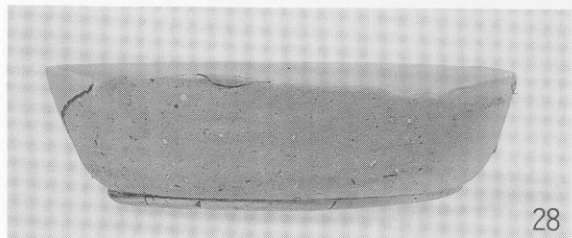
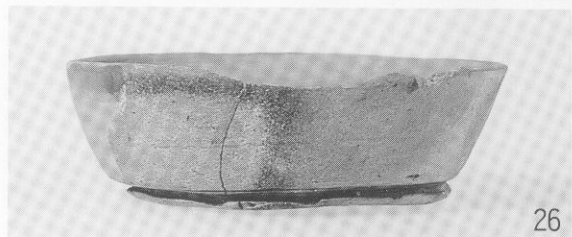
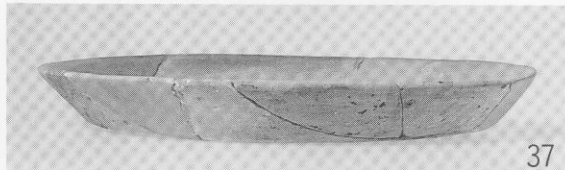
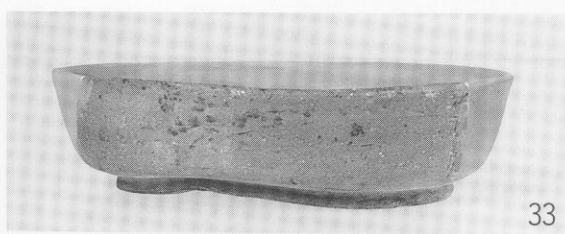
8



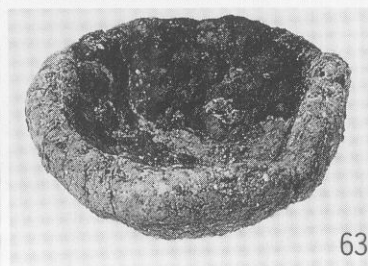
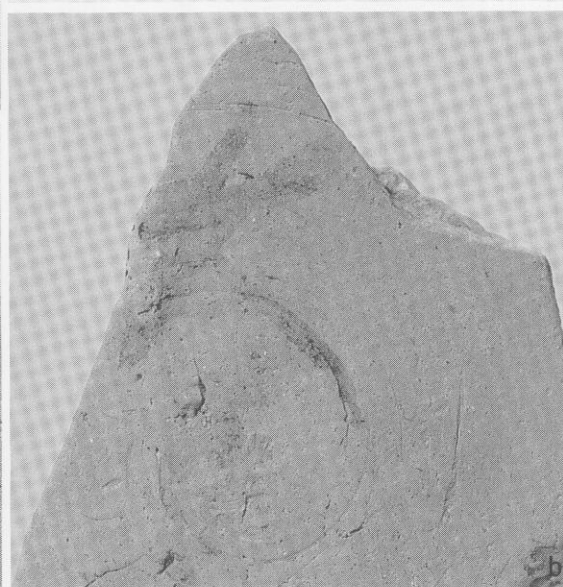
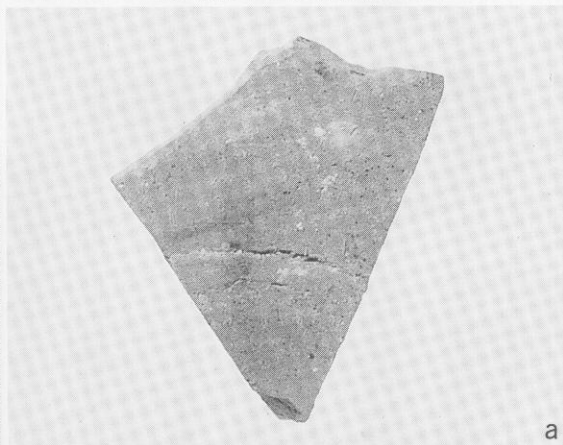
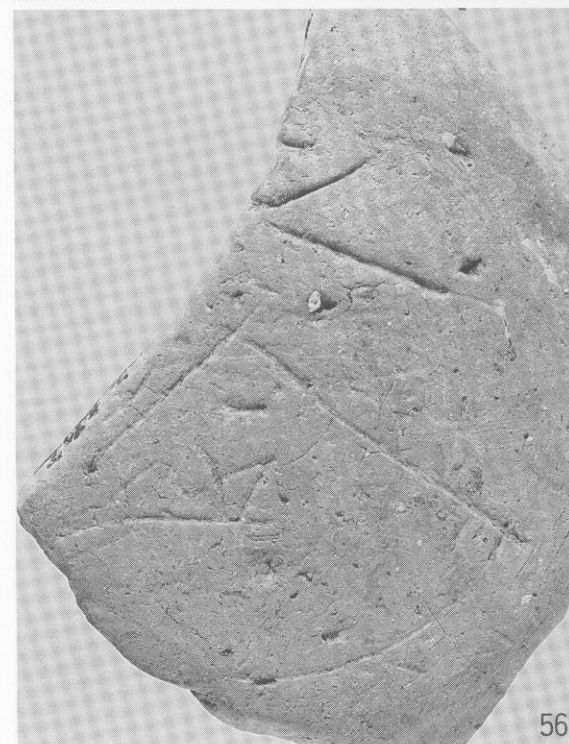
20



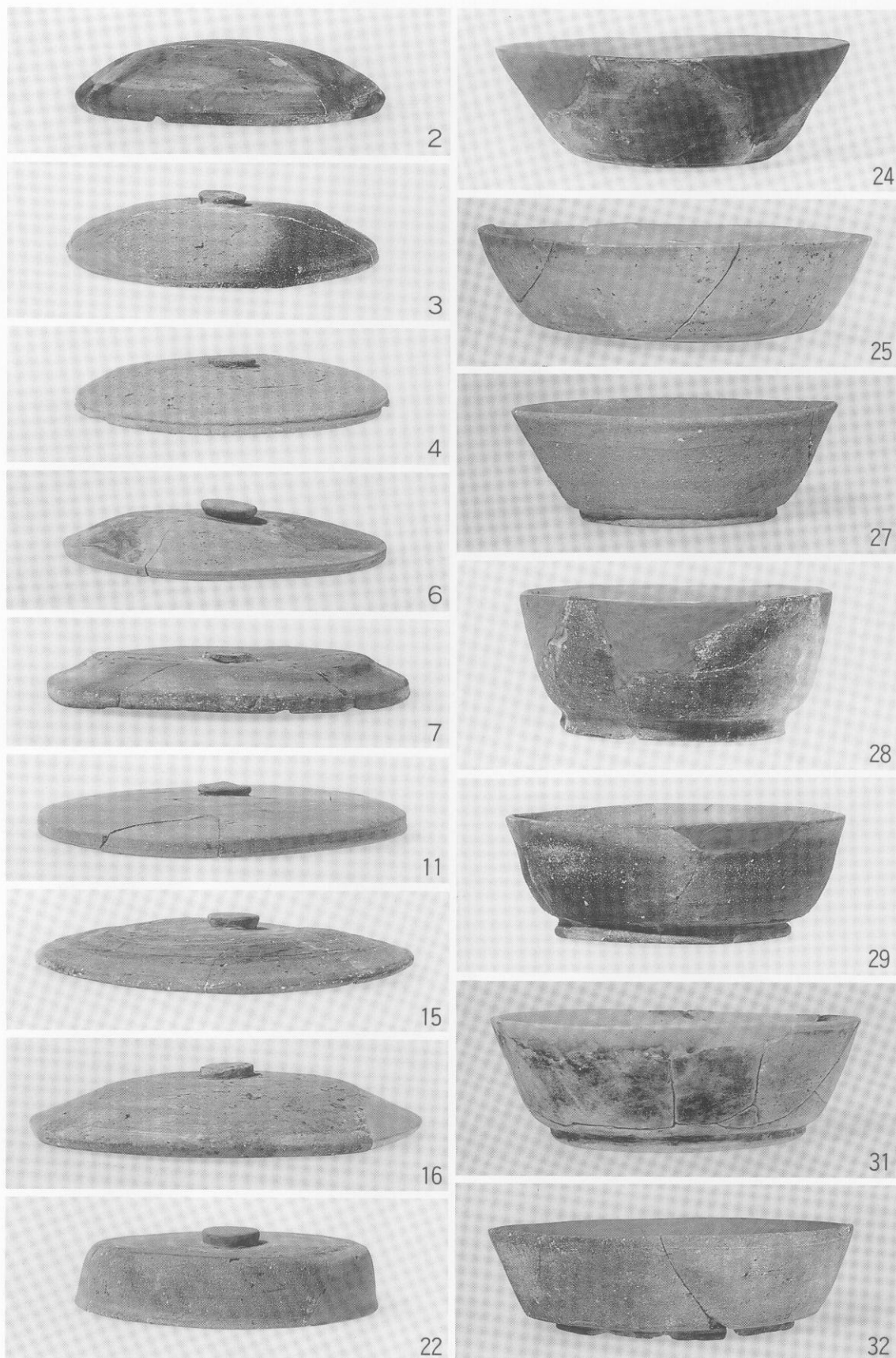
第147次調査暗褐色土層出土土器(1)



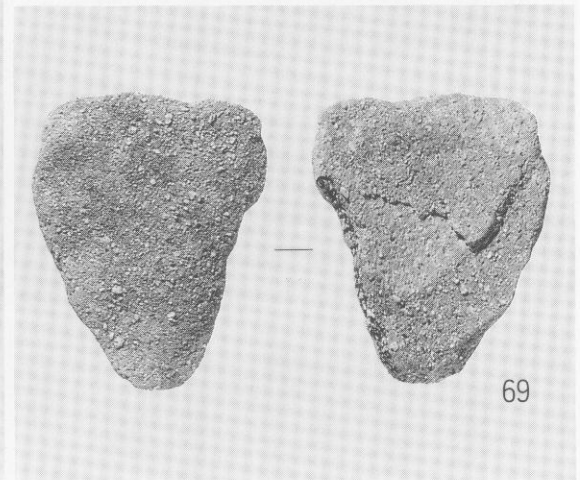
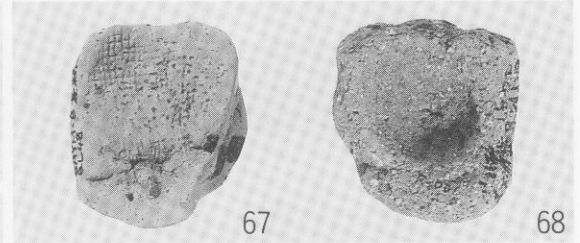
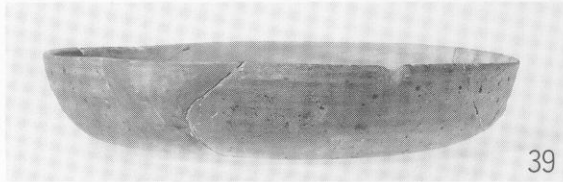
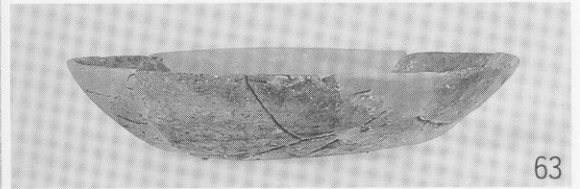
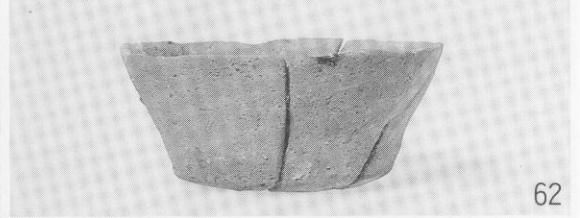
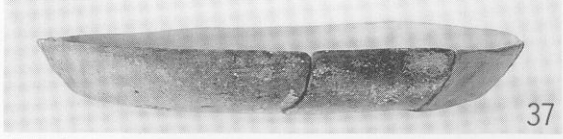
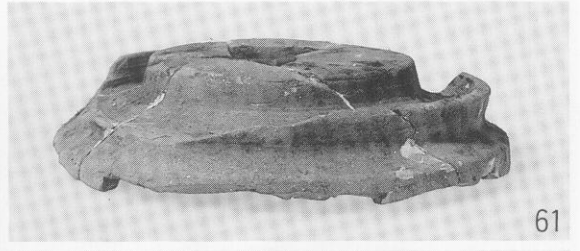
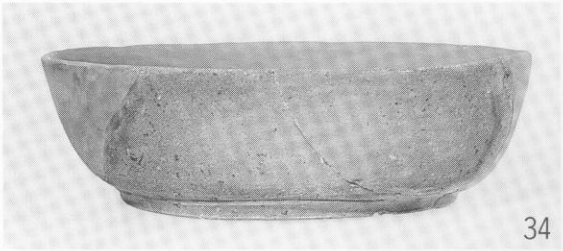
第147次調査暗褐色土層出土土器(2)



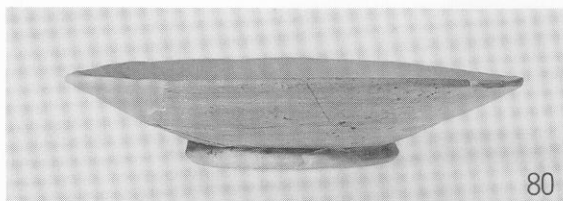
第147次調査暗褐色土層出土土器・硯・土製品(3)



第147次調査茶褐色土下層出土土器(1)



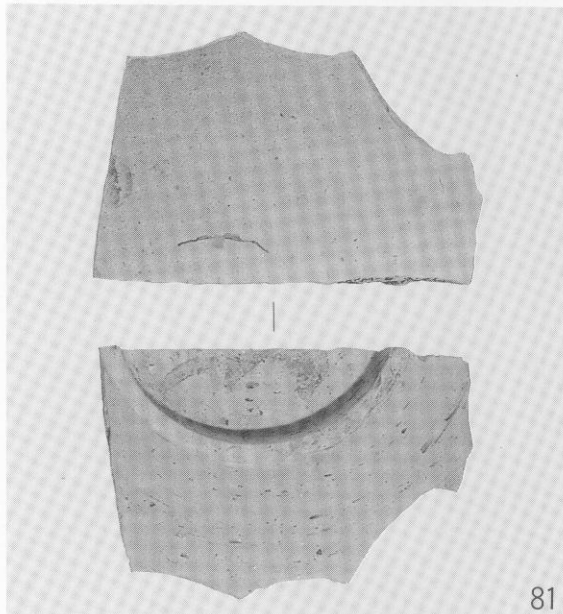
第147次調査茶褐色土下層出土土器・硯・土製品(2)



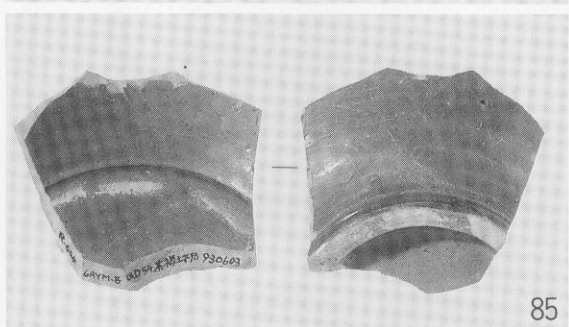
80



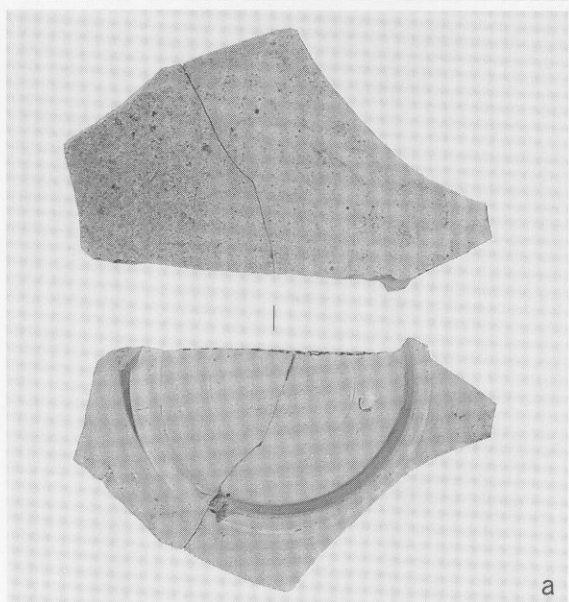
78



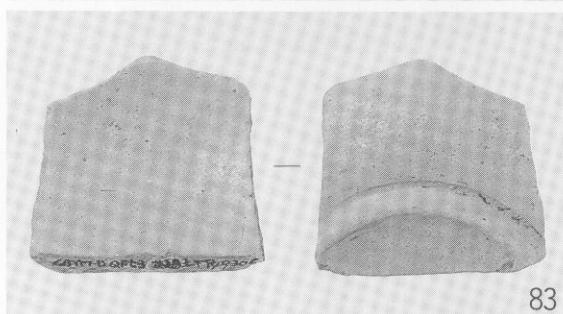
81



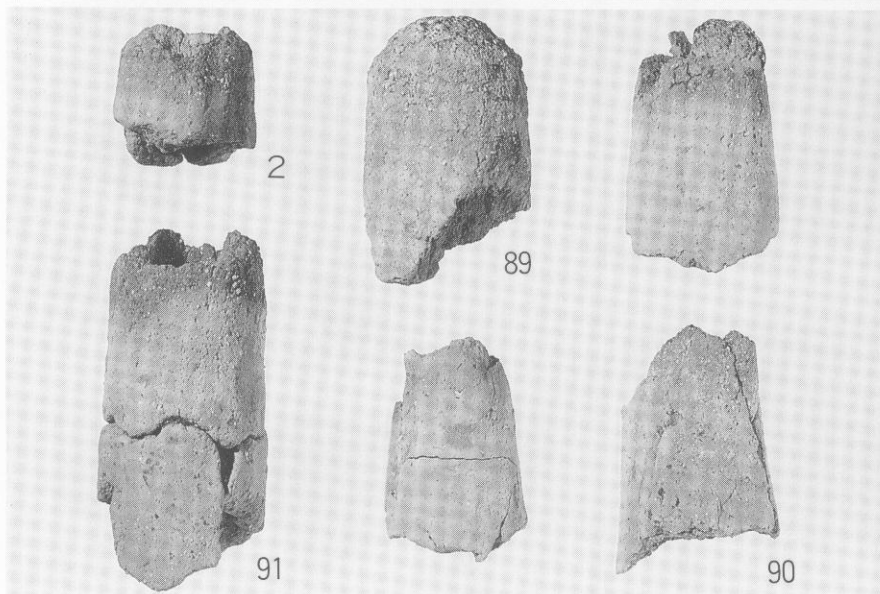
85



a



83

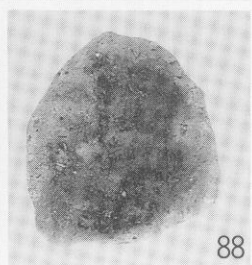


2

89

91

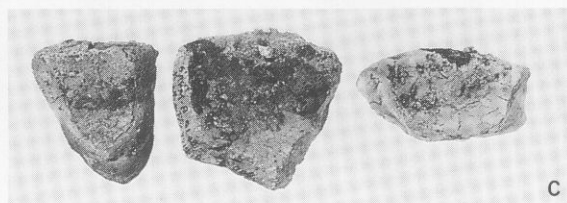
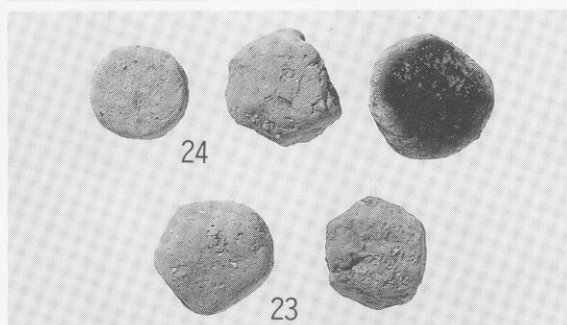
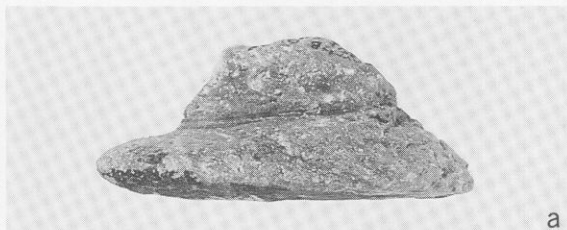
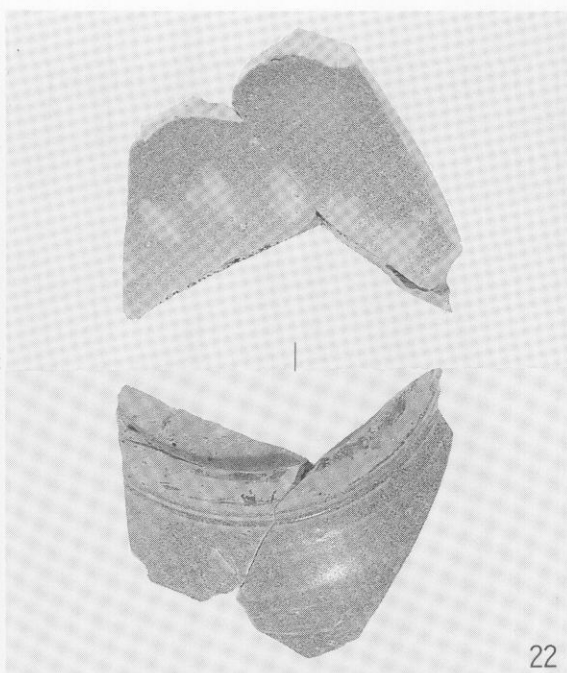
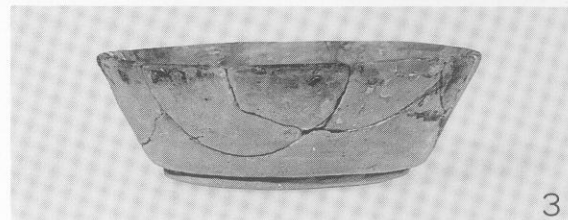
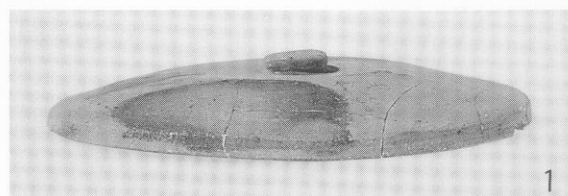
90



88



b





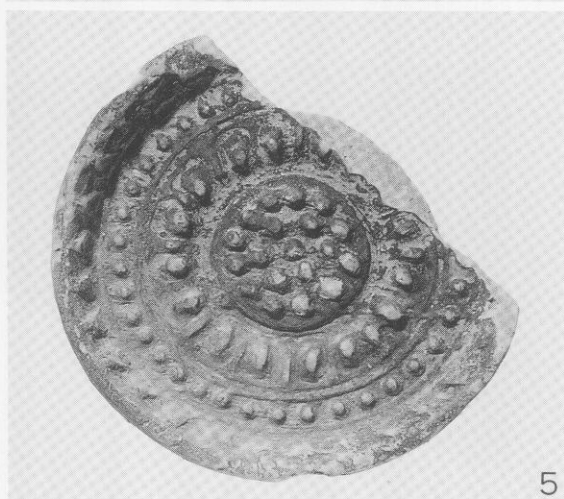
1



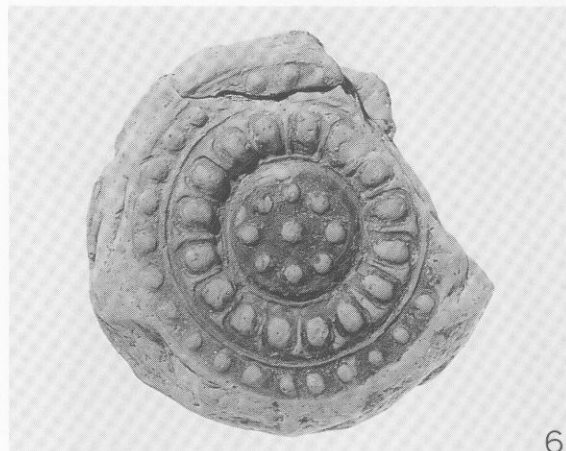
2



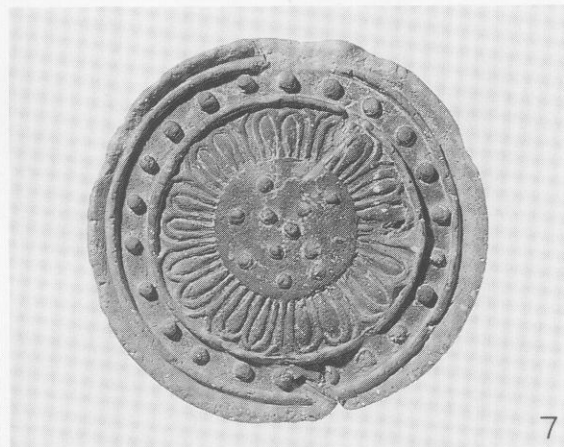
4



5



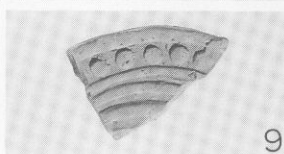
6



7



3



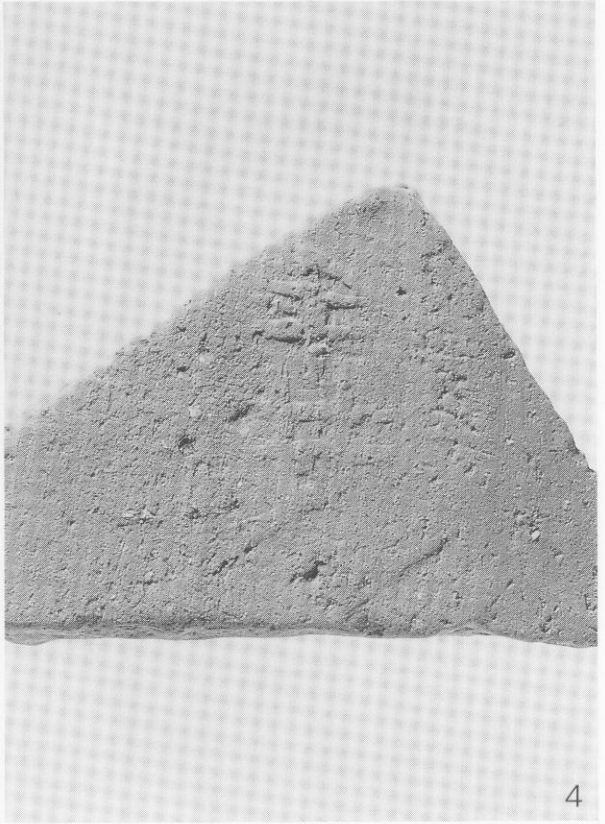
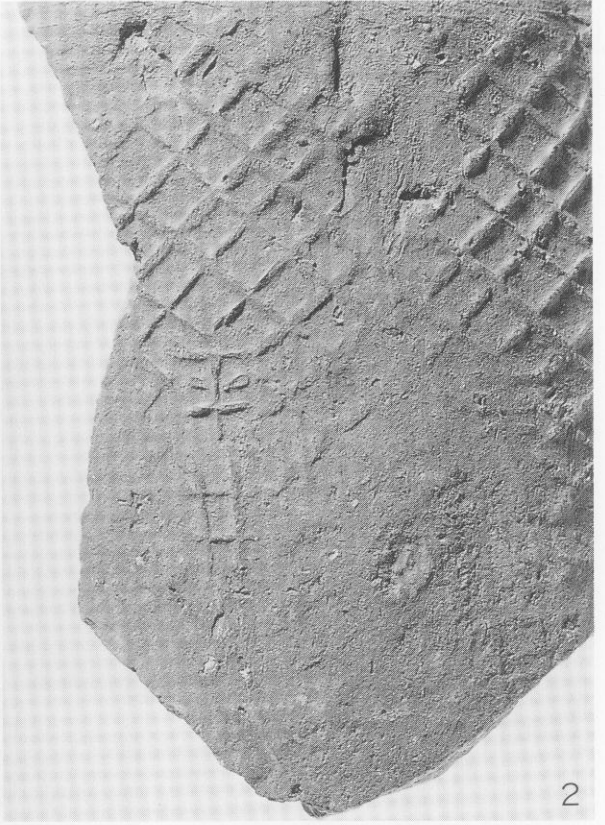
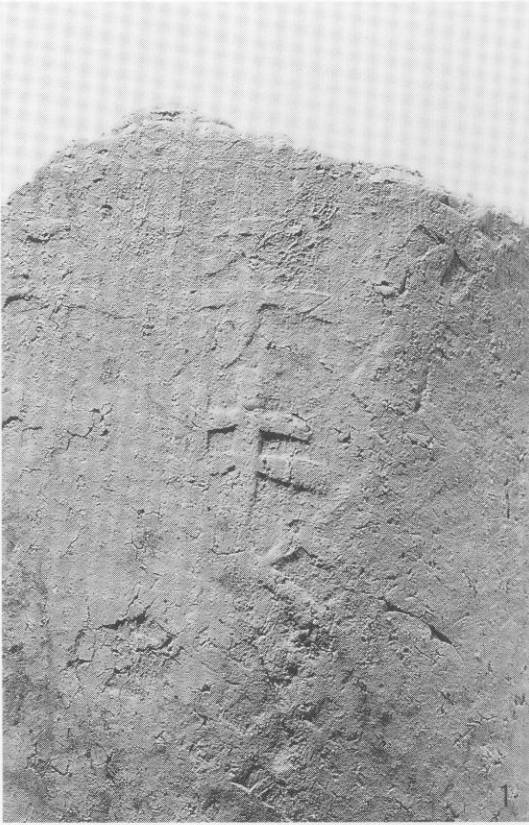
9



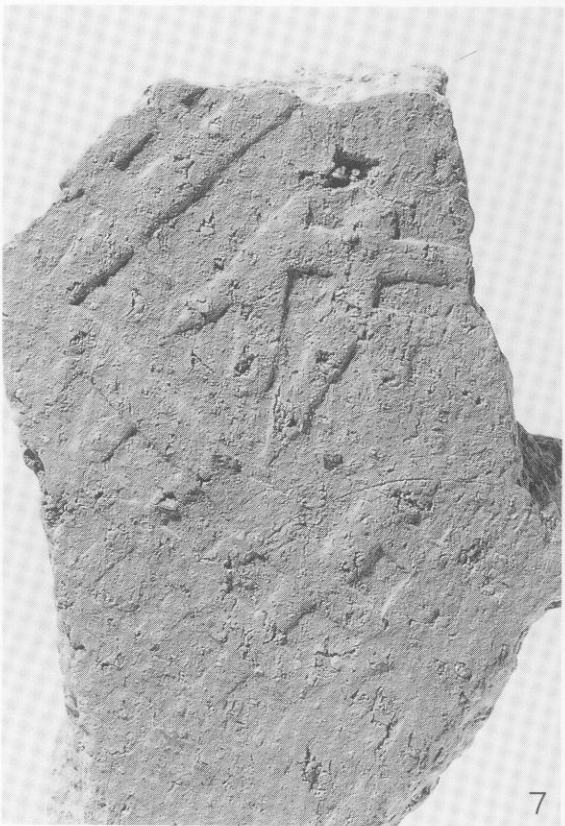
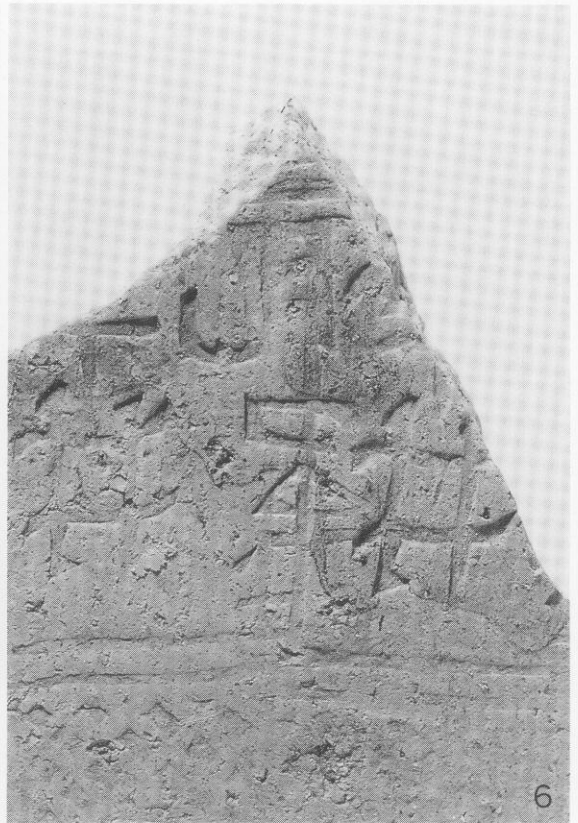
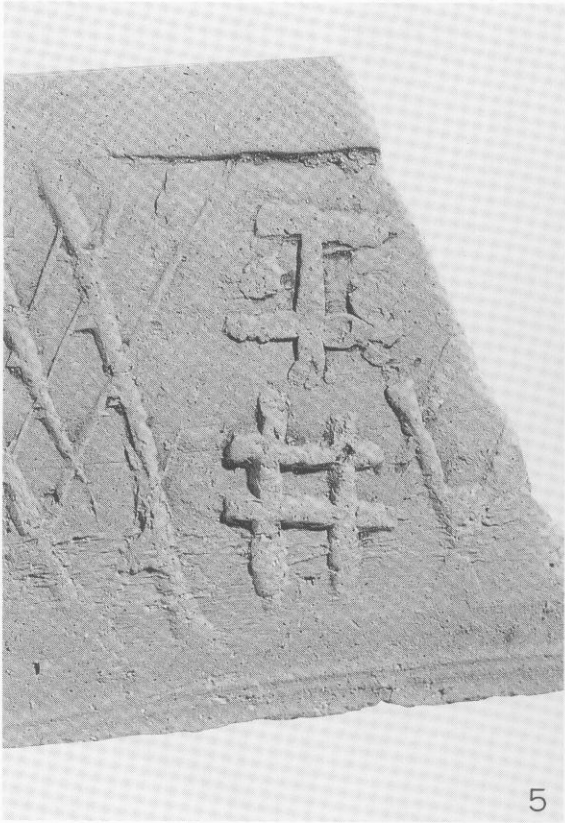
8



第147次調査出土軒平瓦・鬼瓦



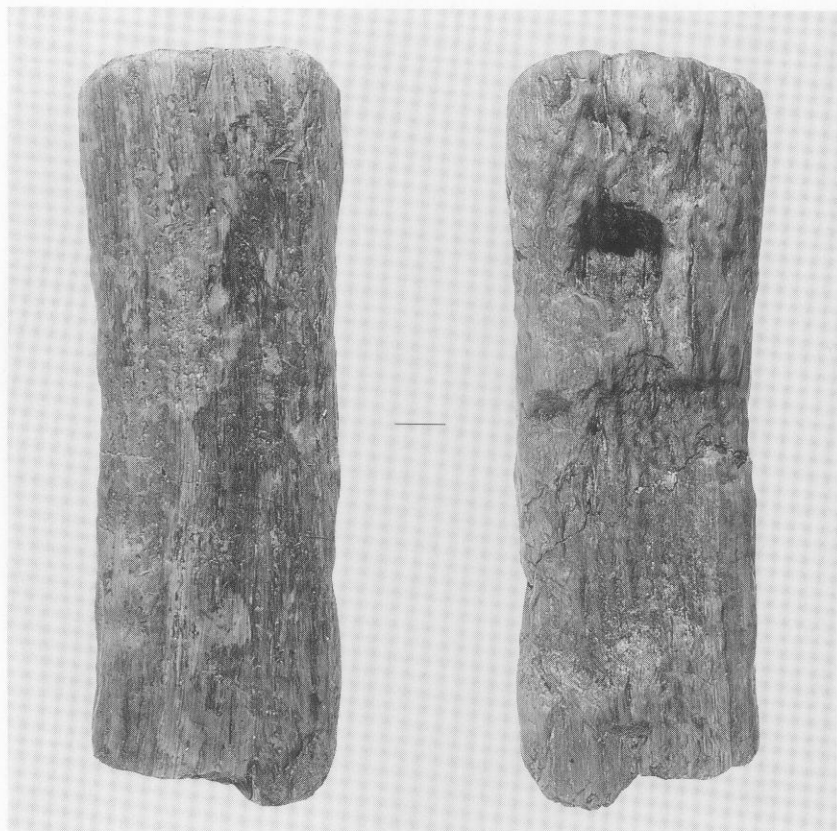
第147次調査出土文字瓦(1)



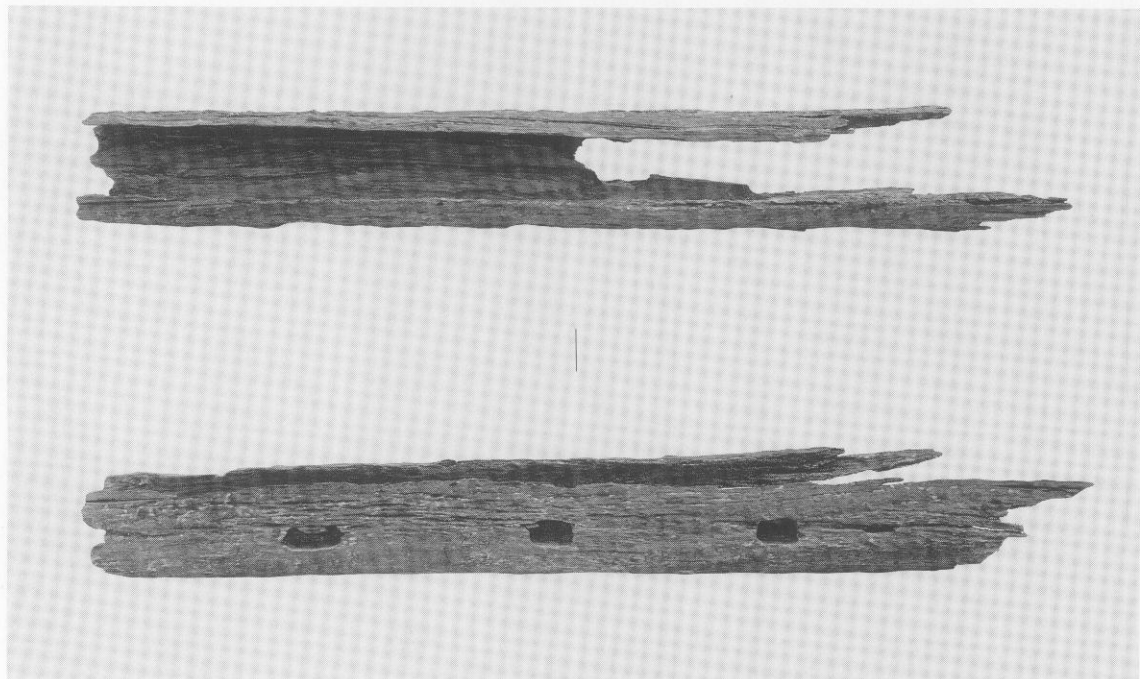
第147次調査出土文字瓦(2)



第147次調査出土文字瓦(3)

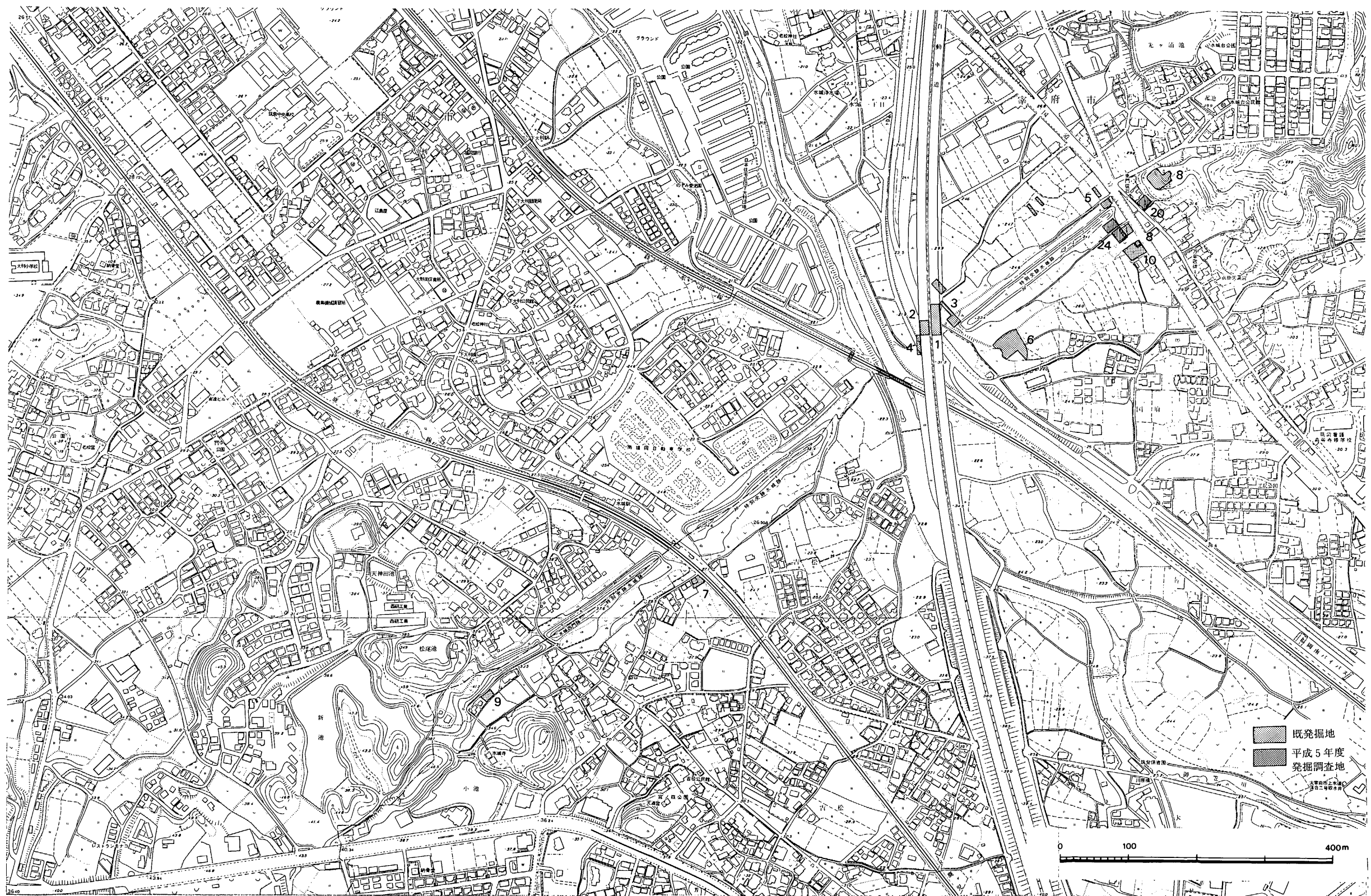


第147次調査
SX4050出土木製品



第147次調査SX4055出土木槌

水城跡の調査

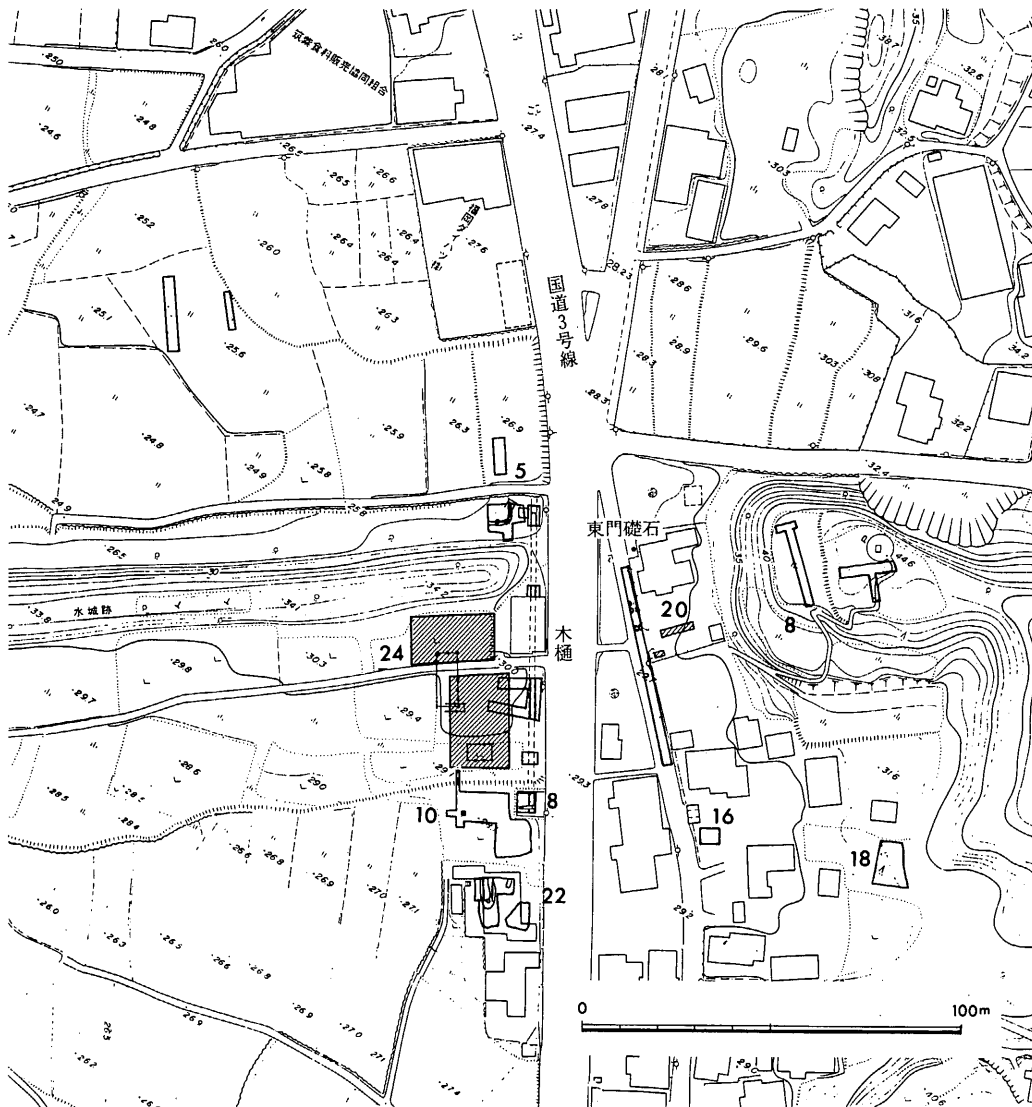


第37図 水城跡発掘調査地域図

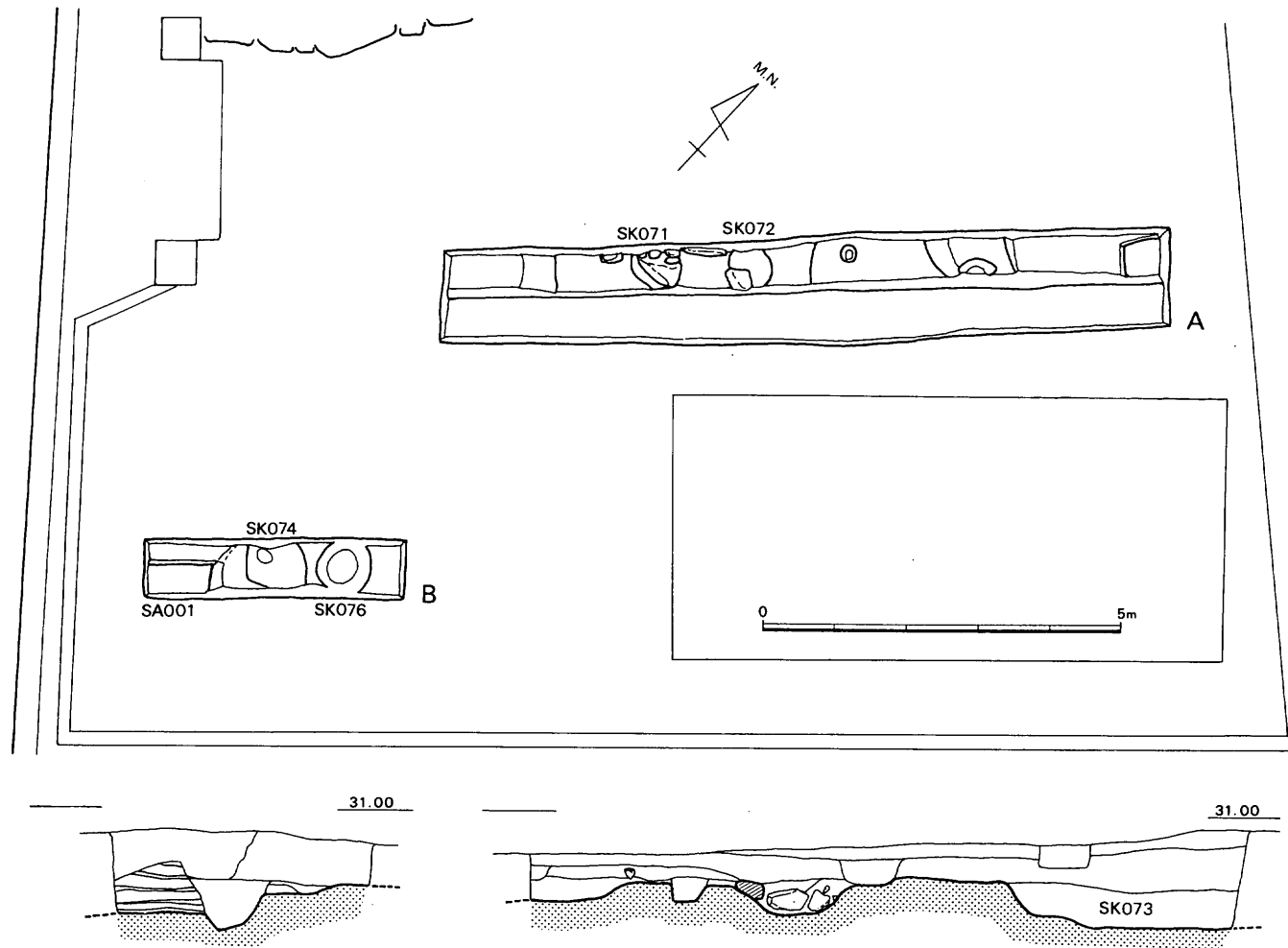
III 水城跡の発掘調査

1. 第20次調査

現状変更申請に対して文化庁から発掘調査を実施するよう指示のあった太宰府市大字国分195



第38図 水城跡東門付近調査地域図



第39図 水城跡第20次調査遺構配置図・土層図

番地の発掘調査を平成4年1月9日～1月24日まで実施した。

発掘調査地点は水城東門推定地付近にあり門跡礎石も地主宅西北に隣接して保存されている。さらに昭和43年には地主宅西側の旧道部分の水道工事の掘削に伴って、ほぼ完全の形の礎石(現在、太宰府展示館裏に保管)が発見された場所の隣接地である。住宅改築申請の提出された地点の中心部分には、仮設住宅のコンクリート基礎および車庫のコンクリート基礎が残存していた。このため仮設住宅基礎に平行して幅1.4m・長さ14mのトレンチを設定した。Aトレンチと呼ぶ。トレンチの東北側が庭から比高差にして10m余り高くなり特別史跡大野城跡に連続する丘陵部となっている。

水城東門跡東側に土塁があったと想定すれば太宰府側のテラス部分に相当する。従って発掘調査開始当初では水城土塁の積土または地山がただちに検出されるものと考えていた。

Aトレンチではトレンチの西北半分を地山まで掘りさげたが発掘調査結果が思わしくないため南に幅0.8m・長さ3.2mのBトレンチを設定した。Bトレンチの南西端で花崗岩の風化土の地山の上に数枚の積土土層が検出された。

検出遺構

Aトレンチで調査出来た遺構には数基の土壇がある。いずれも近・現代の陶器片が出土していて水城跡と関連すると思われる遺構は調査出来ていない。この部分には第II次大戦時陸軍が使用していたと思われる濠やゴミ穴が各所にあいているほか、家人が養蚕を行った関連のゴミ穴が掘られていた。ただ、トレンチ南西端に近づくにつれて縄目の叩打痕を残す平瓦・丸瓦片の出土点数が多くなっているが近世の攪乱土中からの出土であった。トレンチ中央のSK071の石組(底はセメント)の中から軒平瓦片1点が出土している。また第40図の土師器皿は表土およびSK071の出土である。

Bトレンチで調査された積土遺構はSK074に東北側を削りとられた状況で確認できた。昭和43年の水道工事の際に発見された礎石との関連も考えられるが調査範囲が狭く、遺構の性格について推定する根拠は限られている。あえて可能性を考えれば、

- 1) 水城東門跡の基壇の一部
- 2) 水城東門跡からの道路の一部
- 3) 水城東門跡北東側の水城土塁の一部

の3とおりが推定されよう。

ただAトレンチで人工的な積土が確認出来なかった状況からは、東門の北東側はすぐに丘陵となり人工の盛土はなかったのではないかと考えられる。とすれば、3) ではなさそうである。

1) とすれば門の基壇まわりの遺構がAトレンチで見つかったとしても良いだろう。また、2) とすれば道路敷の側溝が見つかったとしても良いだろう。

従って遺構の性格を明らかにには出来ないがトレンチの位置は太宰府側テラス部分にあたる。したがって、水城跡の人工土塁がこの部分で自然地形の丘陵（大野城跡）にとりつく部分がこの場所付近であったと考えておこう。

出土遺物

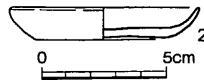
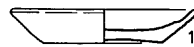
遺構との関連で報告出来る出土遺物はない。

SK071出土土器

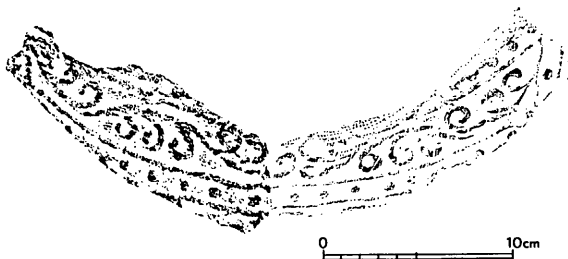
土師器（第40図、図版42）

皿（1・2） 1は口径7.5cm・器高1.4cm。直線的に外反りする口縁から段をつくり、糸切りの底部となる。胎土は砂粒が少なく、茶褐色で焼き上がりも比較的良い。

2は口径7.6cm・器高1.3cm。1に比較して丸味をおびた口縁から糸切り底となる。胎土は砂粒の混入が少ない。淡茶色で焼成も良い。



第40図
Aトレンチ出土土器実測図



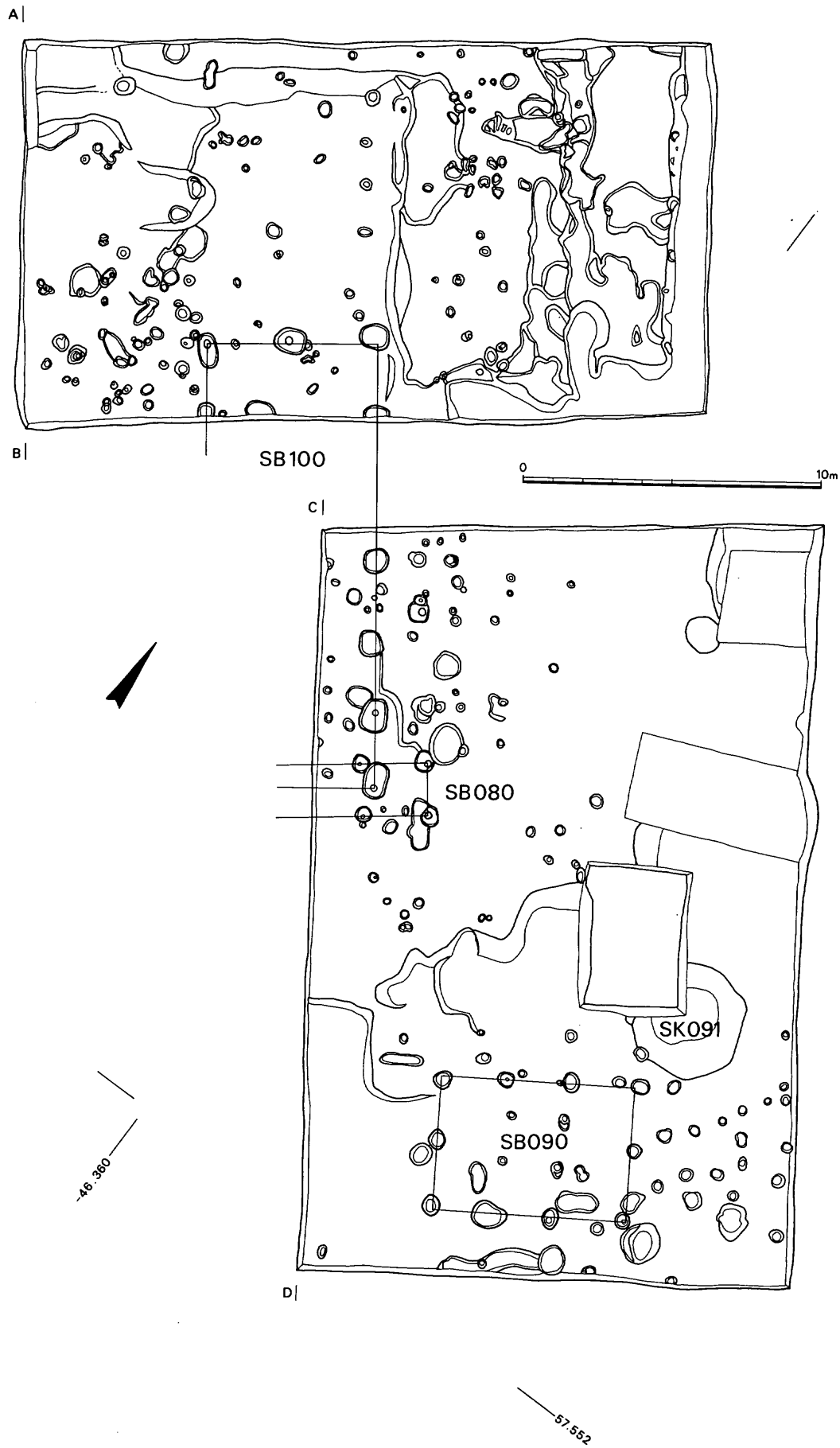
第41図 出土軒平瓦拓影

瓦類

軒平瓦（第41図、図版43）

唐草文が左右から中心に3回反転する均整唐草文である。中心飾りはない。上・下帯、脇区には蓮珠文が配置される。破片は3cmほどの段顎部分で縦方向に縄目の叩打痕が残る。

SK071から近世陶器と伴出している。



第42図 水城跡第24次調査遺構配置図

2. 第24次調査

本次調査は水城東門跡の西側の国道3号線に隣接した基底部の660㎡を対象として実施した。大宰府史跡第5次5か年計画の柱は水城跡諸施設の解明にあり、その初年度として東門に関連する何らかの知見を得ることを主眼とした。調査地の地番は太宰府市大字国分字衣掛226他である。

調査は平成5年3月11日に開始した。調査対象地は保存整備の為に土盛り貼芝がなされており、20cm前後の真砂土が旧表土面を覆っている。旧表土はいわゆる耕作土で、この地は以前は畑地として使用された為か、深いところで約80cm位の耕作による攪乱を受けている。さらに所々には樹木の為に掘られたのか大きな掘りこみがあり、遺構の保存状況としては必ずしも良好ではないように思われた。耕作土の下には暗褐色土層があり遺溝全体を覆っており、厚さは一定ではないが20～40cmある。この層中には弥生時代や古墳時代の土器等が含まれているが、最も新しい遺物として14・15世紀代のものがみられる。

盛土・旧表土それに暗褐色土層の一部を除去し、遺構検出に着手したのは4月20日である。対象地のほぼ中央に東西方向に走る幅2mの既存の農道があるため、それを避けて発掘区を設定したことにより、北と南に発掘区が分断される形となった。したがって、ここでは記述の上から便宜的に、北側即ち本体に近い方を北区、農道より南側を南区と呼ぶことにする。遺構検出は作業の手順として先に北区から行い、5月の中旬にはほぼ終了し、その後南区の検出作業に移った。南区の遺構検出が終了したのは10月の初旬で、その後写真撮影の為に清掃作業をしながら全体の遺構の精査を行い、10月14日写真撮影をおこなった。遺構実測と柱穴等の補足調査の後、発掘区の西壁に沿って断面観察用の幅1.5mのトレンチを設定し積土並びに下層遺構の確認作業を行った。12月中旬に土層剥ぎ取りを行った後、九州大学工学部の林重徳助教授（現 佐賀大学教授）に土木工学的見地からの検討をお願いした。調査を完全に終了したのは12月末日で、翌年1月中旬に埋め戻し作業を行った。調査が長期化したのは例年にない長雨と緊急調査を優先したことによる。

既往の調査

水城跡の発掘調査についてはこれまでに福岡県教育委員会、太宰府市教育委員会によってかなりの箇所が実施されている。その中で東門跡付近については第38図に示すように第5次（1975年）、第8次（1977年）、第10次（1978年）、第16次（1988年）、第18次（1990年）の計5箇所の調査が行われている。第5・8・10次については福岡県教育委員会、第16・18・22次調査については太宰府市教育委員会によるものである。この他に昭和5年の国道3号線拡張工事に伴う

木樋の調査等がある。

木樋は国道の拡張工事中にその木樋の一部が偶然に発見されたため、その延長部を確認するため4箇所にはトレンチが設定され発掘調査が実施された。その結果、木樋は全長79.5mであることが確認された。第5次調査は水城跡環境整備事業に伴って、その基礎資料を得るために実施されたものである。昭和5年に発見された木樋の再確認調査と土塁の外側（博多側）の外堀遺構の確認調査が行われた。この結果、木樋は蓋および側板の残存状況は必ずしも良好ではなかったが、底板については極めて保存状況が良好であった。しかしながら排水口については想定位置に小さな祠があるため、その隣接地にトレンチを設定し調査しているが木樋の端部や排水口を再確認するまでには至っていない。この調査区からは8世紀代に造られた排水施設が検出されている。丸瓦と平瓦を組み合わせた「L」字状を呈する溝で、木樋とは直接的な関連はなく近くに何らかの施設が存在していた可能性が考えられる。また断面の断ち割り調査により基底部外側は奈良期の後半に修理が行われており、当初はまだ低かったのではないかと指摘・判断がなされている。外濠については3箇所に設定したトレンチで幅68mの水濠であることが判明した。この結果から、これまで不明であった水城の「貯水」について解決がなされた画期的な調査となった。

第8次調査も環境整備に伴う調査で、調査地は四王寺山から延びる小丘陵の裾部にあたり土塁と接続する地点である。このすぐ西脇は東門推定位置になる。このような場所的状況から、望楼等の施設が存在していたのではないかと意見があった。調査の結果、それに類する遺構はなく、また水城に関するものも検出されていない。

第10次調査は木樋取水口に接する地域である。ここからは井戸1基が検出され、井戸中から土器が出土し、そのうちの1点に「水城」銘のある墨書土器が発見され注目された。この土器は8世紀後半代のもので、文献資料の少ない水城にとって貴重なものとなった。

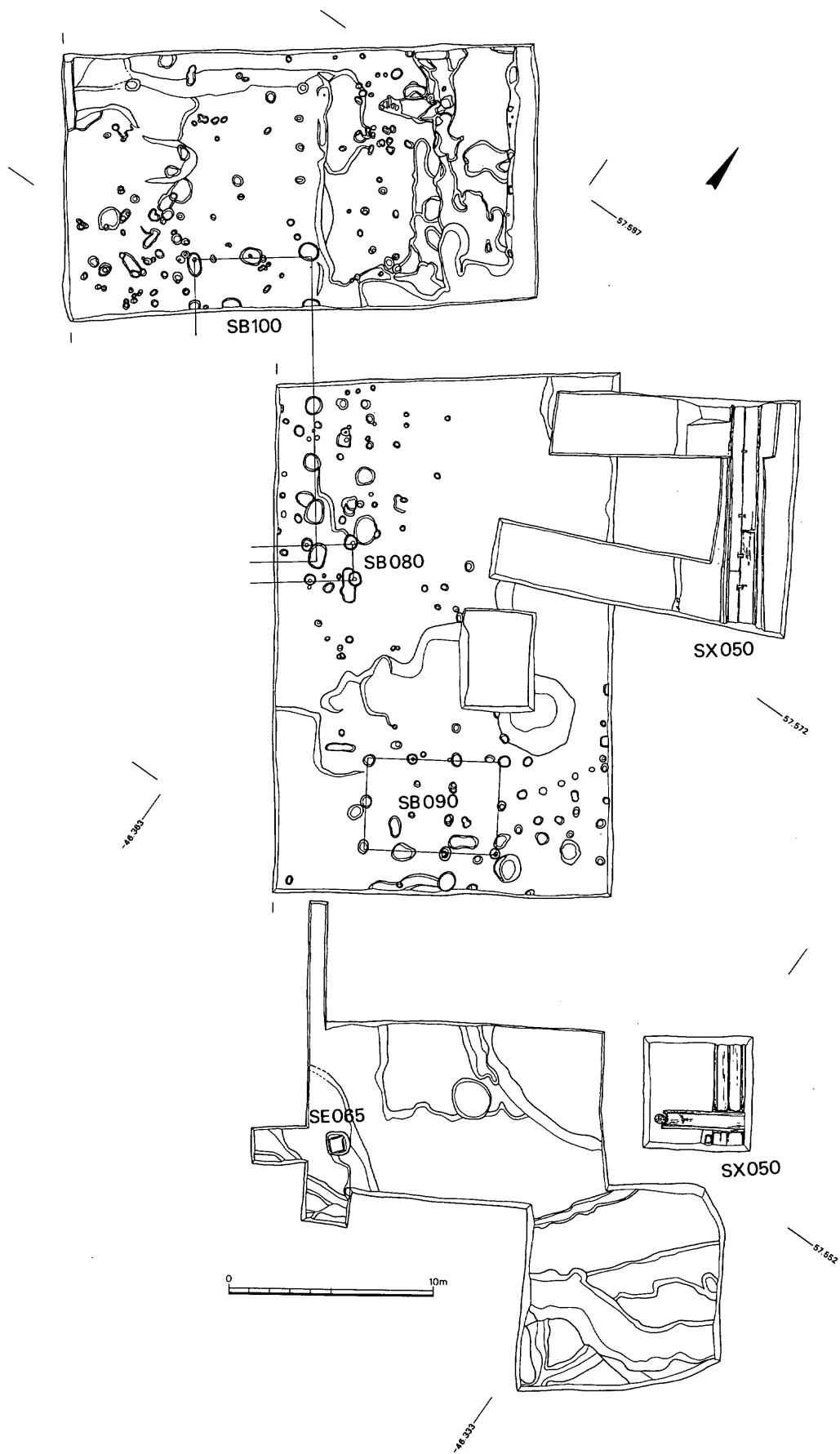
この外に昭和43年度に福岡市水道工事の調査で柱座を有する礎石1個を検出した。この礎石については東門推定地に隣接していることから、門建物に使用された可能性が強い。

16・18・22は太宰府市教育委員会による調査である。これについては今年度報告書が刊行される予定であるので、ここでは省略する。

以上、東門跡付近の既往の調査結果について概略を記した。

検出遺構

水城の土塁は幅80mの基底部とその上部構造としての本体とからなる。本体幅約35mで、基底部の空間は内側が広く約40mあるのに対して外側は約5mと狭くなっている。これは防衛上の理由によるものと考えられるが、内側の広い空間については以前より建物等の施設が存在するのではないかと諸説が出されていた。今回の調査もこれらの問題について何らかの解決の糸口

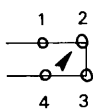


第43図 水城跡第5・8・10・24次調査遺構配置図

を見つけるのが主たる目的であった。東門跡に近接した場所であり最も可能性のある所として期待していた。

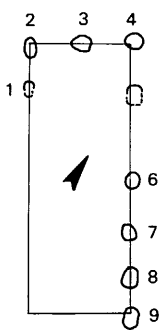
検出した遺構は掘立柱建物3棟、それに土塋とピット群である。土塋およびピットの多くは近世以降のものである。先述したように層序の関係は盛土・旧表土を除去すると暗褐色土層面が表れ、その下層に基底部積み土の最上面が露出する。この積み土面は南に向かってゆるやかに傾斜しており、北区の北端と南区の南端では1.7m前後の高低差がある。北区では中央より西側は深い攪乱があり、その攪乱層を除去後に掘立柱建物SB100の柱掘形を検出する。多くの土塋・ピットは遺物包含層である茶褐色土層・暗褐色土層を切り込んでおり、14・5世紀以降即ち近世および現代のものであるが、北区の西半部および南区の南端部では中世のものであるSB085やSK091等がそれである。

掘立柱建物



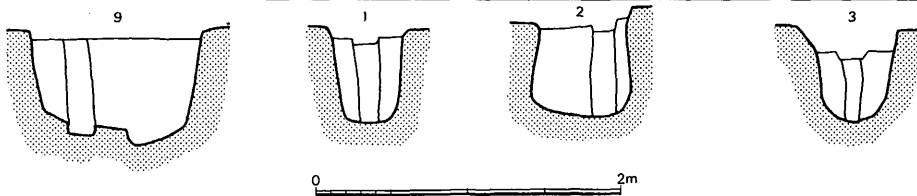
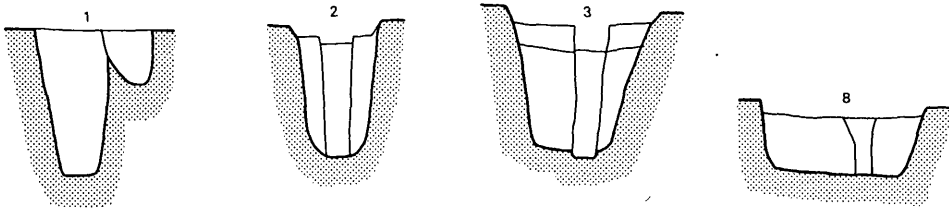
SB080 SB100と重複する東西方向の建物である。梁行1間で桁行については1間分を検出したが更に発掘区外の西方に延びている。SB100とは柱掘形の切り合い関係がなく先後関係は明らかでない。柱の痕跡は4個とも明瞭に残り柱位置を知ることが出来る。柱間は梁行2.25m (7.5尺)、桁行1.75m (6尺) である。柱掘形は径0.5m前後で柱の径も0.15mとSB100に比較すると一回り小さい。これに類する建物はこれまで大宰府の調査では例がない特異な性格を持った建物と考えられる。

SB090 発掘区の南側で検出した2×3間の東西棟建物である。柱掘形は径0.4m前後の不整形のもので、梁行総距離4.5m、桁行総距離6.5mを測る。柱の痕跡はなく、柱間は一定ではなく等間ではない。埋土の状況等からみて中世～近世のものと考えられる。



SB100 発掘区のほぼ中央部で検出した2×6間の南北棟建物である。建物の西半部は発掘区域外になるため柱掘形は未確認である。柱掘形のプランは隅丸方形や長円形を呈しており必ずしも一定していない。大きさは概ね1m前後で、深さは残りの良いもので0.8m前後ある。柱掘形が検出された部分が大きく攪乱を受けた所であることを考慮すれば、少なくとも1.5m位の深さがあつたものとみられる。柱位置が知れるものは左図の柱番号2・3・8・9である。この残存する柱位置から柱間距離を計ると梁行総距離5.70m、柱間2.85mである。柱間を9.5尺等間とすると単位尺0.30mが得られる。また、桁行総距離は14.8m、柱間2.47mである。柱間を8.5尺等間とすると単位尺0.291mとなる。両者の平均値を求めると単位尺0.295m前後となろう。

柱の径は約0.2mで、掘形の埋土も叩き締められた痕跡もみられず土層の違いもみられない。掘形ないし柱穴の底面を比較すると、桁行において北端と南端では約0.3mの高低差があり、南に行くにしたがって下がっている。(第45図参照)この理由については定かではないが、積み土



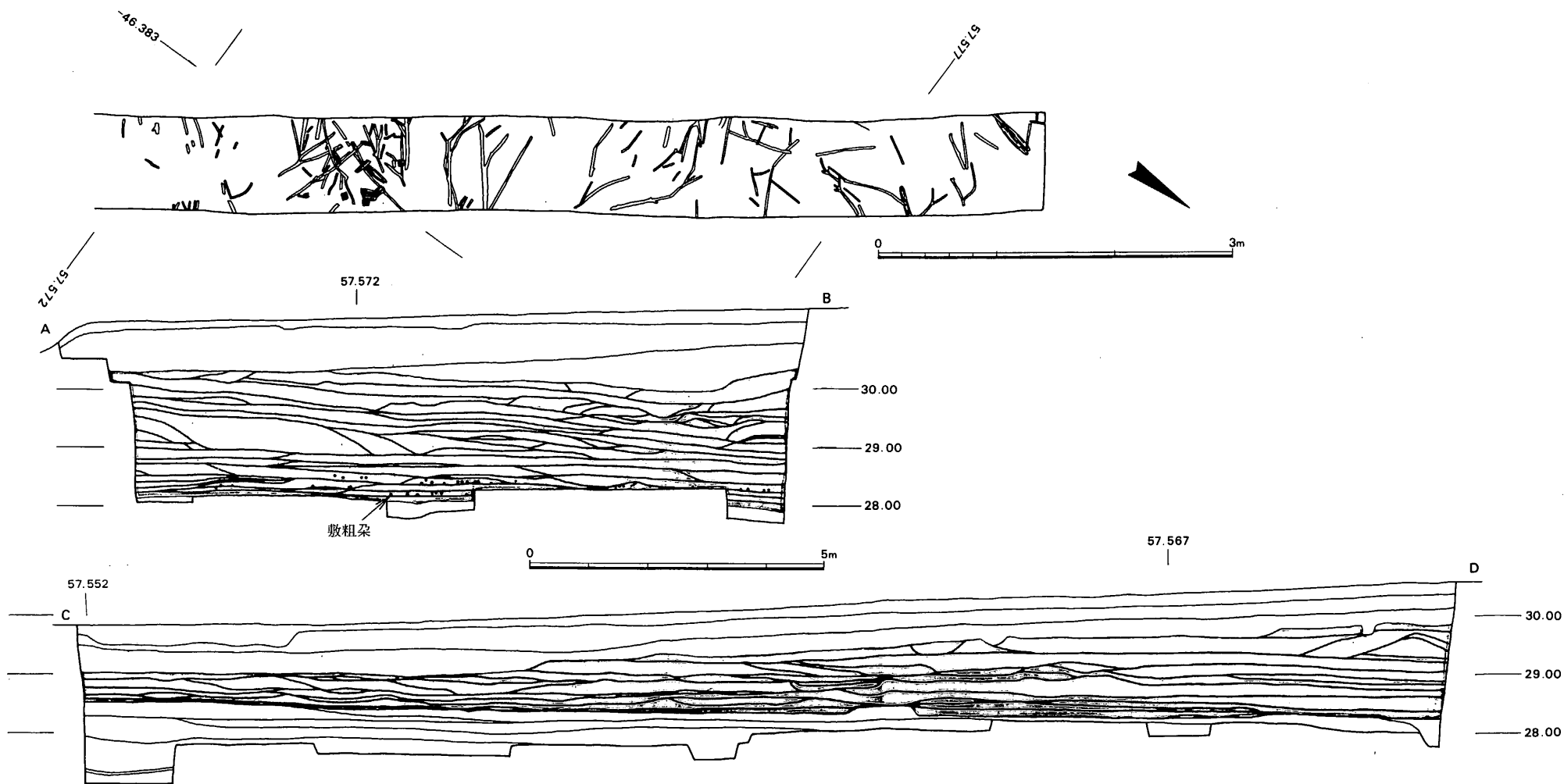
第44図 SB080・100柱掘形断面図

の上面が本来南に向かって若干傾斜を持っていたとも考えられる。

基底部の積土について

発掘区の西壁に沿って幅約1.5mで基底部を南北に断ち割り、積土の土層観察を行った。トレンチの長さは約37m、深さは北区で現地表から約3.6m（部分的）、南区で約2.5m（部分的）を調査した。その結果、全長において積土を行う以前の旧地表面を確認する事が出来た。

先述したように、発掘地は全体に環境整備による土盛整地がなされている。現状は農道を境に北側が約0.3m高くなっている。この高低差が本来のものなのか、後世のものなのか調査開始前のひとつの疑問であった。調査の結果、北区の南端近くで大きく削平されており段状をなしていることが判明した。農道の北側と南側には現状でみられるような段差はなく、ある時期（近世以降）に南側が削平された為に生じた段差であるとの結論を得るに至った。盛土を除去した後の旧表面をみると、北区の北端（土塁本体の付近）と南区の南端（基底部の南端）との高低差は約1.5mある。即ち南に向かってゆるやかであるが、傾斜をもっていることが第45図よりわかる。積土の上面は北区の北端では現地表下約1mの所で確認でき（西壁部分は攪乱を受けているので本来はこれより約0.3m程高い）、南区南端の積土上面との高低差は約1m（1.3m）ある。農道より南側がかなり削平を受けていることは先述したが、本来はほぼ水平であったのか、それともかなりの傾斜を有していたのかは詳らかにし得ない。一方、積土の下面（土塁が構築された時点の旧表土面）はどうであろうか。北区の北端と南区の南端との高低差は僅かに0.1mで、ほぼ水平に近い。この水平になった旧地表面についてどのように解釈したらよいのであろうか。これには現段階で二つのことが考えられる。その一つは、積土を行うにあたって旧地表



第45図 基底部下位敷粗朶平面図・土層図（アミかけの部分積土）

面を水平に成形した。もう一つは、この地がもともと水平な面を成していた。例えば水田として利用されていたと考えられることである。旧地表の土質を観ると軟弱なものであることが、一見して分かる。南区のほぼ中央部分で幅約1m、高さ約0.2mの高まりがある。この高まりを境に旧地表の土色・土質が明瞭に変わる。高まりより南側は灰色の粘土層であるが、北側黒褐色の腐植土層で、極めて軟弱である。厚さは約0.2m程で、その下層は砂質土層となる。水田として利用されていたのかは詳らかではないが、土塁を構築する地盤としては最適とは思われない。この軟弱な地盤であった為か、積土の最下層の厚さ約40cmに樹木枝葉（粗朶）を敷いている。敷かれた範囲は本体の近くから北区の12mの部分にみられる。林先生のご教示によれば、この枝葉は軟弱な地盤面上に敷設される「敷粗朶」の域を越えており、それは「補強土工法」そのものであり、さらに崩壊に対する安定性を構築の当初から考慮し得た高度の技術をもった者による指導があったことが示唆されると言われる。

積土は一般的に言われる「版築工法」とは異なり、個々の層が厚く、叩き締めが必ずしも行き届いていない層もある。基本的には砂質土と粘質土を互層に積み重ねているが、規則的な水平な線とならない部分もある。特に北区の北側、即ち本体の近くではそれが顕著にみられる。全体を通してみられる層として黄色粘質土と花崗岩のバイラン土を混ぜ合わせた土質のものがある。この層は南区においては約30cmの間隔でほぼ水平な状況で3層みられ、北区においてはその間隔は一定ではないが4層みられる。この層は堅くしまっており、特に北区においては厚く積まれ、北端部（本体の近く）では鋤の刃が立たないくらいである。このような状況からみて工法上、この質の土をある程度の間隔をもって積むことが基準としてあったのであろう。本体に向かって各層の線が傾斜し、堅く締まっているのは本体の土圧によるものであろうと林先生は解釈される。

出土遺物

弥生時代中期前半から15世紀までの遺物の出土があった。1は積土中から、11・14は表土中から、その他は暗褐色土または茶褐色土の包含層の中から出土した。

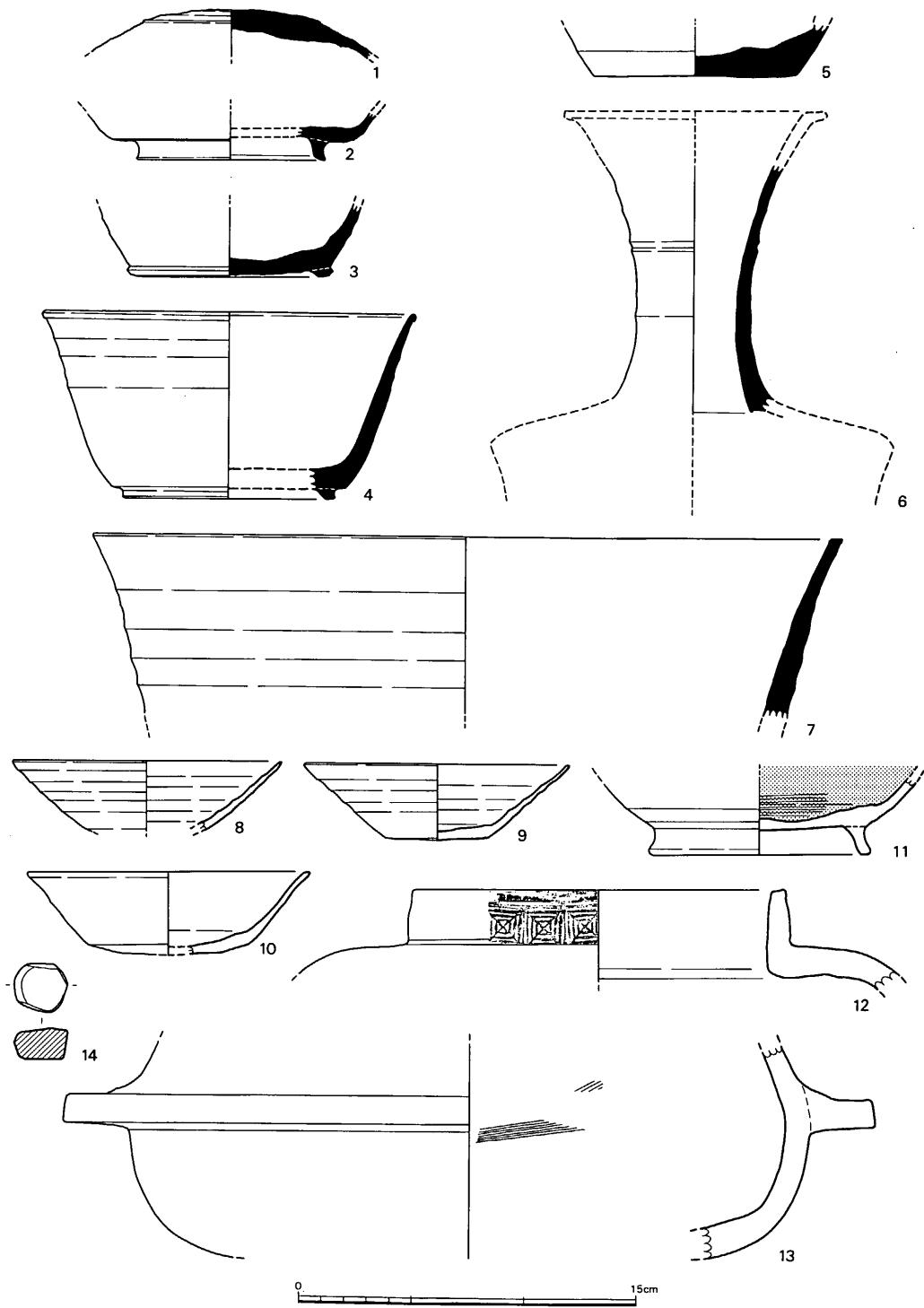
須恵器（第46図、図版42）

杯蓋（1）杯蓋の天井部片である。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他はヨコナデ。外面の天井部と口縁部の間にはヘラ状工具による平行する5～6本の沈線がある。

杯（2・3）高台付きの杯である。3は底部外面がヘラ切り未調整で、底部の端に高台を貼付する。

碗（4）高台付きの碗。口縁端部をわずかに外方に巻き込み玉縁状とする。

壺（5・6）5は底部片である。外面は回転ヘラケズリ、内面はヨコナデ調整で底部外面に板状圧痕が残る。胎土は精良である。6は長頸壺の頸部で一条の沈線が入る。内外面に絞りの痕跡



第46図 各層位出土土器・瓦製品実測図(1)

が認められる。

鉢（7） 体部はほぼ直線的に開き、口縁端部は平坦面である。

土師器（第46図、図版42）

杯（8～10） 8・9は直線的に薄く仕上げられた体部にヨコナデによる凹凸がある。9は底部を糸切り離しする。胎土は極めて精良である。10はヘラキリ未調整で底部外面に板状圧痕がわずかに残る。

椀（11） 高台付きの椀。外面は回転ヘラケズリで、内面をヘラミガキ調整する。

瓦質土器（第46図、図版42）

鉢（12） 丸味をもつ体部に直立する口縁が付く。雷文に×を組み合わせた文様を押印する。体部外面はヘラミガキ。

茶釜（13） 浅めの体部に幅の広い鏝を付ける。外面は鏝より上をヨコナデし、下は丁寧に磨く。内面はハケ目調節の後ナデ。外面の鏝以下と内面は黒く燻されている。

土製品（第46図、図版42）

円盤形土製品（14） 平瓦の周縁部を打ち欠き、磨いて仕上げる。

弥生土器（第47図、図版42）

甕（15～17） 15・16は逆「L」字状の口縁をもつ甕の破片である。15は口縁下に断面三角形の16は「M」字状の突帯1条を貼り付ける。16は口縁端部に刻目を施した痕跡が認められ、内外面に赤色顔料を塗布する。2点とも胎土・焼成は良好。17は底部で平底を呈し、体部外面に縦方向のハケ目を密に施す。胎土には粗砂粒を多く含む。

器台（18） 底径が口径を上回る。外面には縦方向のハケ目を施し、底部と口縁部周辺を横方向になでる。内面中央の細くなった部分にヘラ状工具の痕跡が残る。

土師器（第47図、図版42）

甕（19） 「く」字状口縁をもつ甕である。口縁部は横方向にナデ、内面のくびれ部から若干下がったところから下を削る。

器台（20・21） 精製の器台で、口縁端部を上方につまみ上げる皿状の杯部に直線的に広がる脚部を付ける。調整は、21の脚部の外面に丁寧なミガキの痕跡が認められ、内面はハケ目で仕上げるが、その他の部分は風化のため不明。

鉢（22） 手捏ねによるもの。内面はナデで仕上げるが、外面には多数の指頭痕が残る。

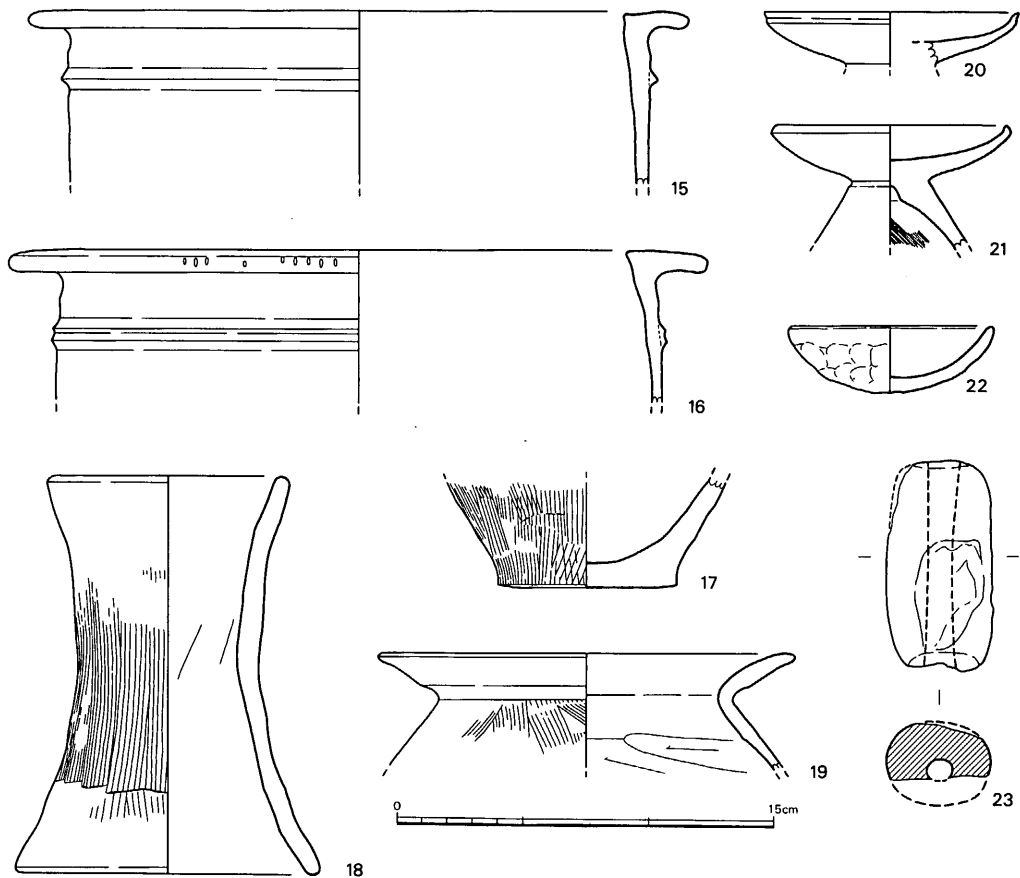
土錘（23） 土錘としては大型のものであろう。やや偏平な形状を呈する。

瓦類（第48図、図版43）

瓦類では軒丸瓦4点・軒平瓦2点と丸・平瓦片の出土があった。量的には極めて少ない。

なお、平瓦凸面の叩打痕に文字があるもの1点が出土している。

出土瓦全体に保存状況は不良で瓦当文様の判定もしにくい状況であった。また、出土状況が



第47図 各層位出土土器・土製品実測図(2)

ら特に問題としてとり上げるべき状況もなかった。

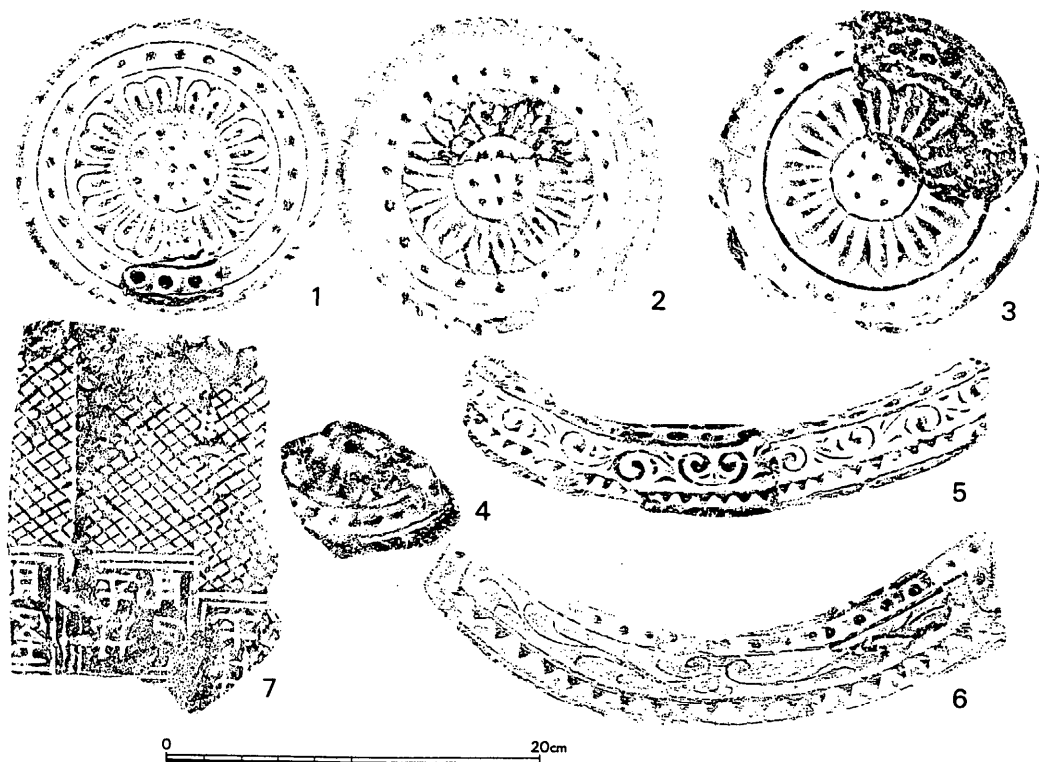
軒丸瓦

1は小破片である。従って確定はしがたいが鴻臚館I式の軒丸瓦であろう。4子の連珠文と複弁蓮華文の1部が残る。

2は中房に2子の珠文と2組の複弁部分を残す。本来は中房の蓮子1+8・複弁11弁・外区の連珠文21の軒丸瓦である。木型の傷痕が小破片ながら数ヶ所認められる。

3は中房の1部と花卉4片と外区連珠文3子を残す破片である。花卉の特徴から、中房の珠文1や6・単弁14弁・外区蓮子25子の軒丸瓦と考えて良い。

4は複弁蓮華文の軒丸瓦である。表面が磨滅し文様の細部まではわからない。外区の珠文は1~3に比較し密に配置されている。



第48図 出土軒丸・軒平・文字瓦拓影

軒平瓦

5は鴻臚館I式軒平瓦の中心飾部分の破片である。顎の長さ6.5cmほどの段顎の瓦であるが丸瓦部凸面は横方向にすり消されている。

6は唐草文が細かく表現されている特徴がある。他例では脇区の蓮子まで文様を残すが今回出土のものは脇区は削りとられこの状況で右端となっている。

文字瓦

『平井瓦屋』の四文字が左右逆字で陰刻されている。四文字の外周は二重の方形の枠が陰刻されている。長手の叩打具の1部に文字を配置したもので文字の配置部分の外側は比較的端正な斜格子文となっている。粘土板の合せ目および分割裁面が凹面に残る。

小結

水城跡についての発掘調査は前記のように東門跡付近だけでも、これまでに計10箇所の調査を実施している。これらの調査によって新たな発見や幾つかの問題を解決し得るような新事実が明らかにされている。同時にこれによって生じた問題や課題も少ない。前者としては木

種の発見があり、また長年の疑問であった『日本書紀』に記載されているところの「水を貯えしむ、名づけて水城と曰う」の解釈について、その結論が得られたことである。即ち、土塁の外側で幅60mの濠が検出されたことである。後者としては、木樋への導水がいかに行われたか、その構造はどのようなものであったか、何箇所に付設されていたのか等々、問題を提示すれば限りなく広いである。今回の調査の主目的であった基底部分における施設の解明も残された諸問題のひとつであった。以下、今回の調査で検出した遺構について若干の検討を試みて結びとしたい。

今回、検出した主たる遺構として建物3棟があるが、これについて検討してみよう。

3棟の建物は時期的に3期に分けられる。古期に属するのはSB080とSB100である。この2棟の建物の先後関係についてはあきらかではないが、柱掘形をみればSB100が先行するとみられる。いずれも方位的には同一で、土塁本体の方位とほぼ同じである。土塁本体の方位はG、Nより西に約37度偏しており、建物もこの方位に合わせたものと考えられる。このことは土塁本体に対しての意識があったことを伺い得るもので、土塁が認識され機能していた時期に建てられたと考えて差し支えなからう。次に問題になるのは建築された年代であろう。即ち土塁創設期に伴うものか、それとも時期的に下るものか、それを確定する柱掘形からの土器等の出土はない。十分な根拠はないが柱掘形の大きさや埋土の状況をこれまで大宰府周辺の調査で検出した7世紀中頃後半のそれと比較検討してみると、規模的に小さく、またその形状も不整形で埋土の状況も雑である。このようなことから判断すると時期的にやや下ったものと考えられる。

建物の年代に関して、ある程度考慮出来るものとして過去に調査した第10次の調査成果がある。先述したように、ここでは8世紀後半代の井戸1基(SK065)が検出されている。この井戸がどのような使われかたをしているのか、他に顕著な遺構がなかったこともありこの時点では明確ではなかった。しかし、今回の調査で基底部分上の近い距離に建物が検出されたことにより、この井戸と密接な関連が考えられるようになった。井戸の年代からSB100は8世紀後半代には存在していた可能性が強い。第10次調査時に既に指摘されていたことではあるが、『続日本紀』の天平神護元年(765)三月辛丑条に少式従五位下采女朝臣浄庭を「修理水城専知官」とした記事がみられる。この時期、唐における安祿山の反乱が伝えられ、新羅の討伐の計画や大宰府も辺戍の不安を訴える等、軍事的に緊迫した状況がみられる。このような政情不安の中で修理・補強を迫られたと考えられる。SB100とSB080の性格等については明確ではないが、これらの事情と何らかの関係があったとみることはあながち否定できないであろう。SB090については出土遺物からみて14～15世紀代と考えられ、水城との直接的な関連は今のところ見だし得ない。

次に基底部分の積み土についてみてみよう。これまで基底部分についても版築工法による手法がなされたと表現していたが、一般的に言われる築地や大野城の土塁の状況とは明らかに異なっており、ここでは積土との表現を用いた。積土の状況については先記したのでここではふれな

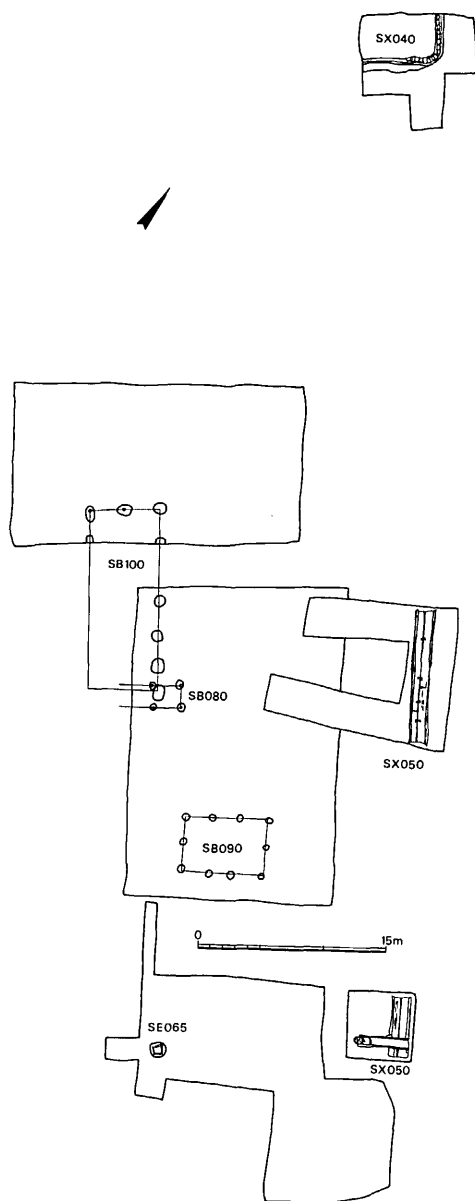
いが、積み土の最下部と構築以前の旧地表を約40mにわたって明らかにし得たことは大きな成果であった。東門跡付近ではこれまで堅い地盤の上に構築されていたと考えていたが、予想に反してかなり軟弱な所に構築されたことが明らかになり、その為に高度な技術を駆使したものであることが認識されるに至った。第5次調査で指摘された基底部の外側における積み土の修理と嵩上げについては、今回は認められなかった。当然に補修は施されたと考えられるが、後世に積み上げ高くしたとする意見については今後検討の余地があろう。

出土遺物については今回は点数も少なく、多くは遺構上面を覆う茶褐色土層と暗褐色土層のいわゆる包含層からのものである。また積み土中にも若干であるが弥生期や古墳期の土器の小破片がみられる。このことは土塁の構築にあたって、土取りされた所に遺跡が存在していたことを伺わせるものである。

以上、幾つかの事柄について若干の検討を試みた。先にも述べたように水城の構造を土木工学的な目でみることについてはこれまで余り十分ではなかった。その点については今回、林先生の協力を得ることが出来、その方向性がみつかったように思う。今後に残された問題や課題も多い。

参考文献

- 長沼賢海・鏡山猛 「水城大樋の調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第七輯』1932
 鏡山猛 「大宰府都城の研究」1968風間書房
 福岡県教育委員会 『水城—昭和50年度発掘調査報告』1976
 福岡県教育委員会 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXVI—水城跡の調査』1978
 九州歴史資料館 『水城—昭和51・52・53年度の発掘調査概報』1979



第49図 水城跡第5・8・10・24次調査模式図

圖 版



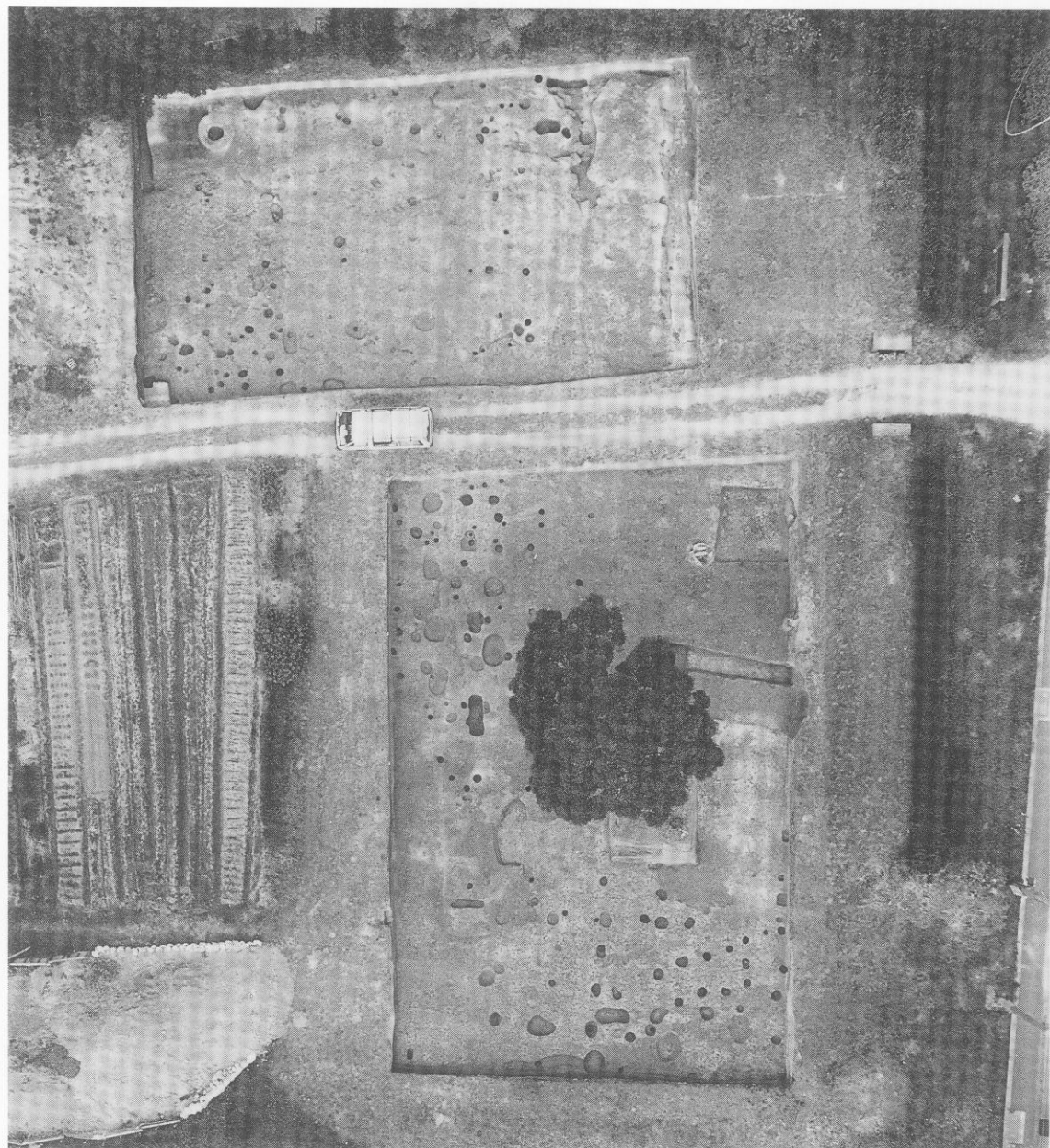
(左上) 水城跡第20次調査区全景 (北東から)

(右上) Aトレンチ全景 (西から)

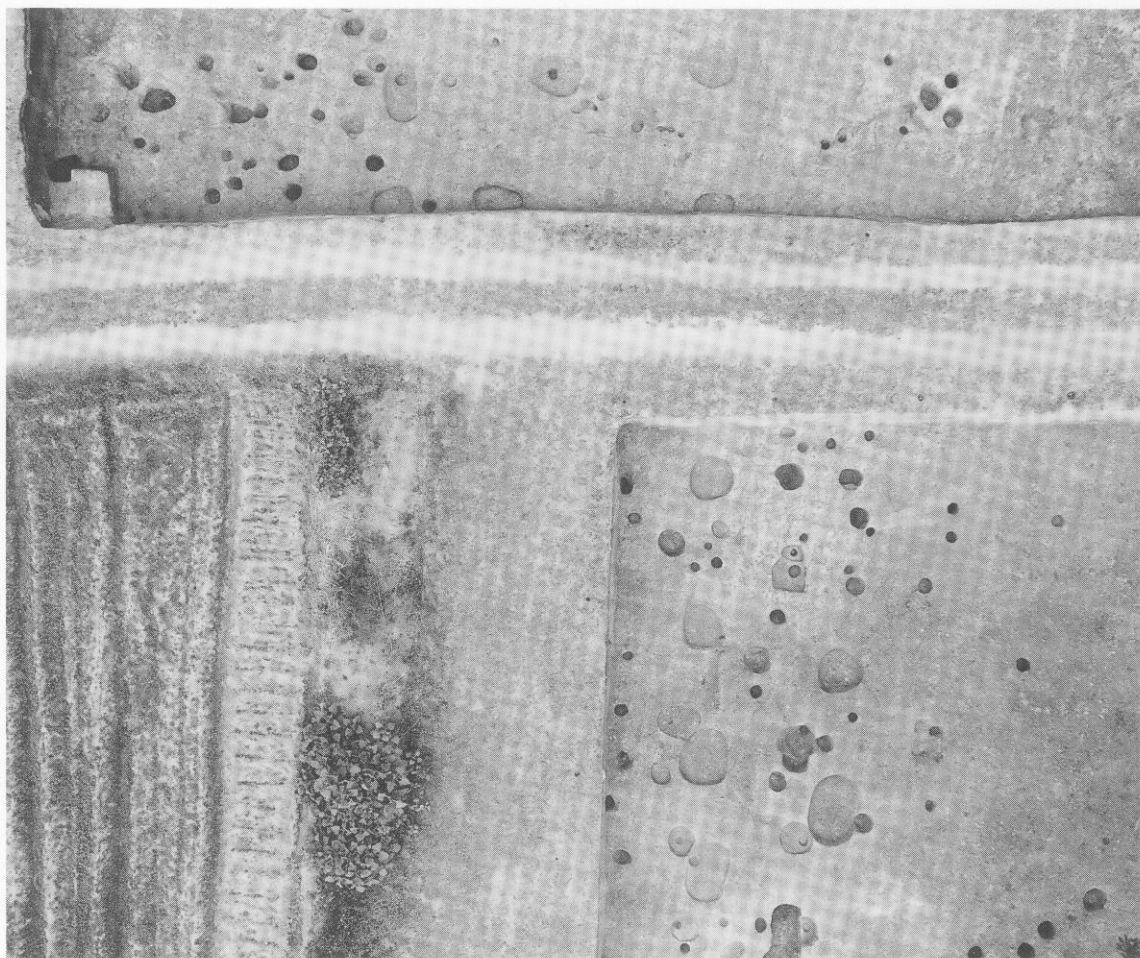
(右下) Bトレンチ全景 (北東から)



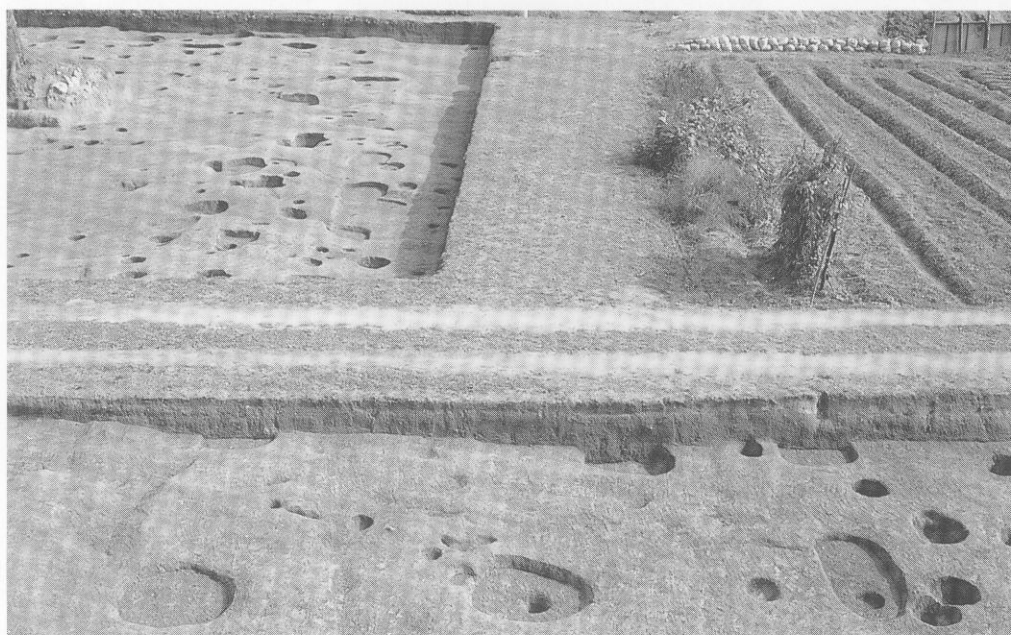
水城跡全景 遠くに大野城跡を望む（空中写真 西から）



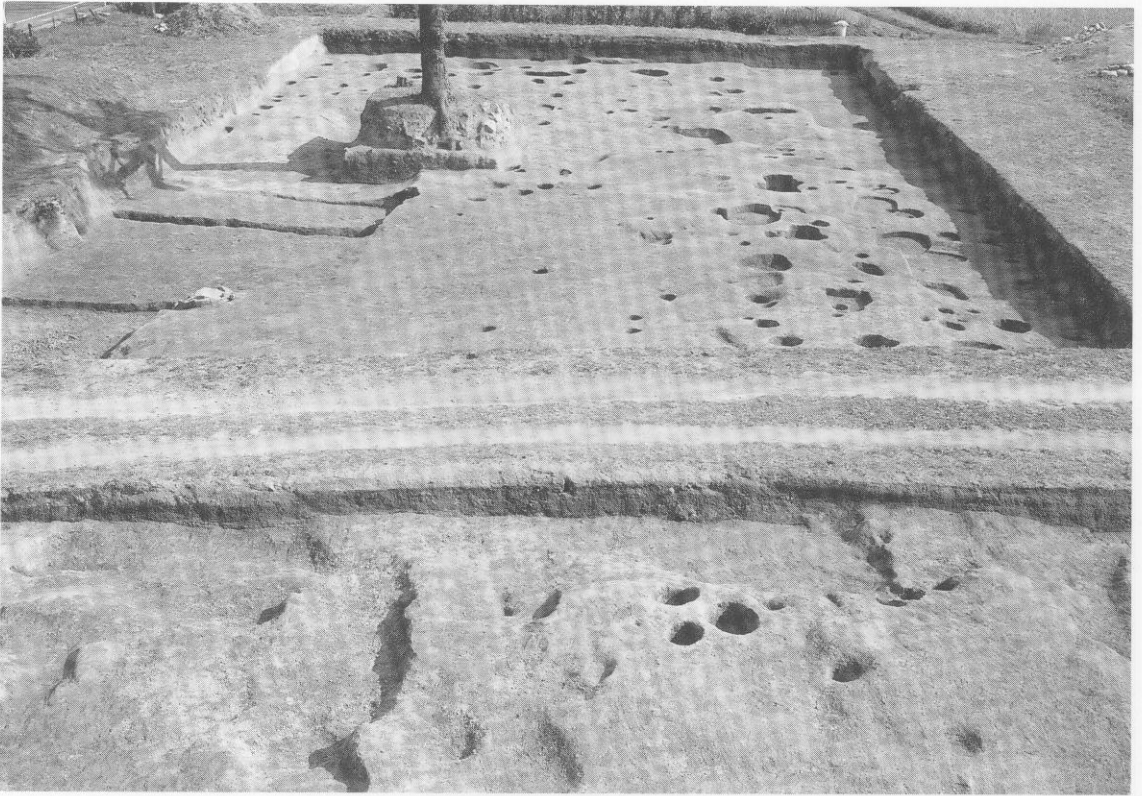
水城跡第24次調査区全景（空中写真）



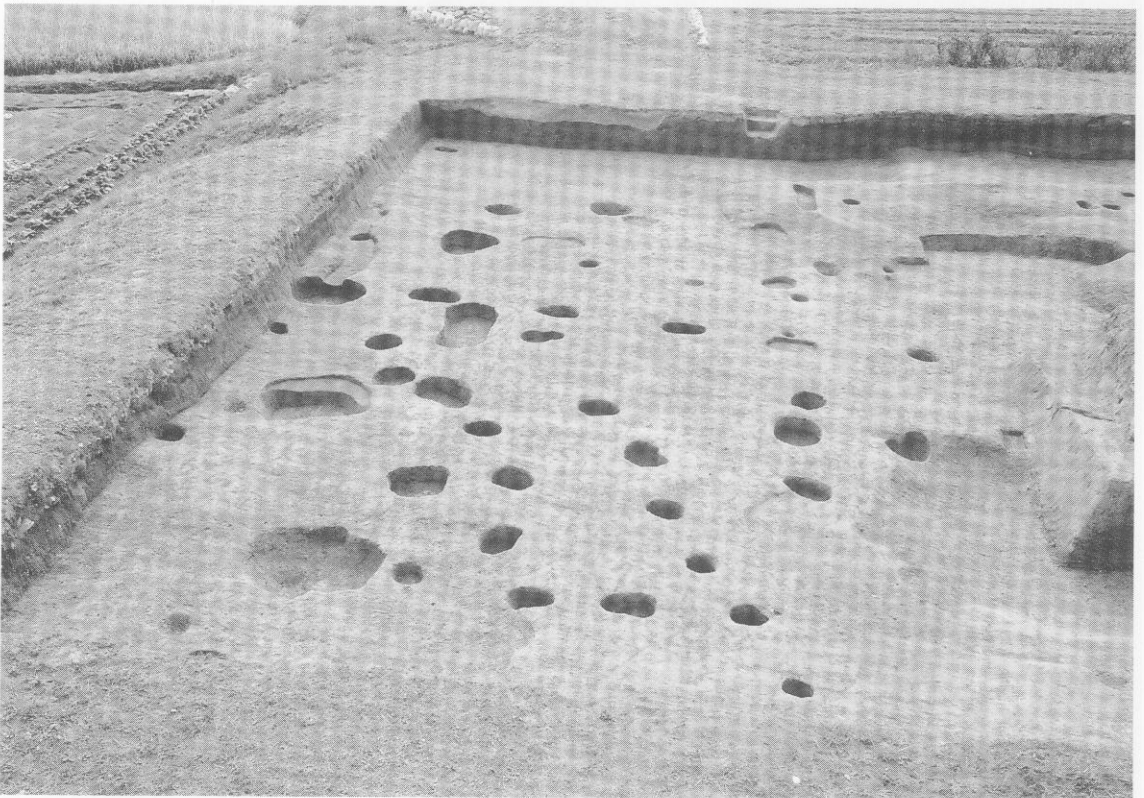
掘立柱建物SB080・100（空中写真）



掘立柱建物SB100（北から）



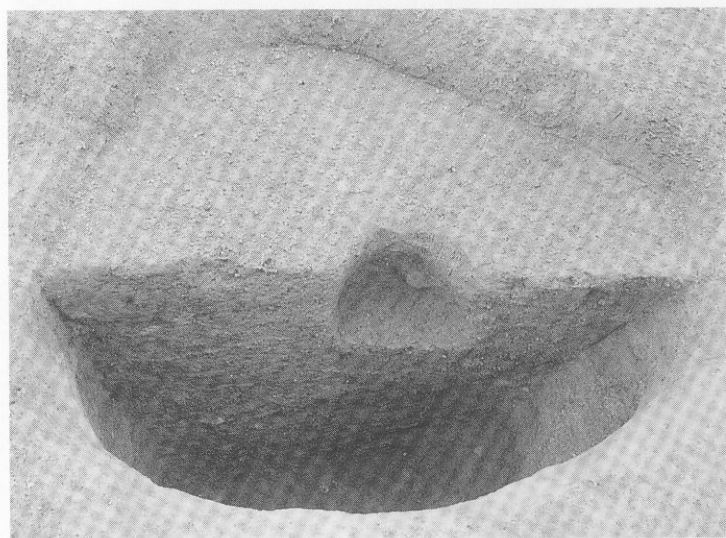
発掘区南半部（北から）



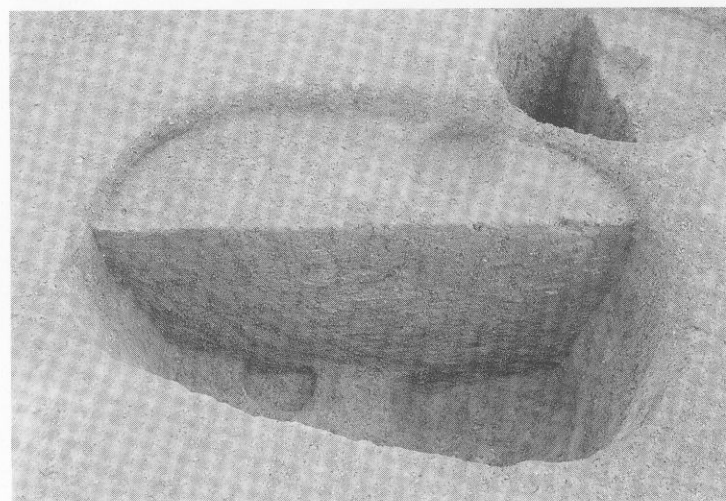
掘立柱建物SB090（東から）



掘立柱建物SB080柱掘形(2)



掘立柱建物SB100柱掘形(3)



掘立柱建物SB100柱掘形(9)



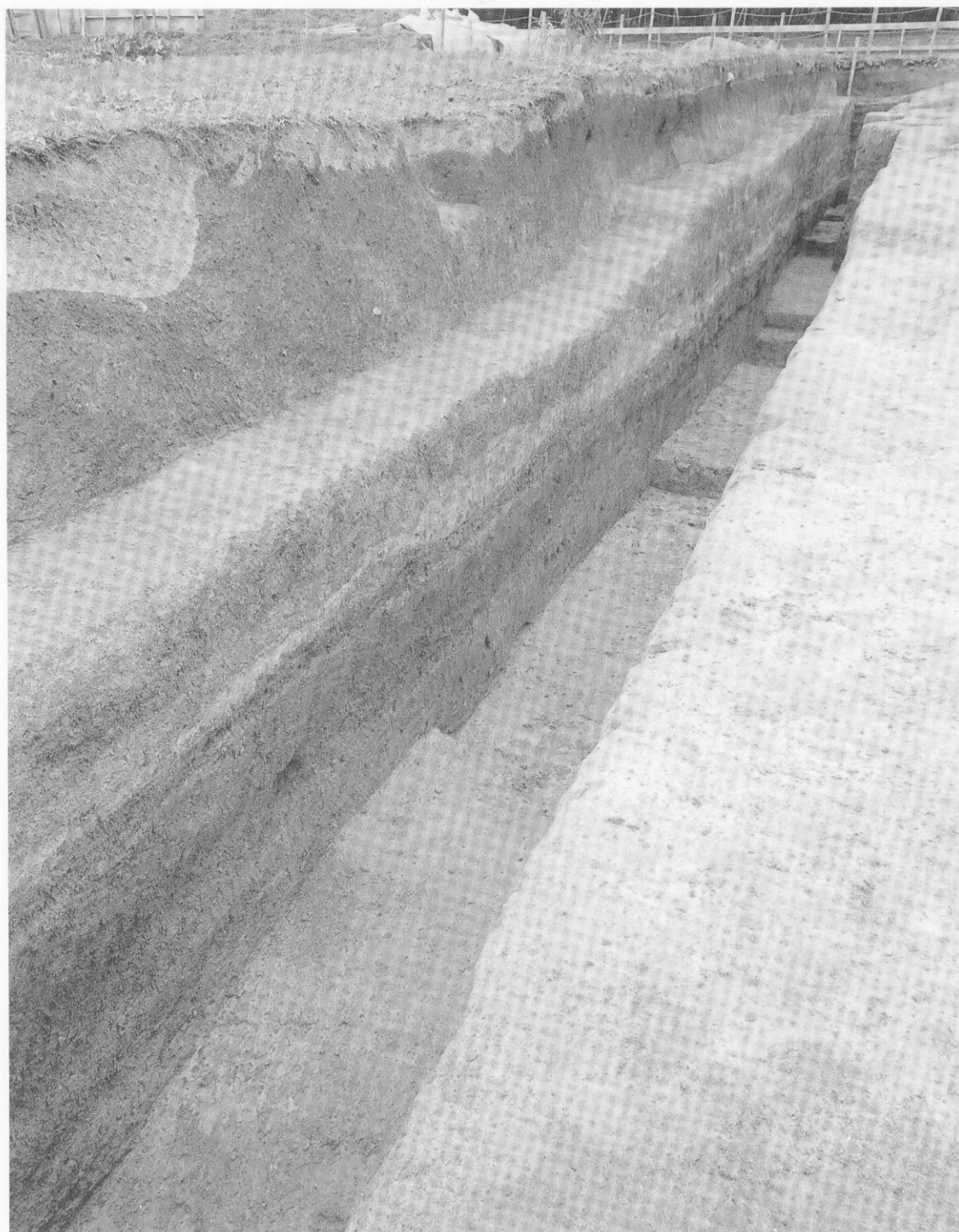
北区 西壁断面全景（南から）



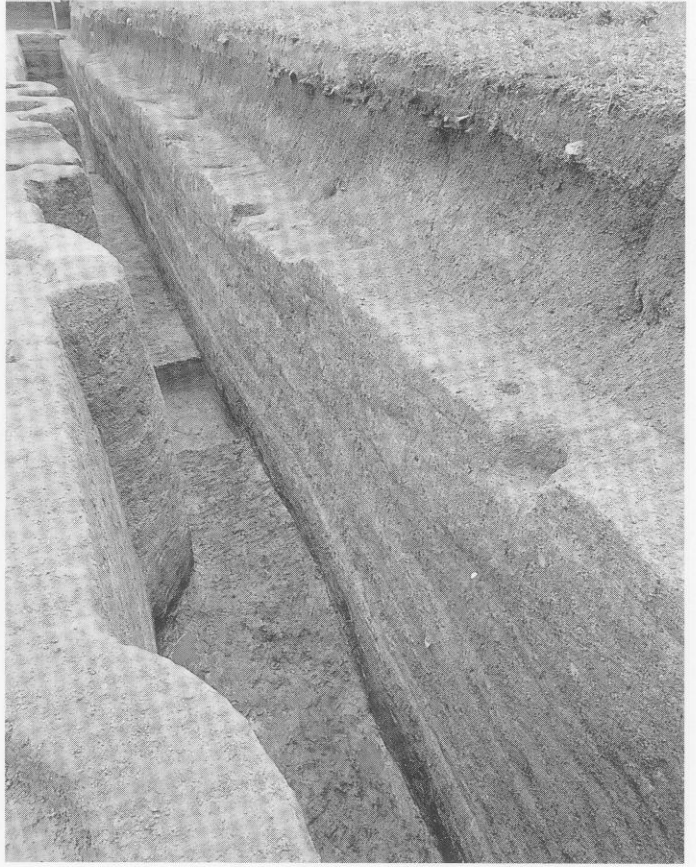
北区 粗朶出土状況（南から）



粗朶出土状況近景



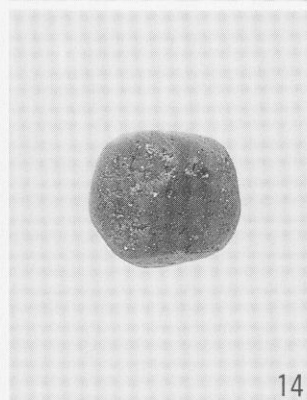
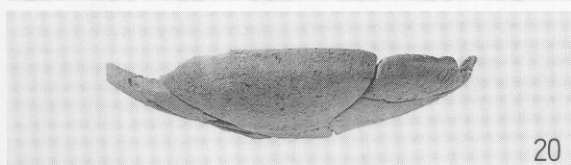
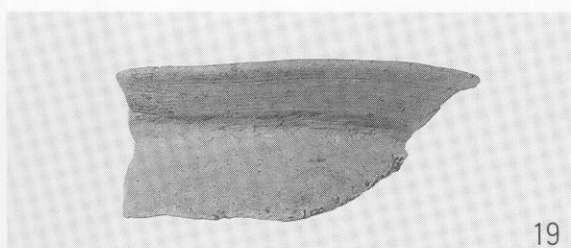
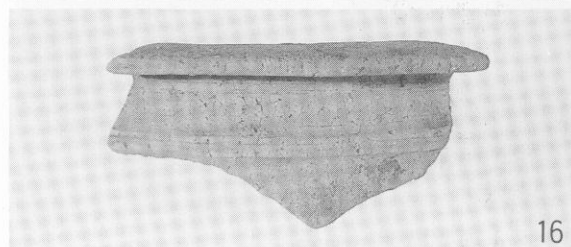
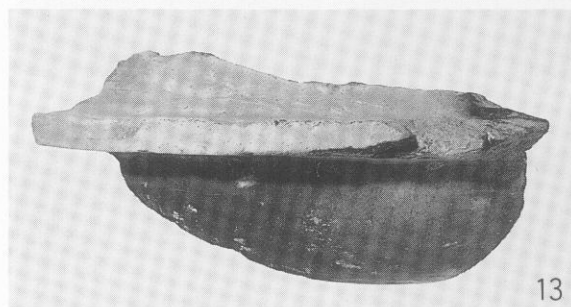
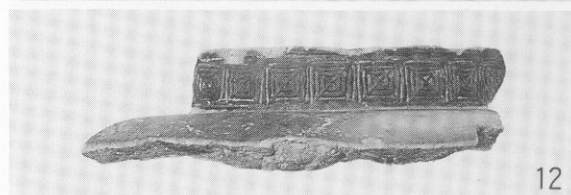
南区 西壁断面全景（南から）



南区 西壁断面（北から）



南区 西壁断面（部分）

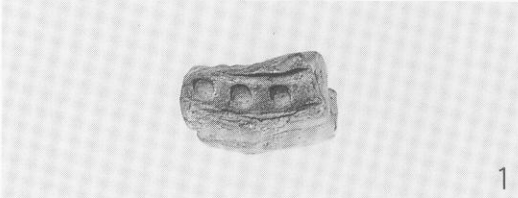




1



5



1



6



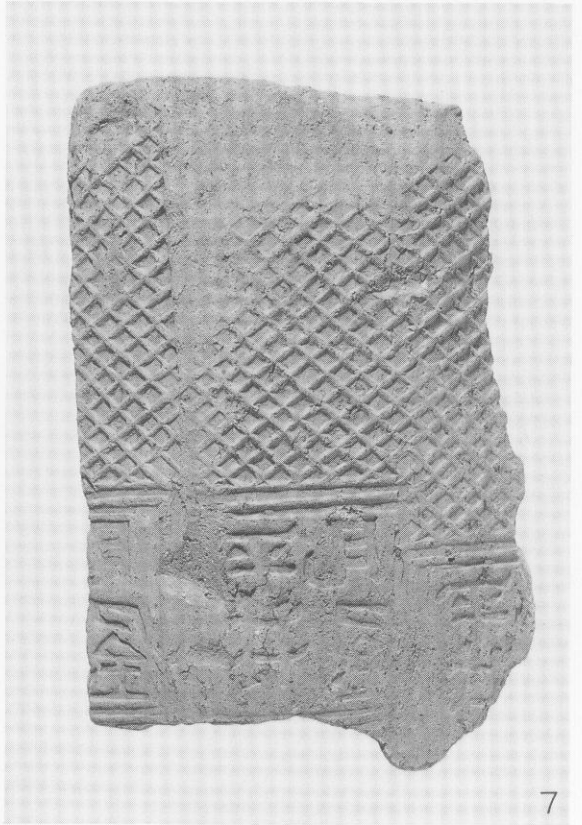
2



3



4



7

水城跡第20・24次調査出土瓦類

フリガナ	ダザイフシセキ						
書名	大宰府史跡						
副書名	平成5年度 発掘調査概報						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	栗原和彦、横田賢次郎、小田和利、吉村靖徳、小川泰樹						
編集機関	九州歴史資料館						
所在地	〒818-01 福岡県太宰府市石坂4丁目7番1号						
発行年月日	1994年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
だざいふしせきだいじ 大宰府史跡第96次 補足調査	ふくおかけんだざいふし 福岡県太宰府市大字観世音寺 1180番地		33°30'50"	130°30'45"	19930625～ 19930728	200m ²	住宅建設に伴う事前調査
だざいふしせきだいじ 大宰府史跡第147次 調査	だざいふし 太宰府市大字観世音寺 323番-1・2		33°30'50"	130°30'55"	19921008～ 19930210 19930414～ 19931022	1300m ²	住宅建設に伴う事前調査
だざいふしせきだいじ 大宰府史跡第152次 調査	だざいふし 太宰府市大字観世音寺321番-5		33°30'50"	130°30'50"	19931027～ 19931107	140m ²	住宅建設に伴う事前調査
みづきあとだい 水城跡第20次調査	だざいふし 太宰府市大字国分195番地		33°31'10"	130°30'00"	19920109～ 19920124	20m ²	現状変更に伴う事前調査
みづきあとだい 水城跡第24次調査	だざいふし 太宰府市大字国分226番地他		33°31'10"	130°30'00"	19930311～ 19931225	600m ²	計画調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府史跡第96次補足調査	官衙 居宅跡	奈良時代	掘立柱建物 2棟 柵 1条 その他溝、土塀など		官人居住区西側の建物を明らかにした
大宰府史跡第147次調査	官衙	奈良時代	掘立柱建物 6棟 柵 2条 溝 3条 道路状遺構	須恵器、土師器 陶磁器、瓦	官衙地区の南限を明らかにする施設を検出した
		平安時代	掘立柱建物 3棟 井戸 5基 その他溝、土塀など		
大宰府史跡第152次調査		奈良時代	柱穴多数	須恵器、土師器、陶磁器	
水城跡第20次調査	防塁跡	白鳳時代	土塁	瓦	水城東門側の基底部積土を確認した。
水城跡第24次調査	防塁跡	白鳳時代	土塁	須恵器、土師器、瓦質 土器、瓦	水城基底部に設けられた建物と構造の一部を明らかにした。
		奈良時代	掘立柱建物 2棟 他土塀など		
		室町時代	掘立柱建物 1棟 その他土塀など		

大 宰 府 史 跡

平成5年度発掘調査概報

平成6年3月

編 集 九 州 歴 史 資 料 館
発 行 九州歴史資料館資料普及会
太宰府市石坂4丁目7番1号
印 刷 赤 坂 印 刷 株 式 会 社
福岡市中央区大手門1丁目8-34